

琵琶垣内遺跡（第3次）発掘調査報告

2007. 3

三重県埋蔵文化財センター

序

琵琶垣内遺跡は、これまでに何度か発掘調査が行われておりますが、本書で報告する第3次調査は平成13年度に県営ほ場整備事業に伴って三重県埋蔵文化財センターが実施したものです。

現地での調査は紅葉もひときわ鮮やかな秋真っ盛りの10月に開始しましたが、途中で大雨に見舞われ発掘調査区が水没したり、また冬季には大雪による交通渋滞のために機材の手配が遅れるなど予想外の出来事があり、なかなか予定どりに発掘調査が進行しませんでした。

発掘調査は、現地での十分な最終検討、確認を行い、すべての調査が終了したうえで現地引き渡しを行うのが、本来のあり方です。しかしながら、今回はほ場整備の工期も差し迫っており、工事を遅らせることもできないため、事業部局と協議の結果、調査が終了した部分から順次引き渡すことといたしました。このため、調査現場は工事に追われ、掘る、写真を撮る、実測図を作る、引き渡す、を何度も繰り返す日々となってしまいました。こうした状況の中で現地調査が終了したのは、残寒厳しい2月末でした。

文末になりましたが、発掘調査にあたりましては、県農林水産商工部農業基盤整備課、松阪地方県民局農林商工部、櫛田上土地改良区、財団法人農林水産支援センター、松阪市教育委員会をはじめ多くの方々には、多大なるご支援、ご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

平成19年3月

三重県埋蔵文化財センター
所長 吉水康夫

例 言

1. 本書は三重県松阪市豊原町ほかに所在する琵琶垣内遺跡の第3次発掘調査報告書である。
2. 調査は県営ほ場整備事業（櫛田上地区）に伴い、平成12年度に試掘調査、平成13年度に本発掘調査を実施した。
3. 調査の体制は下記の通りである。
 - ・調査主体 三重県教育委員会
 - ・調査担当 三重県埋蔵文化財センター
 - ・現場作業 財団法人三重県農林水産支援センター平成12年度の試掘調査は、小瀧学、川合圭子が担当した。13年度の本発掘調査は宮田勝功、小瀧学、小林俊之、山岡奈美恵、山崎博史が担当し、遺構実測は、担当者のほかに河北秀実、原田恵理子、金子智子が従事した。
4. 本書作成にかかる報文執筆は河北秀実、小瀧学、川合圭子、宮田勝功が、遺物写真は田村陽一が担当し、全体の編集は河北が担当した。
5. 本書に用いた地図及び遺構実測図は、国土調査法の第VI座標系を基準とし、挿図の方位は全て座標北を示している。なお、当遺跡周辺の磁北は平成11年現在で、座標北からN 6° 30' W振れている。
6. 本書で報告した遺跡にかかる記録図面類、写真および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管・管理している。
7. 土層及び埋土については、現地調査時に付与した名称をそのまま掲載した。土色については、標準土色帖を参考にして色名をつけたが、必ずしも厳密なものではない。また、土質は、肉眼観察によるものであり、土壌調査で一般的に用いられる粒径の区分や土性の区分とは異なった基準で表現している。
8. 本書で用いた遺構表示略記号及び試掘坑略記号は、下記のとおりである。なお、遺構の名称は、遺構の性格を検討した結果、現地調査時点での呼称とは異なっているものがある。

SH：竪穴住居 SB：掘立柱建物 SE：井戸 SD：溝 SK：土坑
Pit：柱穴・小穴 SZ：性格不明遺構 G：試掘調査グリッド
9. 遺構番号については、琵琶垣内遺跡として重複のないように、第1次調査から第4次調査までを通して付与している。遺構番号は報告書作成段階で改めて新番号を付与したため、現地調査時点での番号とは異なっている。

第3次調査における各調査区の遺構番号は下記のとおりである。ただし、第1次・第4次調査等既報告の調査で、番号が付与されている遺構については、それを踏襲している。

A地区 201～283 B地区 301～345 C・E地区 401～404
D地区 411～413 F地区 421～422

本文目次

例言

目次

I	前言	(1)
1	道跡の発見と第1次調査	(河北秀実) (1)
2	第2次調査	(河北秀実) (1)
3	試掘調査の経過	(小瀬学、川合圭子) (1)
4	本調査に至る経過	(河北秀実) (2)
5	本調査の経過	(宮田勝功) (2)
6	調査記録の方法	(河北秀実) (6)
7	出土遺物の取り扱い	(河北秀実) (6)
8	第4次調査	(河北秀実) (6)
II	位置と環境	(河北秀実) (8)
III	A地区の調査結果	(河北秀実) (10)
1	概要	(10)
2	土層	(10)
3	遺構	(10)
4	遺物	(27)
IV	B地区の調査結果	(河北秀実) (38)
1	概要	(38)
2	土層	(38)
3	遺構	(38)
4	遺物	(48)
V	C・E地区の調査結果	(河北秀実) (52)
1	概要	(52)
2	土層	(52)
3	遺構および遺物	(52)
VI	D地区の調査結果	(河北秀実) (56)
1	概要	(56)
2	土層	(56)
3	遺構および遺物	(56)
VII	F地区の調査結果	(河北秀実) (58)
1	概要	(58)
2	土層	(58)
3	遺構	(58)
4	遺物	(59)
VIII	科学分析	(61)
1	琵琶埴内遺跡および山添遺跡における放射性炭素年代測定	(バリノ・サーヴェイ株式会社) (61)
IX	結語	(63)
1	縄文時代の琵琶埴内遺跡	(河北秀実) (63)
2	古墳時代前期の大溝	(河北秀実) (63)
3	古墳時代後半	(河北秀実) (63)
4	奈良時代の壑穴住居と掘立柱建物	(河北秀実) (63)
5	平安時代から鎌倉時代	(河北秀実) (64)
6	室町時代	(河北秀実) (64)

挿 図 目 次

第1図 試験抗配置図	(2)	第16図 A地区出土遺物実測図(2)	(33)
第2図 試験抗平面及び土層断面略測図(1)	(4)	第17図 A地区出土遺物実測図(3)	(35)
第3図 試験抗平面及び土層断面略測図(2)	(5)	第18図 B地区土層図(1)	(40)
第4図 試験調査出土遺物実測図	(6)	第19図 B地区土層図(2)	(41)
第5図 調査区位置図	(7)	第20図 B地区平面図(1)	(44)
第6図 遺跡位置図	(9)	第21図 B地区平面図(2)	(45)
第7図 A-II地区土層図	(11)	第22図 B地区出土遺物実測図	(51)
第8図 A-III・IV地区土層図	(12)	第23図 C・E地区土層図	(53)
第9図 A-V地区土層図	(13)	第24図 C・E地区平面図	(54)
第10図 A-I～III地区第一検出面平面図	(16)	第25図 S E 4 2 1実測図	(55)
第11図 A-I～III地区第二検出面平面図	(17)	第26図 D地区土層図及び平面図	(57)
第12図 A-IV・V地区第一検出面平面図	(18)	第27図 F地区土層図及び平面図	(59)
第13図 A-IV・V地区第二検出面平面図	(19)	第28図 S E 4 2 1実測図	(60)
第14図 A地区個別遺構図	(21)	第29図 F地区出土遺物実測図	(60)
第15図 A地区出土遺物実測図(1)	(31)		

表 目 次

第1表 試験調査一覧	(3)	第10表 B地区出土遺物観察表	(50)
第2表 試験調査出土遺物観察表	(6)	第11表 C・E地区遺構一覧	(52)
第3表 A地区遺構一覧(1)	(24)	第12表 D地区遺構一覧	(56)
第4表 A地区遺構一覧(2)	(25)	第13表 F地区遺構一覧	(58)
第5表 A地区孤立柱建物一覧	(25)	第14表 F地区出土遺物観察表	(58)
第6表 A地区出土遺物観察表(1)	(30)	第15表 放射性炭素年代測定結果(1)	(62)
第7表 A地区出土遺物観察表(2)	(32)	第16表 暦年較正結果(1)	(62)
第8表 A地区出土遺物観察表(3)	(34)	第17表 放射性炭素年代測定結果(2)	(62)
第9表 B地区遺構一覧	(47)	第18表 暦年較正結果(2)	(62)

図 版 目 次

カラー図版	(69)
P L 1 A地区調査前風景・A地区調査後風景・A-I地区	(71)
P L 2 A-I地区・A-I地区東部・A-II地区北部・A-II地区中央部	(72)
P L 3 A-II地区南部・A-II地区南部・A-III地区全景・A-IV地区北部	(73)
P L 4 A-IV地区南部・A-IV地区南部下層・A-V地区南北トレンチ・A-V地区東西トレンチ	(74)
P L 5 S D 2 0 8・S D 3 0・S D 3 0・S H 2 1 2	(75)
P L 6 S H 2 1 4・S B 2 7 7・S B 2 7 8・S B 2 7 9	(76)
P L 7 A地区出土遺物	(77)
P L 8 A地区出土遺物	(78)
P L 9 A地区出土遺物	(79)
P L 10 B地区調査前風景・B地区調査後風景・B-I地区北端・B-I地区	(80)
P L 11 B-II地区北部・B-II地区中央部・B-II地区中央部・B-II地区中央部	(81)
P L 12 B-II地区南部・B-II地区南部・B-II地区南端東西トレンチ・B地区出土遺物	(82)
P L 13 C地区調査前風景・C地区調査後風景・E地区調査前風景・E地区調査後風景	(83)
P L 14 C地区全景・C-I地区全景・C-II地区全景・E-II地区及びC-II地区	(84)
P L 15 E-I地区及びC-I地区・E-II地区・E-III地区・E-III地区	(85)
P L 16 D地区調査前風景・D地区調査後風景・D-I地区・D-I地区	(86)
P L 17 D-II地区・D地区作業風景・F地区調査前風景・F地区調査後風景	(87)
P L 18 F地区・F地区・F地区出土遺物	(88)

I 前 言

1 遺跡の発見と第1次調査

琵琶垣内遺跡は、松阪市遺跡番号13A-26⁽¹⁾で、松阪市豊原町・山下町・安楽町にまたがって所在する。

琵琶垣内遺跡が初めて発掘調査されたのは、県道御麻生菌・豊原線建設に伴い昭和60年10月15・16日に実施された試掘調査であるが、この時点では遺跡名は閑浄寺遺跡であった。道路建設予定地内に2m×4mの試掘坑を2箇所設定した。調査の結果、溝、土坑、小穴、焼土などの遺構が確認され、遺物も奈良時代から平安時代にかけての土師器・甕・高杯、須恵器片や鎌倉時代の山茶碗などが出土した。

本調査は第1次調査として、昭和62年度に3,800㎡を対象に行われた⁽²⁾。古墳時代前半の大溝、古墳時代～奈良時代の竪穴住居、奈良時代～平安時代の掘立柱建物などが検出された。また、遺物では「下厨前」「厨前」「仁田」などの黒書土器も出土した。

この調査の結果、遺跡範囲は、北は主要地方道鳥羽・松阪線を北端として、南北600m程と考えられた。しかし、東西への広がりについては、地形や遺物の散布状況から推定された範囲であり、地下遺構の状況については不明確であった。

(河北)

2 第2次調査

平成8年度には、藤田上地区の県営ほ場整備事業に伴って県道より東側で試掘調査が実施され、その結果、県道から50mほど東側までが、遺跡範囲であることが判明した。

この試掘調査の結果を受けて、第2次調査は平成9年度に県営ほ場整備事業に伴って、県道の東側で発掘調査を実施した⁽³⁾。調査面積は600㎡で、弥生時代、古墳時代及び中世の遺構、遺物が確認された。

(河北)

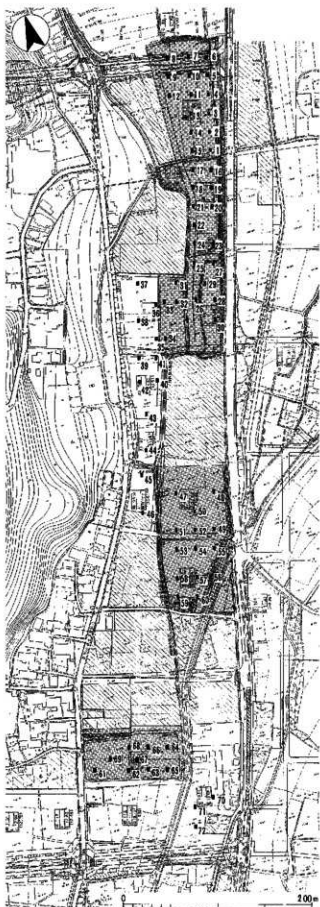
3 試掘調査の経過

平成12年9月26日から10月11日までの間に、試掘対象面積50,500㎡を実施した。2×4mを70箇所⁽⁴⁾、3×4mを1箇所、2×5mを1箇所、合計582㎡、72箇所で行った。

今回の調査対象地は、県道松阪御麻生菌線の西方に広がる。現況はほとんどが水田、一部畑地、竹林である。試掘坑（以下Gと表記する。）を72箇所設定し掘削を行った。

基本的な土層は、上から耕作土（灰色土）、床土（黄色土）、灰褐色土、黒褐色土である。（G1、2、3、12、15、16、18、19、23、28、34、35、38、39、40、41、42、44）。また、灰褐色土と黒褐色土の間に褐灰色土層が確認できた地点（G4、6、9、11、17、20、21、24、25、31、32、33、36、37、43）や黒褐色土層の上に灰オリブ色土層が確認できた地点もみられた（G67、69）。黒褐色土上面が遺構検出面と考えられるが、掘削地点によっては、黒褐色土が存在せず、橙色土（G26）やオリブ色シルト（G27）、褐色土（G49、53、59）の上面が遺構検出面となる。また、黒褐色土層より上層の青灰色シルト（G5、7、8、26）や明黄灰色土（G62、66、68）の上面が遺構検出面である地点も存在しこれらは、堆積状況の違いと思われる。遺物包含層は、灰褐色土あるいはその直下の褐灰色土と考えられるが、遺物を包含しなかったり、褐灰色土層が存在しない地点や、灰褐色土層や褐灰色土層がなくなる耕作土直下で遺構検出面となる場合もある（G10、13、14、29、30、45、46、47、48、50、51、52、54、55、56、57、58、60、61、63、64、65）。

遺構については弥生から中世の溝・土坑・ピットなど多数を、遺物については弥生土器、奈良から平安時代にかけての須恵器、土師器、中世の土師器、山茶碗、陶器を確認した。G30では、多量の奈良から平安時代にかけての須恵器・土師器を溝埋土から確認した。G66、67では西方に延びる溝を確認しており、弥生土器台付甕底部がその溝から出土した。



第1図 試掘坑位置図 (1:4,000)

G33、56、57、69では黒褐色土の検出面に淡黒褐色土が埋土の遺構が切り込んでいて土層断面の状況から確認するしかなかった。また、地元の古老によると調査対象地は、「何某マタ」と呼ばれた溝が縦横に存在したらしく調査結果とも合致する。「何某マタ」の時期が判然としないが当地の遺跡立地を考慮うえで興味深い。なお、遺構・遺物を確認できなかったのは、G12、38、42、43、45、46、50、51、53、54、61、62、63、65、68、70、71、72である。これら以外については、遺構あるいは遺物を確認している。

以上のことから、遺構あるいは遺物を確認した試掘坑およびその周辺約36,000㎡については遺跡であると判断した。

(小濱・川合)

4 本調査に至る経過

平成13年度事業地内に所在する琵琶垣内遺跡、山添遺跡を一括し、文化財保護法第57条の3第1項に基づく「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」は、平成13年7月30日付け、農基第507号で、三重県知事北川正恭から三重県教育委員会教育長あてに提出され、平成13年8月6日付け、教生第689号で「発掘調査」の指示事項が出された。

文化財保護法第58条の2第1項の規定による「埋蔵文化財発掘調査の報告について」は、琵琶垣内遺跡第3次調査と山添遺跡第4次調査を一括して、平成13年8月20日付け、教理第157号で、三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長に出された。

(河北)

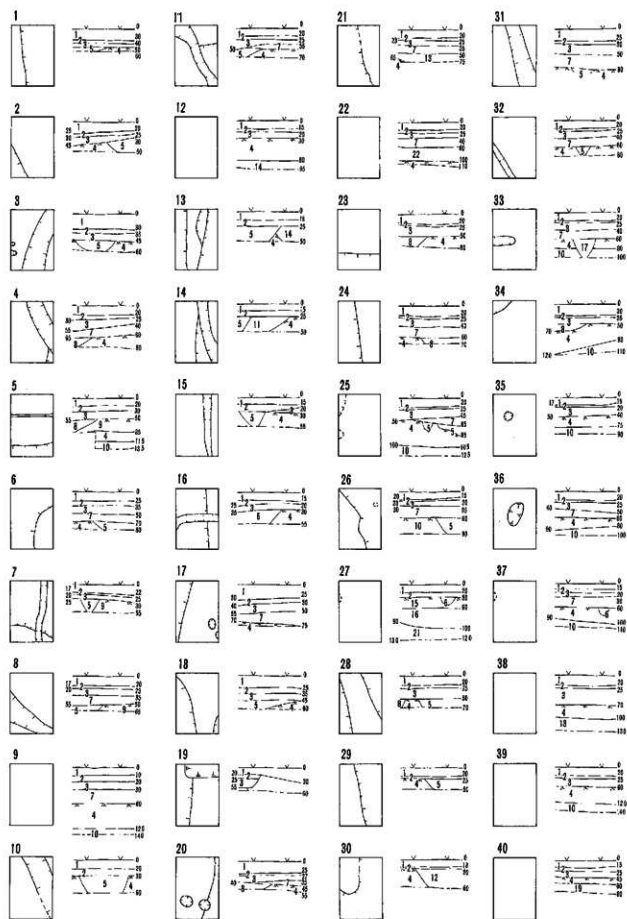
5 本調査の経過

今回の第3次発掘調査地の字は豊原町琵琶垣内・山際・肥留場、山下町茶園・南門である。調査地は、ほ場整備に伴って削平される排水路やパイプライン敷設などの調査幅が狭い調査である。調査する箇所が6箇所におかれているため、A地区からF地区の地区名を付与して調査を行なった。

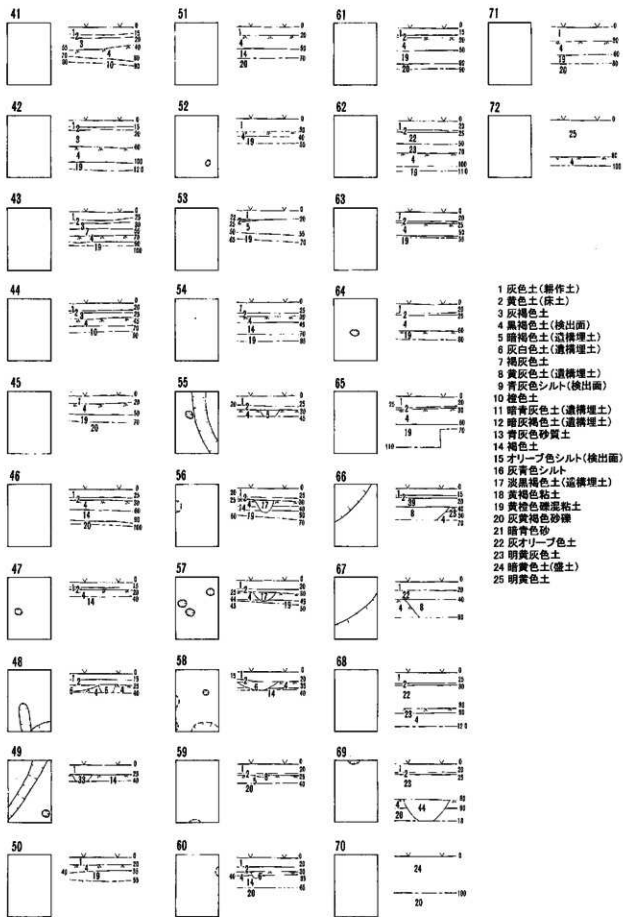
試掘 坑№	遺物包 含層上 面の深さ (cm)	遺構上 面の深さ (cm)	遺 構	遺 物
1	40	50	溝か	土師器片
2	25~30	30~45	溝か	—
3	35	45	溝	土師器片、陶器片
4	25~30	60~65	溝	土師器皿・甕、須恵器片など
5	30	50~55	溝か	土師器甕片
6	35	70	溝	土師器片、山茶碗片
7	20	25	溝など	土師器片（中世含む）
8	20~23	50~55	溝	土師器甕片
9	30	—	—	土師器片
10	—	30	溝	土師器甕片
11	25	50	溝、土坑	土師器片
12	—	—	—	—
13	—	25	溝、土坑	土師器皿・鍋（中世）
14	—	25	溝	土師器片など
15	20	30	溝	土師器片、陶器片
16	20~25	30	溝	土師器片
17	30~40	70~75	溝か	土師器皿片（中世）
18	35	45	土坑	土師器片（中世含む）
19	25	55	溝	土師器片
20	27	40~45	溝、ピット	土師器片
21	23~25	50	溝か	土師器片など
22	25	100	—	土師器甕
23	25	50	溝か	土師器甕、須恵器甕片など
24	25	60	溝	土師器片
25	23~25	50~65	ピット	土師器片
26	20~23	60	溝か	土師器碗片
27	—	30	ピット	土師器甕片
28	25	50	溝か	須恵器甕片
29	—	25	溝	—
30	—	20	溝、複数の重枚	土師器杯・皿・甕、須 恵器甕、土甕など多量
31	—	80	溝	—
32	—	60	溝	—
33	—	60	ピット	—
34	—	50	ピット	—
35	—	40~45	ピット	—
36	—	60	—	—

第1表 試掘調査一覧

試掘 坑№	遺物包 含層上 面の深さ (cm)	遺構上 面の深さ (cm)	遺 構	遺 物
37	—	60	—	—
38	—	—	—	—
39	—	—	—	土師器片
40	—	—	—	土師器片
41	20	40~55	—	土師器片
42	—	—	—	—
43	—	—	—	—
44	25	—	—	土師器片
45	—	—	—	—
46	—	—	—	—
47	—	20	ピット	—
48	—	25	溝、土坑	—
49	—	25	溝、ピット	—
50	—	—	—	—
51	—	—	—	—
52	—	30	ピット	—
53	—	—	—	—
54	—	—	—	—
55	—	30	溝、ピット	—
56	—	25	ピット	—
57	—	25~30	ピット	—
58	—	20	土坑、ピット	—
59	—	25	ピット	—
60	—	30	ピット	—
61	—	—	—	—
62	—	—	—	—
63	—	—	—	—
64	—	60	ピット	—
65	—	—	—	—
66	—	40	溝	弥生土器台付甕
67	—	40	溝	—
68	—	—	—	—
69	—	80	土坑	—
70	—	—	—	—
71	—	—	—	—
72	—	—	—	—



第2図 試掘坑平面及び土層断面略測図(1)



第3図 試掘坑平面及び土層断面略測図(2)

なお、A地区は調査期間中の生活道路を確保するために調査に制約を受け、調査区を北からA-I～V地区の5地区に分けて調査を行なった。B地区も同様にI・II地区に分けて調査を行なった。

C地区とE地区は当初は、分離分割して調査を実施する予定であったが、事業の設計変更により、結合することとなったため、併せてC・E地区として調査を実施した。

A地区は排水路建設、B地区はパイプライン敷設、C地区は揚水場建設、D地区は排水路建設、E地区はパイプライン敷設、F地区は排水路建設によって、遺跡が破壊を受けるために発掘調査を行った。

調査面積は、A地区650㎡、B地区470㎡、C地区120㎡、D地区120㎡、E地区130㎡、F地区80㎡で、合計1,570㎡である。

現地での実質的な調査期間は、平成13年10月15日から平成14年2月27日までである。

(宮田)

6 調査記録の方法

小地区は、4m×4mを1グリッドとし、調査区の形に合わせて東西方向に西からa、b、c、……と記号を付し、南北方向は北から、1、2、3、……と数字を付した。

調査区の土層断面図は1/20の縮尺で手描きし、遺構平面図は3m方眼を基準として1/20又は1/50の縮尺で、手描き実測を行なったが、一部で1/100の縮尺で平板測量で作成した。井戸等の個別遺構は平面図と断面図を1/10で作成した。

写真撮影は、カメラは6×7cm判と35mm判を使用した。フィルムは白黒及びカラーリバーサルを使用した。

(河北)

7 出土遺物の取り扱い

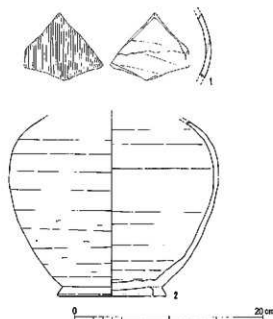
埋蔵文化財の発見及び認定にかかる法手続きは、発見日を平成14年3月25日とし、山添遺跡第4次調査の出土遺物とともに発掘調査終了後の平成14年3月29日付け教組第8-30号で、埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あてに依頼文が提出され、同日付け教委第12-6-1号で松阪警察署あてに通知された。

(河北)

8 第4次調査

第4次調査は平成16年度に県道の改築事業に伴い三重県埋文センターが発掘調査を実施した⁽¹⁾。弥生時代から鎌倉時代にかけての遺構や遺物が確認された。

(河北)



第4図 試掘調査出土遺物実測図(1:4)

遺物番号	実測番号	出土遺構出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径高台径(cm)	技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	040-03	G 2 7	土師器壺				ハケメ、ナデ	やや密、素地が異なる	並	灰褐	胴部小片	煤付層
2	034-01	G 3 0	須恵器壺		11.2		ロクロナデ、ロクロケズリ	やや密	やや良	灰	胴～底部3/4	

第2表 試掘調査出土遺物観察表



第5図 調査区位置図 (1:4,000)

II 位置と環境

琵琶垣内遺跡(1)は柳田川下流左岸の標高10m程の氾濫平野に立地する。周辺の地理的環境や各時代を通した周辺の遺跡の状況については、当遺跡の第1・4次発掘調査報告書及び第2次発掘調査報告書や山添遺跡の第1次発掘調査報告書・第2次発掘調査報告書⁽⁹¹⁾あるいは天王山遺跡・天王山古墳群発掘調査報告書等に記述されているので、詳細はそれらを参照していただきたい。

ここでは、今回の発掘調査区で確認された中心的な時期である古墳時代、奈良時代、平安時代末期～鎌倉時代に絞って周辺の遺跡を確認しておくことにしたい。

古墳時代

琵琶垣内遺跡の西側にある松阪丘陵東端部を越えた金剛川流域の松阪市市街地南西部には、茶臼山古墳(2)、久保古墳(3)、坊山古墳群(7)の1号墳、高田古墳群(8)の2号墳などの大型古墳が所在しており⁽⁹²⁾、これらの古墳は、遺物から4世紀後半に属すると考えられている。さらに佐久米古墳群(11)に属する大塚山古墳は5世紀後半と考えられている。

琵琶垣内遺跡のすぐ西側の丘陵上には天王山古墳群(20)、山添古墳群(22)があり、また山添遺跡(21)内には車塚がある。天王山古墳群は19基の円墳からなる古墳群であり、このうち1・11～16号墳の7基が発掘調査され、5世紀中葉から7世紀中葉に築造されたことが判明した⁽⁹³⁾。山添古墳群の2号墳は発掘調査により6世紀後半とされている。山添遺跡内の車塚は、すでに墳丘は消滅しているが、山添遺跡の第3次発掘調査で、その近くから埴輪が出土している。

柳田川の対岸には古嚮通りB遺跡(27)があり、古墳時代前半の2間×2間に四面庇がつく特異な掘立柱建物と木製くり抜き井戸が検出されている⁽⁹⁴⁾。また古嚮通りB遺跡に重複して所在する古嚮通り古墳群では、6世紀中頃から後半にかけての古墳4基が確認されている。さらに東方の祇川右岸の丘陵地には、5世紀後半頃の神前山古墳群(37)、大塚古墳群(38)が、さらには後期群集墳である河田古墳群(32)

がある⁽⁹⁵⁾。

奈良時代

官衙遺跡としては、柳田川を挟んで3km東方に飛鳥時代から鎌倉時代にかけて存続した倉王の宮殿跡である国史跡斎宮跡(42)がある⁽⁹⁶⁾。そして、その斎宮跡と奈良・京都の都を結ぶ推定古代官道(45)が琵琶垣内遺跡のすぐ北側を東西に走っている⁽⁹⁷⁾。

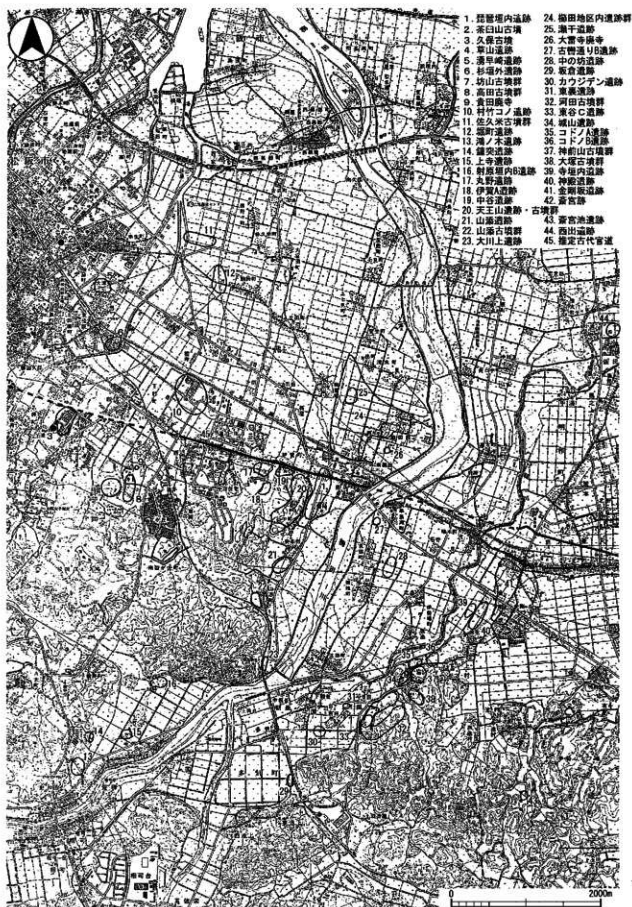
寺院跡には、1km北東の下流には大雷寺廃寺(26)が、2km西方には貴田廃寺(9)がある。大雷寺廃寺はかつて広い範囲にわたって奈良時代後半の瓦が出土したとされている⁽⁹⁸⁾。貴田廃寺はその実態は不明な点が多いが、奈良時代後半の瓦が出土していることから古代寺院跡と考えられている⁽⁹⁹⁾。山添遺跡ではこの時期の遺構は顕著ではないが、第3次調査で大雷寺廃寺と同文の軒丸瓦が1点出土している⁽¹⁰⁰⁾。

集落跡としては、琵琶垣内遺跡のすぐ西側の丘陵裾に丸野遺跡(17)、中谷遺跡(19)、天王山遺跡(20)があり、3km北西には堀町遺跡(12)がある。丸野遺跡では、飛鳥～奈良時代の堅穴住居4棟、掘立柱建物1棟を検出している⁽¹⁰¹⁾。中谷遺跡では堅穴住居や奈良時代の可能性のある掘立柱建物を検出している⁽¹⁰²⁾。天王山遺跡では、飛鳥～奈良時代の堅穴住居や掘立柱建物が検出されている⁽¹⁰³⁾。堀町遺跡では、奈良時代の掘立柱建物2棟と井戸4基が検出されている⁽¹⁰⁴⁾。なお、少し時代は新しくなるが2km南には大川上遺跡(23)があり、平安時代前II期後半すなわち9世紀後半の溝から「神宮寺」と書かれた黒書土器器杯が出土しており、伊勢神宮寺との関連が指摘されている⁽¹⁰⁵⁾。

平安時代末期から鎌倉時代

この時期は前述の斎宮跡が存続しており、また前述の堀町遺跡では、平安時代後末期～鎌倉時代の掘立柱建物40棟と井戸20基が検出されている⁽¹⁰⁶⁾。

(河北)



第6図 遺跡位置図 (1:50,000) [国土地理院「松阪」,「国東山」1:25,000による]

III A地区の調査結果

1 概要

A地区は県道の西隣に沿った細長い調査区で、西に開いたコの字状を呈している。総延長約410m、幅1.5~2.0m、調査面積2650㎡である。北からA-I~Vの5地区に分けて調査を行なった。

I地区は北端に位置する東西58mの調査区である。II地区はI地区に続く南北119mの調査区で小地区p q r 1~31である。III地区はII地区の南側でq r 32~37の南北23mである。IV地区はさらに南のq r 38~57の75mの間である。V地区はさらに南に続く調査区でq r 58~84の南北100mと逆L字状に続くi~r 83・84地区の東西35mの調査区である。

2 土層

A地区の調査区土層断面図は、II~V地区の南北方向は東壁で、V地区の東西方向は南壁で作成した。

II地区の基本的層序は、第1層が灰色砂質土の耕作土(1)、第2層が黄褐色粘質土の床土(2)、第3層が暗褐色砂質土の遺物包含層(3)、第4層が黒色砂質土(4)である。II地区北端は削平により第3層がみられない。中央部付近は第3層と第4層の間に橙色砂質シルト(33)がみられる。遺構検出はおおむね第4層上面で行ったが、遺構は第3層上面から切り込むものと第4層上面から切り込むものがある。

III地区の基本的層序は、第1層が灰色砂質土の耕作土(1)、第2層が橙色粘質土の床土(2)、第3層が白い橙色砂質土(3)、第4層が暗褐色砂質土に砂礫混じりの遺物包含層(4)、第5層が灰褐色砂質土(5)、第6層が黄灰色粘質シルト(6)である。第5層および第6層は北半部にみられるが、南半部では消滅する。遺構検出はおおむね第4層上面である。

IV地区の基本的層序は、第1層がオリーブ灰色砂質土の耕作土(1)、第2層が橙色砂質土の床土(2)、第3層が暗褐色粘質土に砂礫混じり(3)である。

第3層は、遺物包含層であるが、現水田の耕地整理時に削平を受けて、残存状況が悪くなっている。第4層以下は、複雑な層序となる。

V地区の基本的層序は、第1層が灰色砂質土の耕作土(1)と現代畦畔および盛土(95)、第2層が明黄褐色粘質土の床土(2)であり、第3層以下は様々な土層が入り込み、層序は場所によって異なっている。

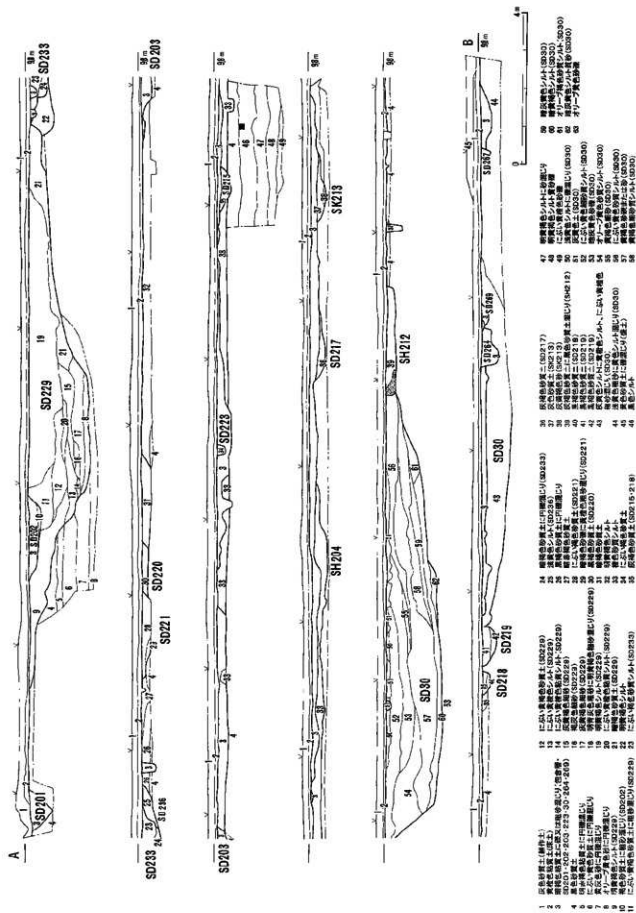
3 遺構

遺構は、二面に分けて検出した。当然同一地点での上面で検出した遺構は新しく、下面で検出した遺構は古いものである。また、重複する遺構が多く、同一面で検出したが、切り勝っているほうを上面、切られているほうを下面としていることもある。したがって、結果として上面遺構と下面遺構との時期差がはっきりと分かれるわけではなかったために、遺構の記述では特に分けることなく扱った。ただし、遺構平面図は、上面と下面に分離して掲載した。

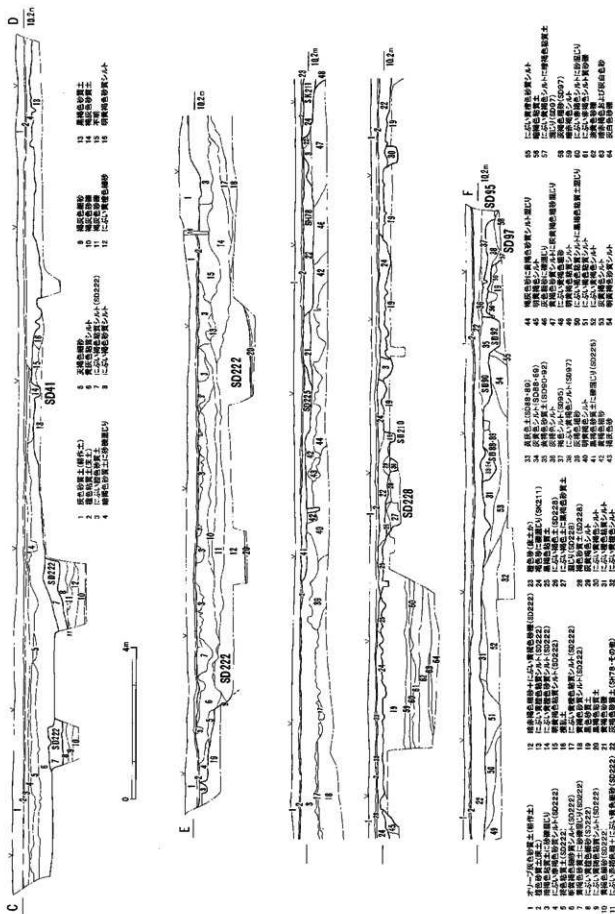
調査区が細長いいため、検出遺構の多く、特に調査区に直交する溝は調査区外に延びるためその全容を明かにすることはできなかった。なお、遺構の規模は特に記述のない限り、検出状況での計測値である。

遺構の時期は、古いものは古墳時代前半、新しいものは江戸から明治時代頃までと広範である。遺構の時期決定については、出土遺物による判断を中心に、他の遺構との切り合い関係や遺構埋土の色・質によって決定した。しかし、出土遺物は小片が多く、また遺構が重複している箇所では、遺物の混入が考えられるケースもあり、各遺構の時期については、ある程度幅を持たせて考えざるを得ない遺構もみられた。このため、各遺構の時期は次のような分け方とした。

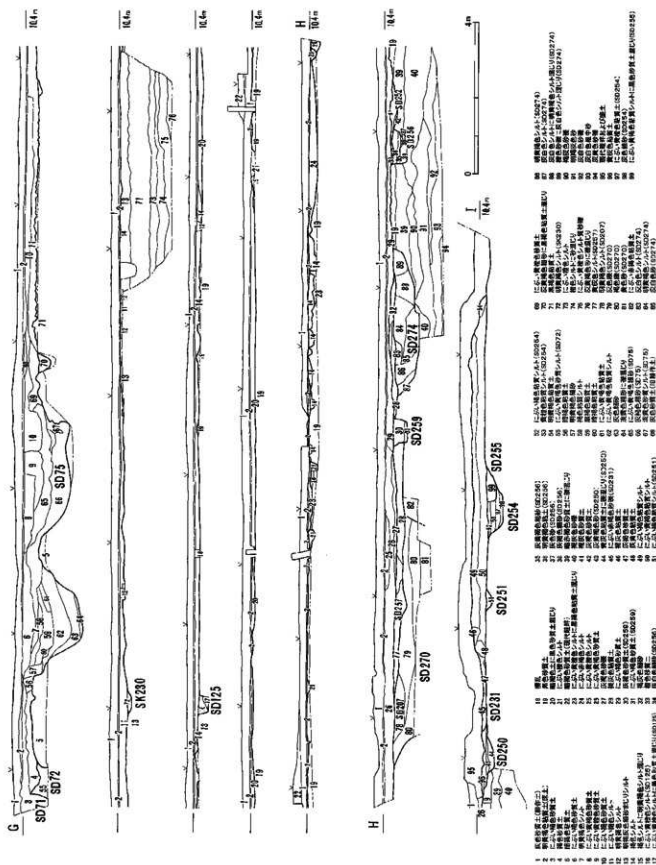
- (1) 古墳時代前半
- (2) 古墳時代
- (3) 古墳時代から奈良時代
- (4) 奈良時代



第7図 A—II地区土層断面図 (1:100)



第8図 A-III・IV地区土層断面図 (1:100)



第9图 A-V地区土层剖面图 (1:100)

- (5) 奈良時代から平安時代
- (6) 平安時代
- (7) 平安時代末期から鎌倉時代
- (8) 中世
- (9) 近世から明治時代
- (10) 時期不明
- (11) 現代

(1) 古墳時代前半の遺構

① 溝

SD30 第1次調査で検出した南北方向の大溝で、今回の調査でもその続きをA-II地区の下面r20~23地区およびr27~29地区の2箇所を確認した。第1次調査の成果も含めると長さ45m以上、幅3m前後、深さ1.5mである。埋土は何層かに分かれるが、黄褐色系のシルトまたは細砂が主で、これに黄褐色シルトやにぶい黄褐色粗砂が混じる。奈良時代の堅穴住居SH212に切られる。第1次調査では、当該遺構の時期を弥生時代中期以降としているが、今回の調査では縄文土器(44)、古墳時代前半の土師器高杯・壺(45)・甕が出土していることから、古墳時代前半とした。

SD97 第1次調査で確認された溝であるが、今回の第3次調査でもその続きをA-IV南端のqr56・57地区で検出した。規模は不明であるが、切り合いにより平安時代末期~鎌倉時代の溝SD95より古い。埋土は上層がにぶい黄褐色シルト、下層が灰褐色粗砂またはにぶい黄褐色シルトに暗褐色粘質土混じりである。第1次調査では古墳時代前半の遺物が相当量出土しているため、遺構の時期は、当該期と判断したものである。今回の調査では、奈良~平安時代の間におさまる土師器甕等の小片が出土したが、これは隣接する遺構からの混入の可能性が高い。

SD206 A-V地区の北端からq66地区にかけて検出した南北方向の大溝で、長さ32m以上、幅は不明、深さ0.1~0.3mである。III・IV地区のSD222と一連の大溝の可能性もあるが、確認には至らなかったため異なる遺構番号を付した。古墳時代前半の土師器高杯(3・4)・甕(5~7)が出土した。なお、須恵器、山茶碗がごく少量出土したが、

須恵器は溝の最終埋没時期を示す遺物であり、山茶碗は調査時に新しい時期の遺構の切り込みを見落としたための混入と推定される。

SD208 A-V r75~83地区で検出した南北方向の大溝で、長さ33m以上、幅は不明、深さ0.8~1.0mであるが、落ち込みの可能性もある。縄文土器(8・9)、弥生土器壺(10~13)、土師器高杯(17~19)・壺(14~16)・小型丸底壺・甕(20~25)・ミニチュア土器(28)が出土した。量的には古墳時代前半の遺物が多くを占める。出土遺物の中には、古墳時代後半に属する土師器小片や奈良時代の土師器碗(26)・甕(27)なども若干みられるが、それらは遺構の埋没期を示すものと考えられる。

SD222 A-III・IV地区のほぼ全面にわたる南北方向の大溝である。長さとは不明であるが、深さは0.3mである。前述のとおりA-V地区のSD206と一連の大溝の可能性もある。埋土はにぶい褐色粘質シルトである。出土遺物には、縄文土器(29~32)、弥生土器壺(33・34)・甕(35)、古墳時代前半の土師器高杯(36~38)・壺(41)・甕(39・40)、板状木製品、奈良時代の土師器碗(42)・甕(43)があり、縄文時代~奈良時代と時期幅がある。縄文土器については、少量、小片であり、弥生土器も一定量出土しているものの小片である。古墳時代前半の土器は量的に比較的多く出土しており、この溝の存続時期あるいは埋没開始時期としては、古墳時代前半とするのが適切と考える。一方、奈良時代の遺物については、調査時に奈良時代の遺構の切り込みを見落としていたか、あるいは溝の最終埋没期を示すものであろう。

SD240 A-I j2地区下面で検出した南北溝で、長さ1.8m以上、幅1.0m、深さ0.5mである。埋土は褐色土で、古墳時代の土師器高杯(46)が出土した。また、平安時代の土師器の小片が出土したが、後世の遺構の切り込みを見落としたための混入と考えられる。

SD271 A-V q r59地区下面で検出した東西溝で、長さ2.0m、幅1.1m以上、深さ0.3mである。切り合いにより奈良~平安時代の溝SD272より古い。古墳時代前半の土師器甕(47・48)や高杯・壺・甕等の小片が出土した。

SD275 A-V地区下層qr60~62で検出した東西溝で、長さ2.5m以上、幅2.5m、深さ0.9mである。埋土は二層に分かれ、上層がふい黄褐色粗砂、下層が灰褐色粗砂である。古墳時代前半の土師器小片が出土した。

(2) 古墳時代の遺構

① 溝

SD233 A-II p6地区下面で検出した東西溝で、長さ0.9m以上、幅1.0m、深さ0.5mである。切り合いによりSD236より新しい。古墳時代の土師器、須恵器の小片が出土しており、当遺構の時期は古墳時代後半と考えられる。

SD236 A-II p6地区下面で検出した東西溝で、長さ1.8m以上、幅2.3m、深さ0.5m以上である。土師器の小片が出土したが、遺物から時期を限定することは困難である。切り合いにより古墳時代の溝SD233より古く、古墳時代以前と判断できることから一応、この時期とした。

② 土坑

SK211 A-IV r47・48地区で検出した土坑で、平面形は1.0m以上×0.3m、深さは0.1mである。古墳時代の土師器片が出土した。

SK273 A-V r63地区下面で検出した土坑で、平面形は長径1.0m、短径0.5mの楕円形で中段にテラスをもつ。深さは中段が0.2m、底部が0.5mである。古墳時代の土師器片が出土した。

(3) 古墳時代から奈良時代の遺構

① 溝

SD88・89 第1次調査ではSD88・89の2条の溝を確認している。今回の調査でもその続きをA-IV qr55地区で検出したが、平面・断面とも2条に分けて検出することが出来なかった。溝の南側法面には中段がみられることから、北側の深い部分がSD88、南側の中段までがSD89となる可能性が高い。第1次調査の成果も含めると、長さは両溝とも21m以上で、幅はSD88が0.6~1.6m、SD89が0.4~1.1m、深さはSD88が0.6m、SD89が0.4m程になると考えられる。埋土は黄灰色

または灰黄色土で、炭が混じる。第1次調査では、SD88が古墳時代後期、SD89が古墳時代としているが、第3次調査では奈良時代の土師器皿(79)・甕(80)および小片が出土していることから、どちらかの溝が奈良時代と考えられる。

SD250 A-V m83・84地区で検出した南北溝で、長さ1.8m以上、幅1.1m、深さ0.1mである。上面を近世以降の溝であるSD231に切られる。埋土は二層に分かれ、上層が灰黄褐色砂、下層が黄灰色粘質土に礫混じりで、古墳~奈良時代にかけてと考えられる土師器片、須恵器小片が出土した。

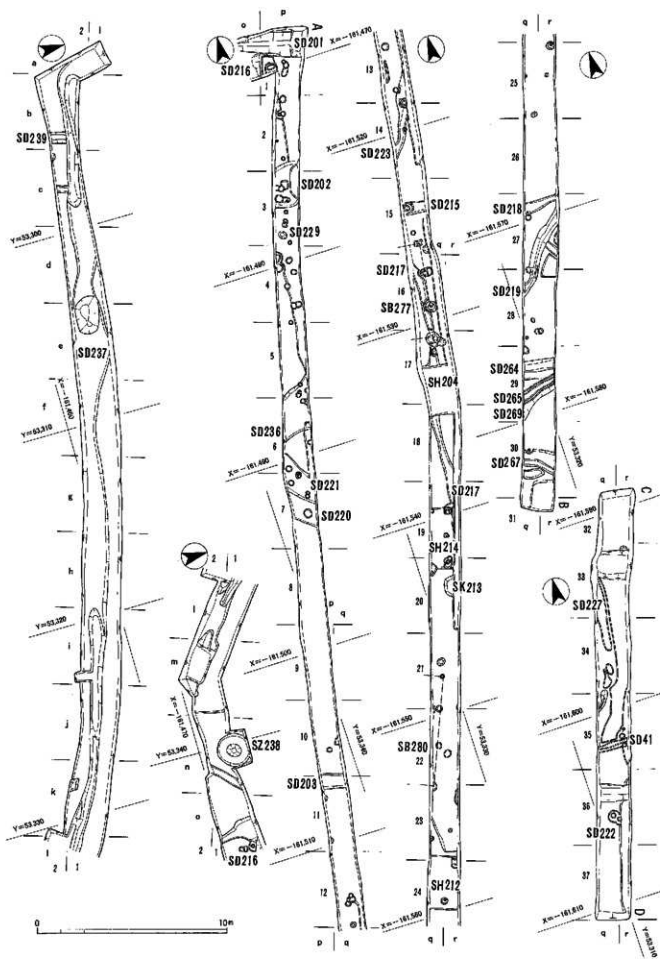
(4) 奈良時代の遺構

① 竪穴住居

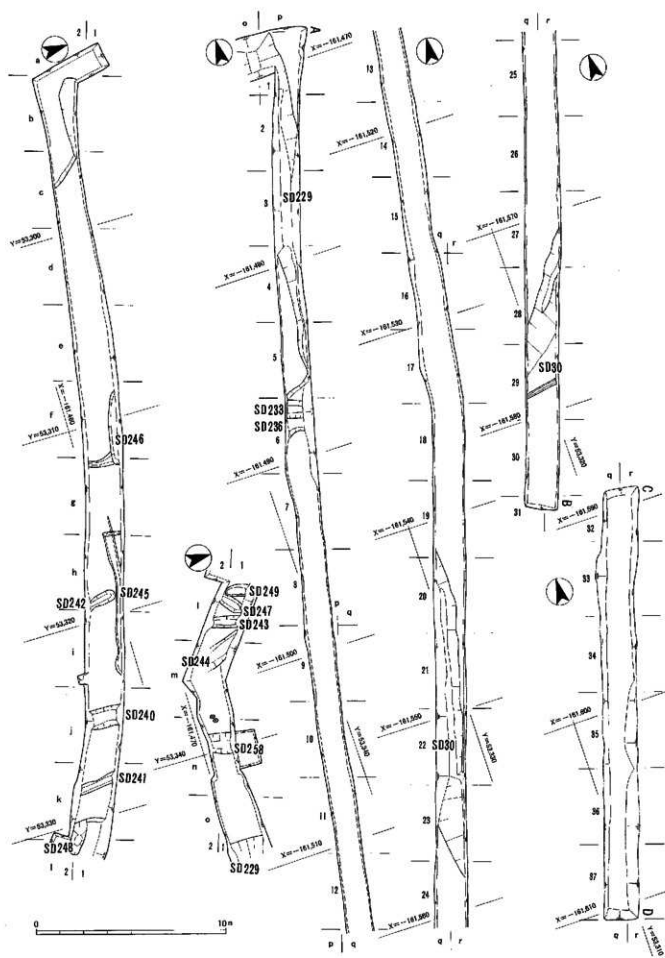
SH204 A-II qr17地区で検出した竪穴住居で、東西1.5m以上×南北2.8m、深さ0.1mである。方位はN9°Eである。切り合いにより、奈良時代の溝SD217より新しい。主柱穴や竈は確認できなかったが、形状が他の竪穴住居に類似することから、竪穴住居と考えた。調査区東壁面では遺物包含層である橙色砂質シルト層が2.5mの範囲で深さ0.2m程回っていることが確認されており、この竪穴住居の埋土と考えられる。したがって、竪穴住居の東辺は調査区外にまで延びるものと判断される。埋土からの出土遺物はないが、遺構の時期は他の竪穴住居と同じく奈良時代と推定した。

SH212 A-II qr24地区で検出した竪穴住居で、東西1.6m以上×南北2.9m、深さ0.2mである。方位はN18°Eである。切り合いにより古墳時代前半の大溝SD30より新しい。北壁には0.3m以上×0.6mの範囲で竈跡と考えられる炭と焼土がみられる。南壁近くには径0.4mの円形のピットが一箇所あり、主柱穴の可能性がある。埋土は灰褐色砂質土に黒色砂質土がブロックで混じる。遺構埋土から奈良時代の土師器皿(49)・甕(50)・甕、須恵器杯片が出土した。

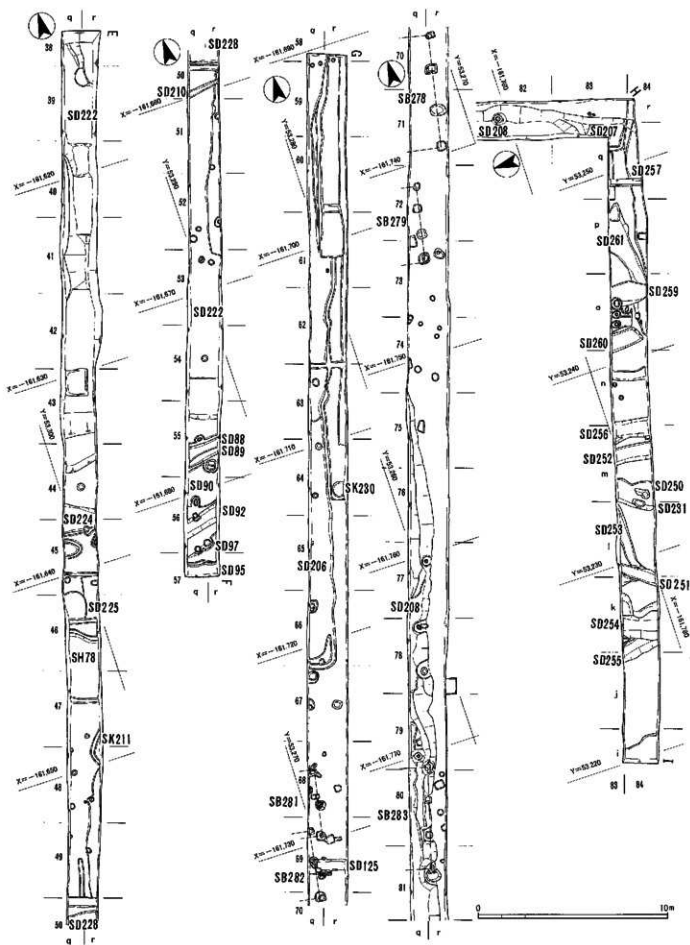
SH214 A-II qr19・20地区で検出した竪穴住居で、東西1.2m以上×南北3.2m、深さ0.1mである。方位はN18°Eである。竪穴住居の東壁は北半分を検出したが、南半分は調査時の排水用トレンチにより破壊しており、確認できなかった。東壁の中央



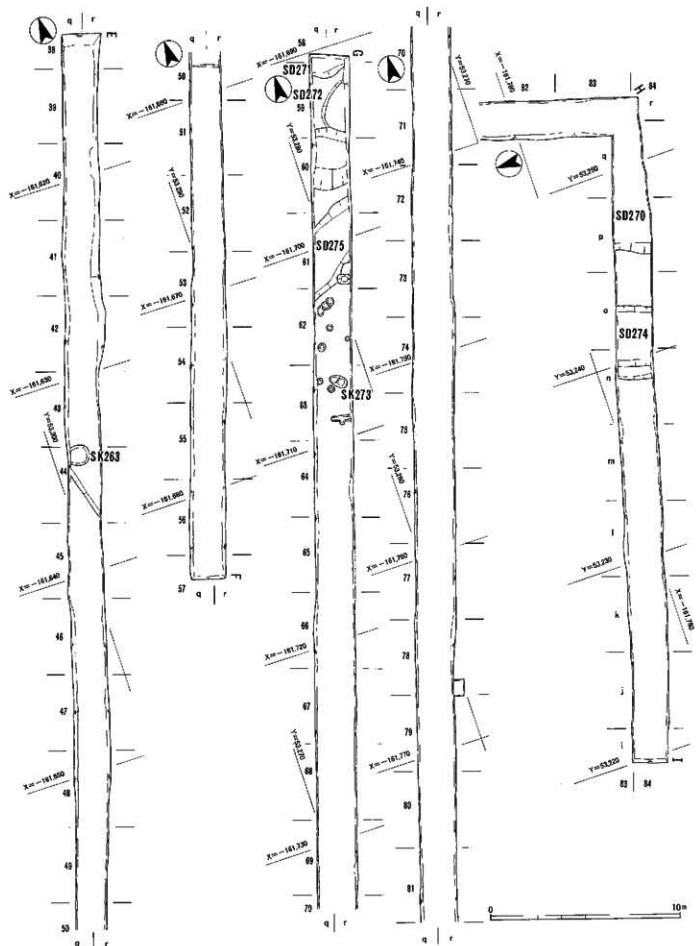
第10图 A I~III地区第一楼出面透模平面图 (1:200)



第11图 A I~III地区第二楼出面透視平面圖 (1:200)



第12图 AIV·V地区第一级出面透模平面图 (1:200)



第13图 A IV·V地区第二级出面遺構平面图 (1:200)

部に0.7m×0.5m以上の範囲で焼土がみられるが、これは竈の残骸と考えられる。2箇所にビットがあるが、主柱穴の可能性もある。また、北東隅から幅0.2mの溝が延びているが、これは堅穴住居の排水溝の可能性もある。奈良時代の土師器杯(51)・皿(52~54)・甕(55~60)、須恵器杯小片が出土した。

② 掘立柱建物

掘立柱建物は7棟確認したが、いずれも柱穴が直線的に3~4個並ぶもの、すなわち2~3間分を検出したものである。柱穴の形、規模、方向、柱間、柱痕跡の有無などから掘立柱建物と推定したものである。

SB277 A-II q 15・16地区で、N8°Eの南北方向に3間分を検出した。長さは5.1mで、柱間寸法は1.7m等間である。柱掘形は径0.5~0.7mの円形で、深さは0.5m、柱痕跡は径0.2mである。埋土は暗褐色土で、遺物は奈良時代の土師器皿(61)と杯・甕の小片が出土した。

SB278 A-V q r 70・71地区で、N11°Eの南北方向に3間分を検出した。長さは6.0mで、柱間寸法は北から1.8+2.2+2.0mである。柱掘形は一边0.3~0.8m程の隅丸方形で、深さは0.4mである。埋土は主に明黄褐色土や黄橙色のシルトで、出土遺物は土師器甕の小片であるが、奈良時代頃と考えても矛盾のないものである。

SB279 A-V q r 72・73地区で、N11°Eの南北方向に3間分を検出した。長さは3.9mで、柱間寸法は1.3m等間である。柱掘形は一边0.4m程の隅丸方形で、深さは0.2mである。埋土は主として明黄褐色シルトで、奈良時代の須恵器杯蓋(62)や土師器杯・甕、須恵器杯の小片が出土した。

SB280 A-II q r 21・22地区で、N24°Eの南北方向に3間分を検出した。長さは5.85mで、柱間寸法は1.95m等間である。柱掘形は径0.2~0.4m程の円形で、深さは0.2mである。埋土は灰褐色、黄褐色、暗灰色で、土師器の小片が出土した。

SB281 A-IV q r 68・69地区で、N10°Eの南北方向に2間分を検出した。長さは3.6mで、柱間寸法は1.8m等間である。柱掘形は一边0.5m程の隅丸方形で、深さは0.3m、柱痕跡は径0.2mである。埋

土から、奈良時代と考えてほぼ間違いのない土師器杯が出土した。

SB282 A-V q r 69・70地区で、N8°Eの南北方向に2間分を検出した。長さは3.6mで、柱間寸法は1.8m等間である。柱掘形は一边0.3m程の隅丸方形で、深さは0.5mである。埋土は黄灰色等で、土師器の小片や古墳時代の須恵器杯が出土したが、遺構そのものの時期は他の掘立柱建物と同じく奈良時代であろう。

SB283 A-V r 80・81地区で、N16°Eの南北方向に3間分を検出した。長さは5.4mで、柱間寸法は1.8m等間である。柱掘形は一边0.4m程の隅丸方形で、深さは0.2mである。埋土から土師器の小片が出土した。

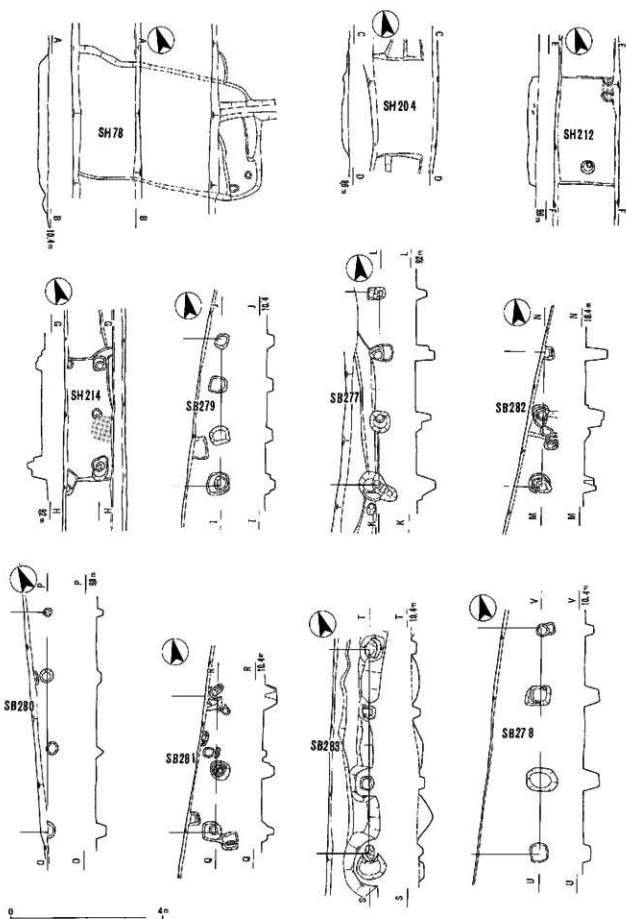
③ 溝

SD90 第1次調査で確認された溝で、今回の第3次調査でもその続きをA-IV q r 55・56地区で検出した。第1次調査の結果も含めると、長さ21m以上、幅2.0m、深さ0.3mである。埋土は黄褐色砂質土である。今回の調査では遺物は出土しなかったが、第1次調査の結果を踏襲して奈良時代とした。

SD201 A-II o p 1地区で検出した東西溝で、長さ4m以上、幅1.5m、深さ0.4~0.6mで、断面は逆三角形である。埋土は暗褐色粘質土で礫を含んでいる。縄文土器(63)、奈良時代の土師器皿・甕(66~68)・瓶(69)、須恵器の小片が出土し、さらには平安時代の土師器杯(64)、甕(65)、山茶碗(70・72・73)、小碗(71)、鉢(74)も出土した。当該遺構の時期は、一応、奈良時代の項で取り扱ったが、出土遺物が奈良時代と平安時代末期~鎌倉時代にはっきり分かれる。したがって、2時期の溝が重複していた可能性も高いが、現地では確認出来なかった。なお、江戸時代の寛永通宝(76)も出土したが、近世遺構の切り込みを見落とすための混入であろう。

SD215 A-II q 15地区で検出した東西溝で、長さ1.2m以上、幅0.6m、深さ0.2mである。埋土は灰褐色砂質土で、奈良時代の土師器杯類・甕、製塩土器の小片が出土した。

SD216 A-I o 1地区で検出した南北溝で、長さ2.0m以上、幅2.5m、深さ0.2mである。埋土に



第14图 竖穴住居、掘立柱建物实测图 (1:100)

は埴土が含まれる。奈良時代の土師器甕(77)が出土した。

SD217 A-II q r 16~19地区で検出した南北溝で、長さ13m以上、幅0.4m、深さ0.1mである。切り合いにより奈良時代の竪穴住居SH204および掘立柱建物SB277より古いものである。埋土は灰褐色砂質土で、奈良時代のものと考えても矛盾しない土師器の小片が出土した。

SD219 A-II q r 27・28地区で検出した溝で、長さ4.5m以上、幅0.3~0.6m、深さ0.3mである。埋土は暗褐色土または黒褐色砂質土であるが、奈良時代かと思われる土師器・甕、須恵器小片が出土した。

SD220 A-II p 7地区で検出した溝で、長さ2m以上、幅1.2m以上、深さ0.1mである。切り合いにより奈良時代の溝SD221より古い。埋土は黒褐色粘質土で、奈良時代の土師器高杯・甕、須恵器小片および土鉢(78)が出土した。

SD221 A-II p 6・7地区で検出した溝で、長さ2m以上、幅1.2m、深さ0.2~0.5mである。切り合いにより奈良時代の溝SD220より新しい。埋土は灰色褐色砂質土で、奈良時代の土師器・甕、須恵器小片が出土した。

SD223 A-II q 13・14地区で検出した溝で、長さ4.5m以上、幅0.4~1.0m、深さ0.05mである。埋土は暗褐色砂質土で、土師器の小片が出土した。また、溝内のピットからは奈良時代の土師器皿が出土した。

SD225 A-IV q r 45・46地区で検出した東西溝で、長さ1.8m以上、幅2.2m、深さ0.1~0.2mである。奈良時代の土師器杯類・甕の小片が出土した。

SD227 A-III q 33・34地区で検出した南北溝で、長さ3.8m以上、幅0.5m以上、深さ0.3mである。埋土は黄褐色砂質土で、奈良時代の可能性が高い土師器の碗・甕が出土した。

SD242 A-I h 1・2地区下面で検出した南北溝で、長さ1.4m以上、幅0.6m、深さ0.2mである。埋土は明褐色土で、奈良時代の土師器甕小片が出土した。

SD244 A-I l m 1・2地区下面で検出した

溝で、長さ2.5m以上、幅1.0m、深さ0.1mである。埋土は明褐色土で、奈良時代の土師器、須恵器の小片が出土した。

SD245 A-I h 1地区下面で検出した東西溝で、長さ8m以上、幅0.5m、深さ0.1mである。奈良時代の土師器、須恵器の小片が出土した。近世陶器も出土したが、近世遺構の切り込みを見落としたための混入と考えられる。

SD251 A-V k 183・84地区で検出した南北溝で、長さ2.0m以上、幅0.7m、深さ0.2mである。切り合いにより奈良時代の溝SD253より新しい。奈良時代の可能性のある土師器甕等、須恵器甕等の小片が出土した。

SD253 A-V 183・84地区で検出した東西溝で、長さ3.5m以上、幅0.5m、深さ0.1mである。切り合いにより奈良時代の溝SD251より古い。奈良時代と思われる土師器甕等、須恵器小片が出土した。

SD257 A-V p~r 84地区で検出した東西溝で、長さ9m以上、幅1.2m以上、深さ0.1mである。奈良時代の土師器杯類・甕、須恵器杯類・甕、また時代は確定できない土鉢(82・83)が出土した。灰軸陶器片や山茶碗(81)も出土したが、灰軸陶器片は黒笹90号窯式のものであり、溝の埋没期を示すものと考えられる。山茶碗は後世の遺構の切り込みを見落としたための混入であろう。

SD258 A-I n 2地区下面で検出した南北溝で、長さ1.2m以上、幅1.1m、深さ0.3mである。埋土は黄灰色土で、奈良時代の土師器甕が出土した。中世の陶器も出土したが、これは後世の遺構の切り込みを見落としたための混入であろう。

SD259 A-V o 83・84地区で検出した南北溝で、長さ1.9m以上、幅0.7~1.2m、深さ0.4mである。埋土は上層が灰褐色砂質土、下層が灰色褐色砂質土で、奈良時代の土師器皿・甕、須恵器杯・甕が出土した。

SD260 A-V o 83・84地区で検出した南北溝で、長さ1.9m以上、幅0.9m、深さ0.2mである。埋土は灰褐色土で、奈良時代の土師器碗(84)・付付き碗(85)・付付き皿(86)・杯・皿(87~90)・甕片、須恵器甕小片が出土した。

SD261 A-V o p 84地区で検出した東西溝で、長さ6m以上、幅0.7~1.2m、深さ0.1mである。埋土は灰褐色土で砂や礫を含む。奈良時代の土師器碗・高杯・甕、須恵器甕等の小片が出土した。

SD270 A-V p q 83・84地区下面で検出した南北方向の大溝で、長さは不明、幅7m、深さ0.7m以上である。埋土は三層に別れ、上から順に灰色礫、褐色礫、黄色砂である。奈良時代の土師器碗・杯・高杯・甕、須恵器杯・甕の小片が出土した。

SD274 A-V n o 83・84地区下面で検出した南北方向の大溝で、長さ2.0m以上、幅7.3m、深さ0.8mである。埋土は明黄褐色シルトまたは灰白色砂である。奈良時代の土師器甕・甗、須恵器甕の小片が出土した。

SD276 A-V p 83・84地区付近の下面で検出した溝である。奈良時代の土師器碗(91)・甕片、須恵器甕の小片が出土した。

④ 土坑

SK230 A-V r 64地区で検出した土坑で、平面形は0.8m以上×0.5mで、深さ0.1mである。奈良時代の可能性が高い土師器の甕(92・93)が出土した。

SK263 A-IV q 44地区下面で検出した土坑で、平面形は1.0m以上×1.0mで、深さ0.2mである。埋土は暗褐色土で、奈良時代の可能性が高い土師器碗・甕の小片が出土した。

(5) 奈良時代から平安時代の遺構

① 溝

SD125 第1次調査で確認した東西溝で、今回の調査でもA-V q r 69地区でその続きを検出した。第1次調査の成果も合わせると長さ12m以上、幅0.6m、深さ0.2mである。埋土はにぶい黄褐色シルトで、一部に黒色砂質土(黒ボク)が混じる。第1次調査では「古墳時代後期?以降」としていたが、今回の調査で奈良~平安時代の間におさまる土師器小片が出土したため、当該遺構の時期を「奈良~平安時代」と訂正しておく。

SD203 A-II p q 11地区で検出した東西溝で、長さ1.2m以上、幅0.8m、深さ0.1mである。埋

土は暗褐色砂質土で、奈良~平安時代の間におさまる土師器小片が出土した。

SD207 A-V q 83・84地区で検出した南北溝で、長さは不明、幅1.8m、深さ0.2mである。埋土は明黄褐色シルトで、奈良~平安時代の間におさまる土師器杯・甕小片、須恵器小片、製塩土器小片が出土した。

SD210 A-IV q r 50地区で検出した東西溝で、長さ1.7m、幅0.3m、深さ0.1mである。埋土は灰褐色または黒色の砂質土で、小石が混じる。奈良~平安時代の間におさまる土師器小片が出土した。

SD218 A-II q r 27地区で検出した東西溝で、長さ1.8m以上、幅0.6m、深さ0.2mである。埋土は上層が暗褐色土または灰褐色砂質土で、下層が黒褐色砂質土である。奈良~平安時代の間におさまる土師器甕小片が出土した。

SD228 A-IV q r 50地区で検出した東西溝で、長さ1.5m以上、幅1.1~1.5m以上、深さ0.4m以上である。埋土は何層かに分かれるが主としてにぶい褐色系の砂質土で、奈良~平安時代の間におさまる土師器の小片が出土した。

SD252 A-V m 83・84地区で検出した南北溝で、長さ1.8m以上、幅0.8m以上、深さ0.1mである。遺構検出面では平面上は重複していないが、調査区の断面観察により奈良~平安時代の溝SD256より新しい。埋土は褐色砂質土で径10cm程の礫を含む。奈良~平安時代の間におさまる土師器甕等の小片が出土した。

SD254 A-V k 83・84地区で検出した南北溝で、長さ1.8m以上、幅1.0~1.5m、深さ0.5mである。切り合いにより平安時代の溝SD255より古い。埋土は黄褐色系のシルトまたは灰色粗砂である。奈良~平安時代の間におさまる土師器、須恵器の小片が出土した。

SD256 A-V m 83・84地区で検出した南北溝で、長さ1.7m以上、幅0.9m、深さ0.4mである。遺構検出面では、平面上は重複していないが、断面観察により奈良~平安時代の溝SD252より古い。埋土は三層に分かれ、上から順に灰白色砂質土、橙色砂質土、灰褐色粗砂である。奈良~平安時代の間におさまる土師器、須恵器小片が出土した。

遺構番号	発掘調査時 遺構番号	中絶区名	小地区名	長さ	幅	深さ	時代	主な出土遺物	備考
S D 30	S02-34-5	A-II 下層	r 20-29	45m以上	3m前後	1.5m	古墳前半	縄文土器 (44)、土師器高杯・壺 (45)	第1次調査で検出。 S H 217aより古
S D 41	—	A-II	a r 35	12m以上	0.4m	0.1m	不明	なし	第1次調査で検出。 S D 222aより古
S H 78	—	A-IV	a r 46-47	4.8m以上	3.2m	0.2m	不明	なし	第1次調査で検出
S D88-89	S D 26	A-IV	a r 55	21m以上	0.4-1.6m	0.4-0.6m	古墳一帯	土師器皿 (79)・壺 (80)	2条の溝。第1次調査で検出
S D 90	—	A-IV	a r 55-56	21m以上	2.0m	0.3m	奈良	なし	第1次調査で検出
S D 92	S D 27	A-IV	a r 56	18m以上	0.9m以上	0.3m	不明	なし	発掘調査時番号重複 第1次調査で検出。 S D 222aより古
S D 95	S D 9	A-IV	a r 57	12m以上	0.7m	0.2m	平安末 ～鎌倉初期	土師器小片、山形甕	第1次調査で検出。 S D 97より古
S D 97	S D 62	A-IV	a r 56-57	不明	不明	不明	古墳前半	土師器壺等小片	第1次調査で検出。 S D 95より古
S D 125	S D 5	A-V	a r 69	1.8m以上	0.6m	0.2m	奈良～平安	土師器小片	
S D 201	S D 1	A-II	a p 1	4m以上	1.5m	0.4-0.6m	奈良 (平安 ～鎌倉)	縄文土器 (65)、土師器高杯 (64)・壺 (66-68)、甕 (69)、 土師器小片、山形甕 (70-72-73)、小甕 (71)、鉢 (74)	2条の溝か?
S D 202	S D 2	A-II	a p 2-3	1.2m以上	2.2m	0.3m	平安末～ 鎌倉	土師器壺、透き器小片	S D 222aより新
S D 203	S D 3	A-II	a p 11	1.2m以上	0.8m	0.1m	奈良～平安	土師器小片	
S H 204	S K 4	A-II	a r 17	1.5m以上	2.8m	0.1m	奈良	なし	S D 217aより新
#205							次	壺	
S D 206	S D 6	A-V	a 58-66	32m以上	不明	0.1-0.3m	古墳前半	土師器高杯 (3・4)・壺 (5-7)、透き器・山形甕	S D 222a一連か?
S D 207	S D 7	A-V	a 83-84	不明	1.8m	0.2m	奈良～平安	土師器壺・杯小片、透き器小片、製造土器小片	
S D 208	S D 8	A-V	r 76-83	33m以上	不明	0.8-1.0m	古墳前半	縄文土器 (8・9)、弥生土器壺 (10-13)、土師器高杯 (17-19)、 壺 (14-16)、甕 (20-25)、ミニチャア (26)、甕 (26)、小甕 (28)	落ち込みか?
#209							次	壺	
S D 210	S D 10	A-IV	a r 50	1.7m以上	0.3m	0.1m	奈良～平安	土師器小片	
S K 211	S K 11	A-IV	r 47-48	1.0m以上	0.3m	0.1m	古墳	土師器小片	
S H 212	S K 12	A-II	a r 24	1.6m以上	2.9m	0.2m	奈良	土師器皿 (49)・壺 (50)底、透き器小片	甕、S D 201より新
S K 213	S K 13	A-II	r 20	0.6m以上	1.1m	0.2m	不明	なし	
S H 214	S K 14	A-II	a r 19-20	1.2m以上	3.2m	0.1m	奈良	土師器杯 (51)・皿 (52-54)・壺 (55-60)、透き器小片	甕、緑水溝
S K 215	S K 15	A-II	a 15	1.2m以上	0.6m	0.2m	奈良	土師器片断小片、壺、製造土器小片	
S D 216	S D 16	A-I	a 1	2.0m以上	2.6m	0.2m	奈良	土師器壺 (77)	
S D 217	S D 17	A-II	a r 16-19	13m以上	0.4m	0.1m	奈良	土師器小片	S H 204より古
S D 218	S D 18	A-II	a r 27	1.8m以上	0.6m	0.1m	奈良～平安	土師器壺小片	
S D 219	S D 19	A-II	a r 27-28	4.5m以上	0.3-0.6m	0.3m	奈良	土師器壺・皿、透き器小片	
S D 220	S D 20	A-II	a p 7	2m以上	1.2m以上	0.1m	奈良	土師器高杯・壺、透き器小片、土師 (76)	S D 221より古
S D 221	S D 21	A-II	a p 6-7	2m以上	1.2m	0.2-0.5m	奈良	土師器皿・壺、透き器小片	S D 220aより新
S D 222	S D 22	A-II-IV	a r 32-57	不明	不明	0.3m	古墳前半	縄文土器 (29-32)、弥生土器壺 (33-34)、壺 (35)、 土師器高杯 (36-38)・壺 (41)・壺 (39-40)、木製品	S D 202a一連か?
S D 223	S D 23	A-II	a 13-14	4.5m以上	0.4-1.0m	0.05m	奈良	土師器皿	
S D 224	S D 24	A-IV	a r 44-45	1.7m以上	1.0-1.6m	0.1m	不明	土師器小片	
S D 225	S D 25	A-IV	r 45-46	1.8m以上	2.2m	0.1-0.2m	奈良	土師器壺・杯類小片	
#226							次	壺	
S D 227	S D 27	A-II	a 33-34	3.8m以上	0.9m以上	0.3m	奈良	土師器壺・壺	発掘調査時番号重複
S D 228	S D 28	A-IV	a r 50	1.5m以上	1.1-1.5m	0.4m	奈良～平安	土師器小片	
S D 229	S D 29	A-I-8下層	p 1-5	20m以上	3m前後	1.6m	平安末	土師器杯 (94)・壺 (95)	S D 202aより古
S K 230	S K 30	A-V	r 84	0.8m以上	0.6m	0.1m	奈良	土師器壺 (92-93)	発掘調査時番号重複
S D 231	S D 30	A-V	m 83-84	2.4m以上	0.7m以上	0.1m	近世以降	陶器瓿鉢、鉄鉢皿、土師器、透き器	S D 205より新、発掘 調査時番号重複
#232							次	壺	
S D 233	S D 33	A-II 下層	a 6	0.9m以上	1.0m	0.5m	古墳	土師器、透き器小片	S D 226より新
#234							次	壺	
#235							次	壺	
S D 236	S D 36	A-II 下層	a 6	1.8m以上	2.3m	0.5m以上	古墳?	土師器小片	S D 233aより古
S D 237	S D 37	A-I	a m-1-2	48m以上	0.8-2.0m	0.2m	縄代	近世陶器鉢・壺・皿、瓦、鏡貨 (96)、石鏡 (97)	S D 239aより新
S Z 238	S Z 38	A-I	n 1	1.8m			近世～明治	陶器壺 (98)・鉢・皿・瓦など	
S D 239	S D 39	A-I	b 2	0.9m以上	0.6m	0.1m	縄代	縄代遺物	S D 237aより古
S D 240	S D 40	A-I 下層	j 2	1.8m以上	1.0m	0.5m	古墳前半	土師器高杯 (46)	
S D 241	S D 41	A-I 下層	k 1	2.0m以上	0.5m	0.2m	不明	土師器小片	

第3表 A地区遺構一覧 (1)

遺構番号	所在地(調査遺構番号)	中地区名	小地区名	長さ	幅	高さ	時代	主な出土遺物	備考
SD242	SD42	A-1 下層	h1-2	1.4m以上	0.6m	0.2m	奈良	土師器壺小片	
SD243	SD43	A-1 下層	f1-2	1.5m以上	0.6m	0.1m	不明	土師器小片	
SD244	SD44	A-1 下層	l m1-2	2.5m以上	1.0m	0.1m	奈良	土師器、漆器壺小片	
SD245	SD45	A-1 下層	h1	8m以上	0.5m	0.1m	奈良	土師器、漆器壺小片(近世陶器混入)	
SD246	SD46	A-1 下層	f1	3.8m以上	0.5m以上	0.1m	中世	土師器皿、山形碗	
SD247	SD47	A-1 下層	f1-2	1.5m以上	0.8m	0.2m	平安末	土師器壺、口付土師器、漆器壺小片	SD249より古
SD248	SD48	A-1 下層	k1 f1-2	1.8m	0.7m	0.9m	平安末～鎌倉	土師器、漆器壺、山形碗(近世陶器混入)	
SD249	SD49	A-1 下層	f1-2	1.5m以上	0.6m	0.1m	中世以降	陶器小片	SD247より新
SD250	SD50	A-V	m83-84	1.8m以上	1.1m	0.1m	古墳～奈良	土師器壺、漆器壺小片	SD231より古
SD251	SD51	A-V	k1 83-84	2.0m以上	0.7m	0.2m	奈良	土師器壺等、漆器壺等小片	SD253より新
SD252	SD52	A-V	m83-84	1.8m以上	0.8m	0.1m	奈良～平安	土師器壺等小片	SD256より新
SD253	SD53	A-V	f83-84	3.5m以上	0.5m	0.1m	奈良	土師器壺等、漆器壺小片	SD251より古
SD254	SD54	A-V	k83-84	1.8m以上	1.0-1.5m	0.5m	奈良～平安	土師器、漆器壺小片	SD256より古
SD255	SD55	A-V	j k84	2.0m以上	1.0m	0.2m	平安前期	土師器壺、灰釉陶器小片	SD254より新
SD256	SD56	A-V	m83-84	1.7m以上	0.9m	0.4m	奈良～平安	土師器、漆器壺等小片	SD252より古
SD257	SD57	A-V	p-r 84	9m以上	1.2m以上	0.1m	奈良	土師器壺・杯類、漆器壺・杯類、灰釉陶器、山形碗(81) 器入、土器(取51)	
SD258	SD58	A-1 下層	n2	1.2m以上	1.1m	0.3m	奈良	土師器壺(陶器混入)	
SD259	SD59	A-V	o83-84	1.8m以上	0.7-1.2m	0.4m	奈良	土師器壺・壺、漆器壺杯・壺	
SD260	SD60	A-V	o83-84	1.8m以上	0.9m	0.2m	奈良	土師器壺(84-85)・杯・皿(86-90)・壺、漆器壺等小片	
SD261	SD61	A-V	o p84	6m以上	0.7-1.2m	0.1m	奈良	土師器壺・高杯・壺、漆器壺等小片	
* 262						欠		壺	
SK263	SK63	A-V 下層	o44	1.0m以上	1.0m	0.2m	奈良	土師器壺・壺小片	
SD264	SD64	A-II	q-r 29	1.5m以上	1.0m	0.4m	奈良～平安	土師器壺等、漆器壺等小片	SD265より古
SD265	SD65	A-II	q-r 29	1.8m以上	0.2m以上	0.1m	平安末～鎌倉	土師器、山形碗小片	SD264-269より新
* 266						欠		壺	
SD267	SD67	A-II	q-r 30	2.0m以上	0.3m	0.1m	奈良～平安	土師器、漆器壺小片	
* 268						欠		壺	
SD269	SD69	A-II	q-r 29	2.0m以上	0.7m	0.2m	不明	土師器小片	SD265より古
SD270	SD70	A-V 下層	p o83-84	不明	7m	0.7m以上	奈良	土師器壺・杯・高杯・壺、漆器壺杯・壺小片	
SD271	SD71	A-V	q-r 59	2.0m以上	1.1m以上	0.3m	古墳前半	土師器壺・壺(47-48)・高杯等小片	SD272より古
SD272	SD72	A-V	q-r 59	3.0m以上	1.5m以上	0.1m	奈良～平安	土師器壺小片	SD271より新
SK273	SK73	A-V	r83	1.0m	0.5m	0.5m	古墳	土師器壺	
SD274	SD74	A-V 下層	n o83-84	2.0m以上	7.3m	0.8m	奈良	土師器壺・壺、漆器壺小片	
SD275	SD75	A-V 下層	q-r 60-62	2.5m以上	2.5m	0.9m	古墳前半	土師器小片	
SD276	SD76	A-V 下層	p83-84	-----	-----	-----	奈良	土師器壺(91)、壺、漆器壺小片	

第4表 A地区遺構一覧(2)

遺構番号	中地区名	柱穴番号	規模	柱間寸法	方位	時代	出土遺物
SB277	A-II	a15p1, a16p1-2-3, a17p1	3間	1.7m等間	N8°E	奈良	土師器杯・皿(61)・壺
SB278	A-V	r70p3, r71p1-2	3間	1.8+2.2+2.0m	N11°E	奈良	土師器壺小片
SB279	A-V	r72p1-2-3, r73p2	3間	1.3m等間	N11°E	奈良	土師器杯・壺、漆器壺杯蓋(62)等
SB280	A-II	r22p1-2, r23p1	3間	1.95m等間	N24°E	奈良	土師器小片
SB281	A-V	r68p3, r69p1	2間	1.8m等間	N10°E	奈良	土師器杯等小片
SB282	A-V	r68p3-5, r70p1	2間	1.8m等間	N8°E	奈良	土師器小片、漆器壺杯
SB283	A-V	r79p2, r80p4	3間	1.8m等間	N16°E	奈良	土師器小片

第5表 A地区掘立柱建物一覧

SD264 A-II q r 29地区で検出した東西溝で、長さ1.5m以上、幅1.0m、深さ0.4mである。南側の法面には中段がみられる。切り合いにより平安時代末期～鎌倉時代の溝SD265より古い。埋土は暗褐色砂質土で、奈良～平安時代におさまる土師器甕等、須恵器小片が出土した。なお、古墳時代の古式土師器も出土した。

SD267 A-II q r 30地区で検出した東西溝で、長さ2.0m以上、幅0.3m、深さ0.2mである。埋土は暗褐色砂質土に浅黄色粗砂が混じる。奈良時代以降の土師器、須恵器の小片が出土した。

SD272 A-V q r 59地区下面で検出した南北溝で、長さ3.0m以上、幅1.5m、深さ0.1mである。切り合いにより古墳時代前半の溝SD271より新しい。奈良～平安時代の間におさまる土師器甕小片が出土した。

(6) 平安時代の遺構

① 溝

SD255 A-V j k 84地区で検出した南北溝で、長さ2.0m以上、幅1.0m、深さ0.2mである。切り合いにより奈良～平安時代の溝SD254より新しい。埋土はにぶい黄褐色粘質シルトに黒色砂質土が混じる。平安時代前期の土師器甕、灰軸陶器小片が出土したが、灰軸陶器は黒笹14号窯式または黒笹90号窯式のものである。

(7) 平安時代末期から鎌倉時代の遺構

① 溝

SD95 第1次調査で確認された東西溝で、今回の第3次でもその続きをA-IV南端 q r 57地区で検出した。切り合いにより古墳時代前半の溝SD97より新しい。第1次調査の成果も含めると長さ12m以上、幅0.7m、深さ0.2mである。埋土は褐色シルトで、平安時代末期～鎌倉時代の土師器小片と山茶碗が出土しているが、山茶碗は藤澤編年の5～6型式である。

SD202 A-II p 2・3地区で検出した東西溝で、長さ1.2m以上、幅2.2m、深さ0.3mである。切り合いにより平安時代末期～鎌倉時代の溝SD229より新しい。埋土は黒褐色土または粗砂混じり暗褐

色砂質土である。奈良～平安時代の間におさまる土師器甕、須恵器小片が出土した。

SD229 A-I l・ll p 1～5地区下面で検出した南北溝で、長さ20m以上、幅3m前後、深さ1.6mである。切り合いにより平安時代末期～鎌倉時代の溝SD202より古い。埋土は何層かに分かれるが、黄褐色系のシルト・砂質土・粗砂である。平安時代の杯(94)・甕(95)および平安時代末期の土師器小片が出土した。

SD247 A-I ll 1・2地区下面で検出した南北溝で、長さ1.5m以上、幅0.8m、深さ0.2mである。切り合いにより中世の溝SD249より古い。須恵器の小片および平安時代末期の土師器甕、ロクロ土師器が出土した。

SD248 A-I k l 2地区下面で検出した東西溝で、長さ1.8m、幅0.7m、深さ0.9mである。須恵器や平安時代～中世の土師器、山茶碗が出土した。近世陶器も出土したが、調査ミスによる混入であろう。

SD265 A-II q r 29地区で検出した東西溝で、長さ1.9m以上、幅0.2m以上、深さ0.1mである。切り合いにより時期不明の溝SD269および奈良～平安時代の溝SD264より新しい。平安時代から中世の土師器、山茶碗が出土した。

(8) 中世の遺構

① 溝

SD246 A-I l f 1地区下面で検出した東西溝で、長さ3.8m以上、幅0.5m以上、深さ0.1mである。埋土は褐色土で、中世の土師器皿、山茶碗が出土した。

SD249 A-I ll 1・2地区下面で検出した南北溝で、長さ1.5m以上、幅0.6m、深さ0.1mである。切り合いにより平安時代末期～鎌倉時代の溝SD247より新しい。埋土は褐色土で、中世以降の陶器小片が出土した。

(9) 近世から明治時代の遺構

① 溝

SD231 A-V m 83・84地区で検出した南北溝で、古墳～奈良時代の溝SD250上に平面上重

複して検出したもので、SD250よりも新しい。長さ2.4m以上、幅0.7m以上、深さ0.1mである。埋土はにぶい赤褐色砂礫である。近世以降の陶器摺鉢、鉄軸皿が出土した。当該遺構よりも古い時期である土師器や須恵器も出土した。

② 埋め糞土坑

SZ238 A-I n 1 地区で検出した埋め糞土坑で、平面形は径1.8mの円形である。陶器甕(98)は常滑製の甕である。埋土からは近世以降の陶器の椀・皿、瓦などが出土した。

(10) 時期不明の遺構

① 竪穴住居

SH78 第1次調査で竪穴住居として確認されたものであるが、今回の調査でもA-IV q r 46・47地区でその続きを検出した。第1次調査の成果も含めると平面形は東西4.8m以上×南北3.2m、深さは0.2mであるが、北側のラインが若干不定形である。方位は30°程東に振れる。第1次調査で時期不明としているが、今回の調査でも出土遺物がなく、時期を特定することができなかった。

② 溝

SD41 第1次調査で確認された東西溝であるが、今回の調査でもA-III q r 35地区でその続きを検出した。第1次調査の成果も含めると長さ12m以上、幅0.4m、深さ0.1mである。第1次調査では時期不明としたが、今回の調査でも出土遺物がないためやはり明確な時期は不明であるが、切り合いにより古墳時代前半の溝SD222より新しいことが確認された。

SD92 第1次調査で確認された溝で、今回の調査でもA-IV q r 56地区で検出した。第1次調査の成果も含めると長さ18m以上、幅0.9m、深さ0.3mである。時期は第1次調査で不明としているが、第3次調査でも出土遺物はなく、やはり時期不明である。

SD224 A-IV q r 44・45地区で検出した東西溝である。長さ1.7m以上、幅1.0-1.6m、深さ0.1mである。土師器の小片が出土したが、出土遺物から

の時期決定は困難である。

SD241 A-I k 1 地区下面で検出した南北溝で、長さ2.0m以上、幅0.5m、深さ0.2mである。埋土は暗褐色土で、土師器の小片が出土したが、出土遺物からの時期決定は困難である。

SD243 A-I l 1・2 地区下面で検出した南北溝で、長さ1.5m以上、幅0.6m、深さ0.1mである。埋土は明褐色土で、土師器の小片が出土したが、出土遺物からの時期決定は困難である。

SD269 A-II q r 29地区で検出した東西溝で、長さ2.0m以上、幅0.7m、深さ0.2mである。埋土は暗褐色砂質土で、土師器の小片が出土したが、出土遺物からの時期決定は困難である。切り合いによりSD265より古いことから、鎌倉時代以前の溝としか判断できない。

③ 土坑

SK213 A-II r 20地区で検出した土坑で、平面形は20.6m以上×1.1mで、深さ0.2mである。埋土は灰褐色砂質土であるが、出土遺物はない。

(11) 現代の擾乱

① 溝

SD237 A-I 地区はほぼ全面にわたる東西溝で、長さ48m以上、幅0.8~2.0m、深さ0.2mである。埋土は暗褐色土で、近世の陶器椀・皿・甕、瓦、銭貨(96)、石硯(97)が出土したが、切り合いによりSD239よりも新しいため現代の擾乱と判断した。

SD239 A-1 b 2 地区で検出した南北溝で、長さ0.9m以上、幅0.6m、深さ0.1mで、埋土は暗灰色土である。切り合いによりSD237よりも古い。埋土から現代の遺物が出土したことにより擾乱と判断した。

4 遺物

A地区からの出土遺物は、古い物は縄文時代、新しい物は近世で、このうち図示し得たものは118点である。出土量としては、古墳時代、奈良時代、平安時代末~鎌倉時代初期の三時期がほとんどである。

個々の出土遺物の法量や技法の特徴等については、遺物観察表に記載したので参照されたい。遺構からの出土遺物は、遺構の項で種類等を記しているので、ここでは図示し得た遺物のみ、各遺構別に特徴的な事項や補足説明を中心に概述する。

(1) 主要遺構出土の遺物

① 古墳時代前半の遺構からの出土遺物

SD206 出土遺物

土師器高杯(3)は、杯部と脚部上半部が残存するものであるが、杯部は内湾し、脚部は外反する。内外面ともミガキを施す。

土師器高杯(4)は脚部のみの破片であるが、脚部は外反し、ハケ調整を施すものである。

土師器甕(5・6)はS字状口縁甕である。(5)は口縁部の破片、(6)は上半部の残存で、胴部が大きく膨らむ。胴部外面にハケメを施し、内面はオサエ及びナデである。(6)の外面には煤が付着する。

土師器甕(7)は口頸部が「く」の字状を呈するもので、口縁部は外面に面をもつ。頸部に貼り付け突帯をもつものである。胴部外面は縦方向のハケメ、口頸部内面は横方向のハケメ、胴部内面は斜め方向のハケメである。

SD208 出土遺物

縄文土器(8・9)はともに口縁部の破片である。(9)は、口縁部が刻みで、外面には条痕がみられる。

弥生土器壺(10~13)は、いずれも小片である。(10)は、口縁部が外に大きく広く開くもので、頸部に直線文を施す。(11)は受口口縁壺である。(12)は広口壺で、口縁部に面を持ち、刻目文を施す。口縁部内面には浮文がある。内外面ともハケメ調整である。(13)は肩部の破片で、直線文と波状文を交互に施す。内面はナデである。

土師器壺(14~16)のうち(14)は口縁部の小片である。(15)は径5cm程の底部で内面には工具によるナデの痕跡がみられる。壺(16)は、口径12cm、胴部最大径17cm程の壺である。胴部は球状で、口縁部は外反し、端部は上下に肥厚し外面に面をもつ。(18)は羽状刺突で、その上に四方に棒状浮文を3個ずつ貼り付ける。頸部外面はハケメ、胴部は

上から、直線文、波状文、刺突文、刻目文の順に文様を施す。施文の単位は7本である。内面は口縁部が羽状刺突で、胴部にはオサエとナデがみられる。外面胴部中央に線刻による文様がみられる。

土師器高杯(17~19)はいずれも破片である。(17)は杯部で、内外面ともミガキである。(18)は脚部片であるが、裾部が大きく開く。円孔透かしがあり、外面はミガキ、内面はナデである。(19)は直線的な脚部であるが、裾部で屈曲して大きく開く。

土師器甕(20)は、SD206出土の土師器甕(7)を小さくしたような形状であるが、口縁部は丸く、胴部外面は縦方向のケズリである。

土師器甕(21~25)は、S字状口縁甕の破片であるが、胴部は内外面ともハケメである。(22・23)の口縁部外面にはキザミがみられる。

土師器椀(26)は、口径12cm、器高3cmである。口縁部ココナデで、体部外面にはオサエがみられる。

土師器甕(27)は、口縁部の破片のため口径は不明であるが、長胴甕になるものである。外面は斜め方向のハケメ、内面は横方向のハケメである。

ミニチュア土器(28)は、口径4.3cm、器高2.1cmのもので、器壁は底部で0.6cm、体部で0.4cmと厚い。いわゆる手捏ね土器で外面にはオサエの痕がみられる。

SD222 出土遺物

縄文土器(29~32)は、いずれも小片で、(29)は口縁部、(30~32)は胴部である。(29)は条痕、(31)は貼り付け隆帯である。(32)は後期の浅鉢で、外面がナデ、内面がミガキである。

弥生土器壺(33・34)はともに胴部の破片であるが、(33)は頸部から肩部にかけて櫛状直線文、胴部は直線文と波状文であり、(34)は波状文を施す。

弥生土器甕(35)は、口縁部は短く外反し、端部は面を持ち上方につまみ上げる。胴部外面は縦方向のハケメ、内面は斜め方向のハケメである。

弥生土器高杯(36~38)はいずれも脚部で、外に開くものである。(38)は径14cmと特に大きく開く。3点とも三方向に円孔透かしを穿つ。(36)は外面ミガキ、内面ハケメである。(37)の外面は直線文、ハケメである。外面は直線文、ミガキ、内面はハケメである。

土師器壺 (41) は口径23cm程の大きさのもので、口縁が2段になる。

土師器甕 (39・40) はともに台部の破片である。台部下端は内側に折り曲げる。外面はハケメである。

土師器椀 (42) は、口径15cm程で、口縁部ヨコナデ、体部外面ミガキである。

土師器甕 (43) は、口径15cm程で、胴部最大径も口径とほぼ同じである。

SD30 出土遺物

縄文土器 (44) は、胴部の破片である。外面は二枚貝条痕のちミガキと思われる。

土師器壺 (45) は、口縁部の破片である。内外面ともミガキで、外面には波状文を施す。

SD240 出土遺物

高杯 (46) は、脚部のみの残存であるが脚径13cm程で、三方向に透かし孔がみられる。脚部上半は三段の櫛歯直線文、下半はハケメ後ミガキである。

SD271 出土遺物

土師器甕 (47・48) はともに破片であるが、(47) は口縁部で、体部外面はハケメである。(48) は底部及び台部で、台部端部は内側に折り曲げる。

②奈良時代の遺構からの出土遺物

SH212 出土遺物

土師器皿 (49) は、口径16cm、器高2.3cmである。器壁が摩耗しているため調整は不明である。

土師器甕 (50) は平底の甕である。外面下半はハケメ後ケズリであり、上半はハケメ後ナデである。内面は下半がケズリ、上半はナデである。底部に炭化物が付着する。

SH214 出土遺物

土師器杯 (51) は、口径は15cm程で、器高4cmである。口縁部はヨコナデ、底部外面は未調整である。

土師器皿 (52~54) は口径22cm程のもので、いずれも底部はヘラケズリである。(54)の内面には螺旋暗文がみられる。

土師器甕 (55~58) は、口縁部の破片であるが、口径が23~30cmと大型であり長胴甕になるものである。口縁は「く」の字状である。口縁部ヨコナデ、胴部外面は斜め方向のハケメ、内面は(55・57)が横方向のハケメ、(56・58)はナデである。

土師器甕 (59・60) は胴部が球状になるもので、(60)は胴部最大径が28cm程である。(59・60)とも胴部は内外面ともハケメである。

SB277 出土遺物

土師器皿 (61) は口径18cm程で、口縁部が外反する。口縁部はヨコナデで、底部外面はケズリとオサエがみられる。

SB279 出土遺物

須恵器杯蓋 (62) は径15cm程で、かえりがつかないものである。つまみ部分は欠損しているため、その形態は不明である。

SD201 出土遺物

縄文土器 (63) は、口縁部の小片で、外面は二枚貝背の押圧である。

土師器杯 (64) は平安時代前期の杯である。小片のため口径は不明であるが、口縁部を外反させるもので、底部はナデである。

土師器甕 (65・66) は口径16cmの中型の甕である。胴部外面は縦方向のハケメである。(65)はハケメが粗く、平安時代のものである。

土師器甕 (67・68) は口径20~25cmの長胴甕である。口頸部は「く」の字状であり、口縁端部は外に面を持ち、上方にやや肥厚する。胴部外面はハケメであるが、頸部は斜め方向、胴部中央は縦方向、底部は横方向である。胴部内面は上半が横方向のハケメ、下半から底部がケズリである。

土師器瓶 (69) は上半部のみ残存する。口径は24cm程で、端部は上方に面を持つ。胴部上方には把手がつく。外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメである。

山茶椀 (70・72・73) はいずれも小片である。高台径6~7cm程で、高台は低い。底部外面には糸切り痕がみられる。成形はロクロナデである。(70)の口縁端部は若干外反する。藤澤福年の5型式、12世紀後葉~13世紀初葉のものであろう。

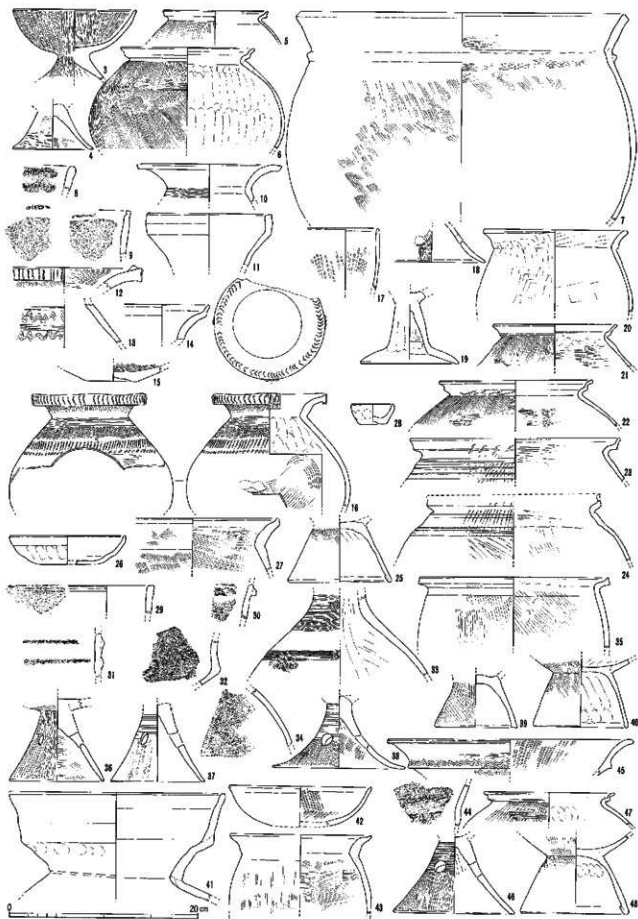
山茶椀系小椀 (71) は高台径5cm程で、高台の断面は三角形である。ロクロ成形である。

陶器鉢 (74) は山茶椀質の鉢で高台部付近の破片である。底部には糸切り痕がみられる。ロクロ成形で、片口になるものであろう。

土錘 (75) 細長い形のもので、長さ4.4cm、最大幅

遺物 番号	発 見 年 号	出土遺物 出土位置	種類	口径 (cm)	高さ (cm)	底 径 寸 法	技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備 考
3	07-03	S D206	土師器高杯	13.0			ミガキ	やや粗、砂粒含み	藍	灰緑	杯部1/6	
4	07-02	S D206	土師器高杯			8.5	ハケメ	やや密	藍	に灰青	杯部1/2	
5	08-01	S D206	土師器壺	11.0			ヨコナデ、ハケメ	粗、砂粒含み	藍	に灰青	口縁部1/6	
6	07-01	S D206	土師器壺	14.0			ヨコナデ、ハケメ	粗、砂粒含み	藍	に灰青	上半部1/6	保存箱
7	08-01	S D206	土師器壺	34.0			ヨコナデ、ハケメ	粗、砂粒含み	藍	灰白	口縁部1/3	
8	04-08	S D208	縄文土器				ヨコナデ	やや粗	藍	に灰青	口縁部小片	
9	04-08	S D208	縄文土器				キザミ、条痕	密、砂粒含み	藍	黄緑	口縁部小片	
10	03-04	S D208	弥生土器壺	15.2			ヨコナデ、黄緑文	密、砂粒含み	藍	橙	口縁部1/4	
11	04-05	S D208	弥生土器壺	13.0			ヨコナデ	やや密、砂粒含み	藍	橙	口縁部1/6	
12	05-03	S D208	弥生土器壺				キザミ、ハケメ、厚文	密、砂粒含み	藍	橙	口縁部小片	
13	05-04	S D208	弥生土器壺				黄緑文、波状文	密、砂粒含み	藍	橙	体部小片	
14	04-07	S D208	土師器壺				ナデ	密、砂粒含み	藍	橙	口縁部小片	
15	04-02	S D208	土師器壺			5.1	ナデ	やや密、砂粒含み	藍	橙	底部	
16	08-02	S D208	土師器壺	12.0			黄緑文、キザミ、ハケメ、 条痕文、波状文	やや粗	藍	橙	上半部	線刻
17	07-02	S D208	土師器高杯				ミガキ	密、砂粒含み	藍	橙	小片	
18	04-04	S D208	土師器高杯				ヨコナデ、ミガキ、透かし	密、砂粒含み	藍	橙	口縁部小片	
19	03-03	S D208	土師器高杯			10.2	ナデ	密、砂粒含み	藍	橙	脚部2/3	
20	04-03	S D208	土師器壺	15.0			ヨコナデ、ケズリ	密、砂粒含み	藍	橙	口縁部1/4	
21	03-06	S D208	土師器壺	13.0			ヨコナデ、ハケメ	やや密、砂粒含み	藍	に灰青	口縁部1/2	
22	05-02	S D208	土師器壺	16.0			ヨコナデ、ハケメ、キザミ	密、砂粒含み	藍	に灰青	口縁部1/4	
23	03-07	S D208	土師器壺	22.0			ヨコナデ、ハケメ、キザミ	やや密、砂粒含み	藍	黄緑	口縁部1/10	
24	05-01	S D208	土師器壺				ヨコナデ、ハケメ、黄緑文	やや密、砂粒含み	藍	に灰青	口縁部-体部	
25	04-06	S D208	土師器壺			10.7	ナデ、ハケメ	やや密、砂粒含み	藍	橙	台部1/3	
26	04-01	S D208	土師器壺	12.0	3.0		ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ	密、砂粒含み	藍	に灰青	1/3	
27	03-05	S D208	土師器壺				ヨコナデ、ハケメ	密、砂粒含み	藍	黄青	口縁部小片	
28	03-01	S D208	手捏ね土器	4.3	2.1		ナデ、ユビオサエ	密、砂粒含み	藍	黄緑	ほぼ完全	
29	01-05	S D222	縄文土器				条痕	粗	やや中良	黄青	小片	
30	04-09	S D222	縄文土器				ナデ	やや粗	藍	黄青	小片	
31	02-03	S D222	縄文土器				斜りつけ條帯	粗、砂粒含み	やや中良	灰白	杯部小片	
32	04-05	S D222	縄文土器高杯				ナデ、ミガキ	やや粗	藍	に灰青	杯部小片	
33	03-01	S D222	弥生土器壺				黄緑文、波状文	やや粗	藍	黄青	体部小片	
34	02-02	S D222	弥生土器壺				波状文	やや密	やや中良	黄青	胴部小片	
35	01-02	S D222	弥生土器壺	19.7			ヨコナデ、ハケメ	やや密	やや中良	灰黄	口縁部小片	
36	01-03	S D222	土師器高杯			10.0	ハケメ、ミガキ、三方向透かし	やや密	やや中良	灰黄	胴部	
37	03-02	S D222	土師器高杯			10.8	黄緑文、ハケメ、三方向透かし	やや密	藍	に灰青	胴部1/2	
38	02-01	S D222	土師器高杯			13.8	黄緑文、ミガキ、三方向透かし	やや密	やや中良	橙	脚部1/3	
39	01-03	S D222	土師器壺			8.5	ハケメ	やや密	やや中良	に灰青	台部のみ	
40	01-04	S D222	土師器壺			9.7	ナデ、ハケメ	やや粗、砂粒含み	やや中良	に灰青	台部のみ	
41	09-01	S D222	土師器壺	22.8			ヨコナデ	やや密	藍	黄青	口縁部	
42	02-04	S D222	土師器碗	14.8			ヨコナデ、ミガキ	やや密	やや中良	橙	1/8	
43	09-02	S D222	土師器壺	15.0			ヨコナデ、ハケメ	やや密、砂粒含み	藍	灰緑	上半1/4	
44	04-06	S D30	縄文土器				黄緑、二枚貝条痕、ミガキ	やや粗	藍	黄青	小片	
45	07-01	S D30	土師器壺	25.7			ミガキ、波状文	密、砂粒含み	藍	に灰青	口縁部1/8	
46	08-01	S D240	土師器高杯			12.7	黄緑文、ハケメ、ミガキ、透かし	やや密、砂粒含み	藍	に灰青	胴部ほぼ完全	
47	06-05	S D271	土師器壺	13.7			ヨコナデ、ハケメ	やや粗、砂粒含み	やや中良	に灰青	口縁部1/6	
48	06-06	S D271	土師器壺			11.1	ナデ、ハケメ	やや粗、砂粒含み	やや中良	橙	台部1/6	

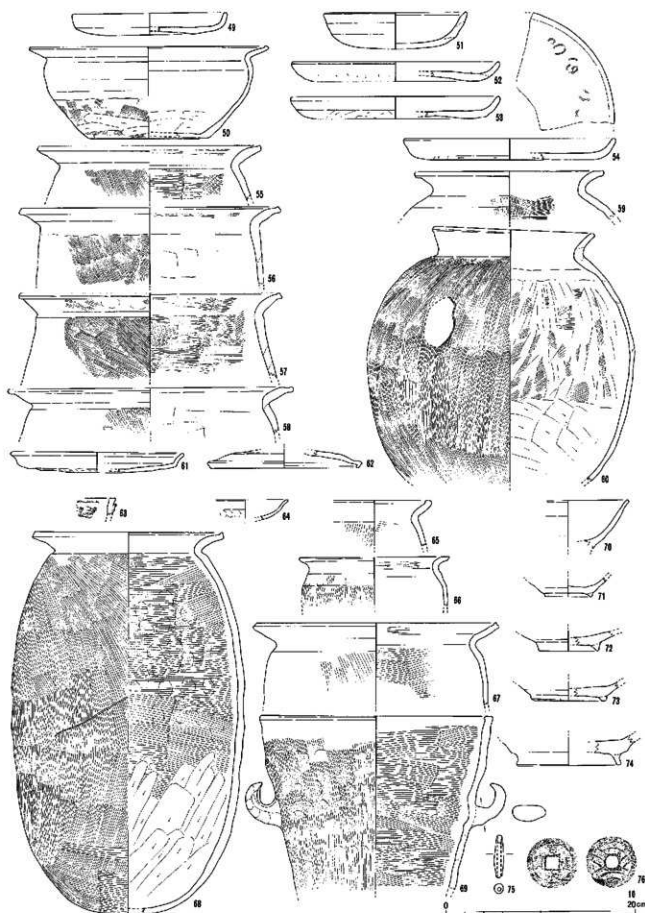
第6表 A地区出土遺物観察表(1)



第15图 A地区出土文物实测图(1) (1:4)

遺物番号	発掘番号	出土遺物出土位置	種類	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	注記	技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
49	001-03	S H212	土師器皿	16.0	2.3	9.0		ヨコナデ	やや密	良	橙	1/4	灰化物付着
50	001-01	S H212	土師器壺	24.8	9.6	11.4		ハケメ、ナデ、ケズリ	やや密、砂粒含み	内面不良	黄褐色	1/3	
51	003-04	S H214	土師器杯	14.8	3.9			ヨコナデ、未磨盤	粗、砂粒含み	不良	に灰褐色	3/4	
52	003-03	S H214	土師器皿	21.6	2.1			ヨコナデ、ケズリ	やや粗、砂粒含み	やや不良	橙	1/8	
53	003-02	S H214	土師器皿	21.8	3.5			ヨコナデ、ケズリ	やや粗、砂粒含み	良	橙	1/6	
54	003-05	S H214	土師器皿	22.0	2.0			ヨコナデ、ケズリ、織文	やや密、砂粒含み	良	に灰褐色	1/4	
55	003-01	S H214	土師器壺	23.2				ヨコナデ、ハケメ	やや粗、砂粒含み	差	橙	口縁部1/4	
56	002-03	S H214	土師器壺	27.2				ヨコナデ、ハケメ	やや密、砂粒含み	差	に灰褐色	口縁部1/6	
57	002-01	S H214	土師器壺	27.3				ヨコナデ、ハケメ	やや粗	不良	黄褐色	口縁部1/4	
58	002-04	S H214	土師器壺	29.7				ヨコナデ、ハケメ	やや密、砂粒含み	やや不良	に灰褐色	口縁部1/8	
59	002-02	S H214	土師器壺	21.0				ヨコナデ、ハケメ	やや密	やや不良	に灰褐色	口縁部1/6	
60	004-01	S H214	土師器壺	16.5				ヨコナデ、ハケメ	粗、砂粒含み	不良	に灰褐色	上半3/4	縁部に穿孔
61	001-04	S B277	土師器皿	18.0	2.1	6.4		ヨコナデ、ケズリ	やや密	良	橙	1/6	
62	001-05	S B279	須恵器蓋	15.4				ロクロナデ	密、砂粒含み	良	灰	1/6	
63	040-07	S D201	織文土器					二枚貝骨の押圧	やや密	差	黄褐色	口縁部小片	
64	019-03	S D201	土師器杯					ヨコナデ、オサエ	やや密	やや良	橙	縁部小片	
65	019-04	S D201	土師器壺					ヨコナデ、ハケメ	やや粗	やや良	に灰褐色	口縁部小片	
66	019-02	S D201	土師器壺	16.0				ヨコナデ、ハケメ	やや粗	やや良	に灰褐色	口縁部1/3	
67	005-01	S D201	土師器壺	25.0				ヨコナデ、ハケメ	やや密	やや良	に灰褐色	上半部小片	
68	021-01	S D201	土師器壺	20.0	40.0			ヨコナデ、ハケメ、ケズリ	やや密、砂粒含み	良	に灰褐色	1/2	
69	019-01	S D201	土師器壺	24.0				ヨコナデ、ハケメ	やや密	良	に灰褐色	上半部1/3	
70	020-05	S D201	山菜甕					ロクロナデ	密	良	灰白	縁部小片	
71	020-04	S D201	小甕					5.0 ロクロナデ	密	良	灰白	底部	
72	020-07	S D201	山菜甕					6.0 ロクロナデ	密	良	灰白	底部1/4	
73	020-08	S D201	山菜甕					7.0 ロクロナデ	密	良	灰白	底部1/4	
74	020-06	S D201	高脚鉢					11.0 ロクロナデ	密	良	灰白	底部片	
75	005-02	S D201	土師	高4.4	幅1.0	重0.8g		ナデ	密	良	に灰褐色	ほぼ完整	
76	005-03	S D201	埴瓦	径2.8				寛永通宝				完整	裏面に伏文

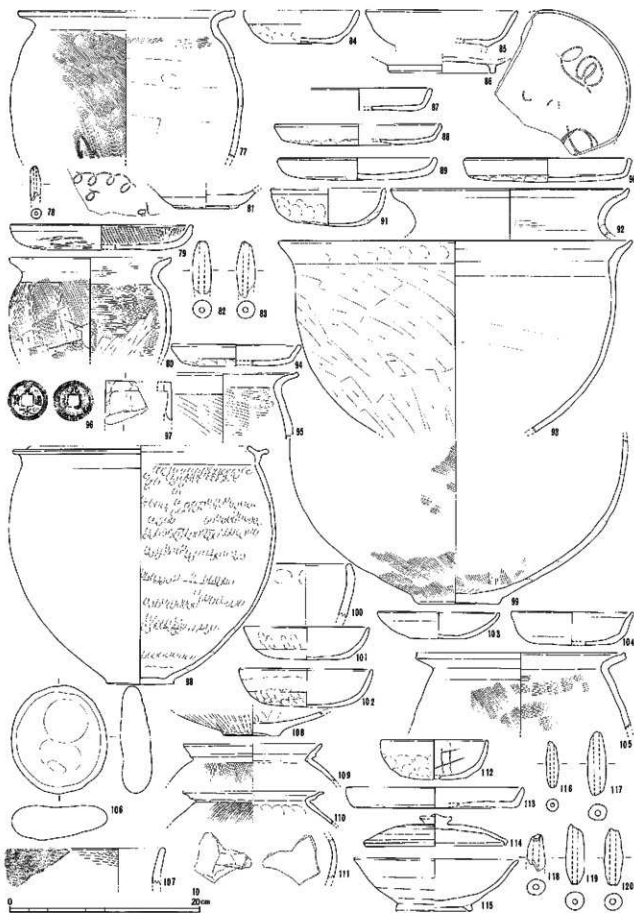
第7表 A地区出土遺物観察表(2)



第16図 A地区出土遺物実測図(2) (1:4, ただし76は1:2)

遺物 番号	発 見 年 号	出土遺物 出土位置	種類	口径 (cm)	高さ (cm)	重 量 g	注記の 特 徴	胎土	構成	色調	残存率	備 考
77	01-01	S D216	土師器壺	22.7			ヨコナデ、ハケメ	やや密	やや黄	に灰褐色	上半1/5	
78	02-05	S D220	土師 筒形3.6			幅1.1 重量3.6g		やや密	やや黄	に灰褐色	2/3	
79	03-04	S D228-8	土師器皿	19.0	2.7		ヨコナデ、ミヅキ、埋文	密、砂粒含み	黄	橙	1/4	
80	07-02	S D248-8	土師器壺	16.8			ヨコナデ、ハケメ、ケズリ	やや密、砂粒含み	黄	灰黄緑	口縁部1/2	保存書
81	08-02	S D257	山形瓶			6.0	ロウロナデ、糸切り痕、胎子 付け高さ	やや密、砂粒含み	黄	灰白	底面のみ	
82	08-03	S D257	土師 筒形5.5			幅2.0 重量5.5g		やや密、砂粒含み	黄	に灰褐色	ほぼ完全形	
83	08-04	S D257	土師 筒形5.9			幅2.0 重量5.5g		やや密、砂粒含み	黄	灰黄緑	ほぼ完全形	
84	06-03	S D260	土師器碗	12.0	3.5		ヨコナデ、ナデ、オサエ	やや密	やや黄	灰橙	3/8	
85	06-02	S D260	土師器碗	15.9			ヨコナデ、ナデ	やや密	やや黄	橙	1/6	
86	06-01	S D260	土師器皿			10.4	ナデ	やや密	やや黄	橙	底面1/4	
87	05-04	S D260	土師器皿		2.4		ヨコナデ	やや密	やや黄	浅黄緑	小片	
88	05-03	S D260	土師器皿	17.3	2.2		ヨコナデ、オサエ	やや密	やや黄	橙	小片	
89	05-02	S D260	土師器皿	16.4	2.4		ヨコナデ、ケズリ	やや密	やや黄	橙	1/4	
90	05-01	S D260	土師器皿	17.2	2.5		ヨコナデ、ケズリ、埋文	密	黄	橙	1/3	
91	06-04	S D276	土師器碗	12.0	4.0		ヨコナデ、ナデ、オサエ	やや密	やや黄	浅黄緑	2/3	
92	01-02	S K230	土師器壺	25.0			口縁部ヨコナデ、ハケメ	やや密	不良	灰白	口縁1/4	
93	03-01	S K230	土師器壺	37.1			口縁部ヨコナデ、オサエ、ケ ズリ	やや密	やや黄	に灰褐色	1/4	
94	07-03	S D229	土師器杯	13.5	2.3		ヨコナデ、オサエ	密、砂粒含み	黄	橙	1/6	
95	07-05	S D229	土師器壺				ヨコナデ、ハケメ	やや密、砂粒含み	黄	に灰褐色	口縁部小片	保存書
96	08-06	S D237	鏡筒	径2.1			黄水浸透					調査「元」
97	08-05	S D237	石鏡									小片
98	02-01	S Z238	陶器壺	91.0	90.2	27.9	タタキ、ナデ	やや密、砂粒含み	黄、軟黄	灰緑	1/2	
99	08-01	r 62a11	土師器壺			8.2	ハケ後ナデ	粗、砂粒含み	黄	灰白	下半1/3	
100	03-06	r 17a13	製塩土器				ナデ	粗、砂粒含み	黄	橙	小片	
101	03-03	r 20a12	土師器碗	13.2	3.4		ナデ、ヨコナデ、オサエ	密、砂粒含み	黄	灰白	1/2	
102	03-02	r 20a12	土師器碗	13.9	4.0		ナデ、ヨコナデ、オサエ	密、砂粒含み	黄	浅黄緑	ほぼ完全形	
103	03-04	a 15a13	土師器杯	12.6	2.8		ナデ、ヨコナデ	密、砂粒含み	黄	橙	1/4	
104	03-05	a 13a12	土師器杯	12.8	3.5		ナデ、ヨコナデ	やや密、砂粒含み	黄	橙	1/4	
105	03-01	o 83a11	土師器壺	22.0			ヨコナデ、ハケメ	やや密、砂粒含み	黄	浅黄緑	口縁1/4	
106	05-01	r1地区廃土	石器	縦11.4	横10.1	厚3.6						重量546g
107	03-03	r 25a1a壺	縄文土器				黄褐色	やや粗	黄	に灰褐色	口縁部小片	
108	03-02	r 77a1a壺	土師器壺			6	ミヅキ、ナデ	やや密	やや黄	橙	底面	
109	04-01	r 63a1a壺	土師器壺	14.6			ヨコナデ、ハケメ	やや密	黄	灰白	口縁1/6	
110	04-02	o 84a1a壺	土師器壺	14.8			ヨコナデ、ハケメ	やや密、砂粒含み	黄	灰黄緑	口縁1/6	
111	04-04	r 63a1a壺	土師器鉢				ナデ	やや密、砂粒含み	黄	灰黄緑	小片	内面に水浸痕
112	03-02	k 32a1a壺	土師器碗	11.0	4.1		ナデ、ヨコナデ、オサエ	やや密	やや黄	に灰褐色	2/3	
113	03-04	o 83a1a壺	土師器皿	18.5	2.2		ヨコナデ、オサエ、ケズリ	やや密	やや黄	橙	1/3	
114	05-03	p 4 a1a壺	濃黄土器	14.7	3.3		ロウロナデ、ロウロナデ	粗、砂粒含み	やや黄	に灰褐色	1/6	ロウロ回転石磨子
115	05-01	r 18a1a壺	山形瓶	17.0	5.5	8.9	ロウロナデ、糸切り痕、胎子 付け高さ	やや密、砂粒含み	黄	灰白	底面境、縁部 小片	
116	05-06	陶土	土師 筒形4.9			幅1.3 重量4.9g	ナデ	やや密	やや黄	橙	完全形	
117	03-08	o 84a1a壺	土師 筒形6.7			幅2.1 重量17.3g	ナデ	やや密	やや黄	に灰褐色	完全形	
118	03-07	o 83a1a壺	土師 筒形3.9			幅2.1 重量11g	ナデ	やや密	やや黄	に灰褐色	1/2	
119	03-09	o83a1a壺	土師 筒形6.3			幅2.0 重量20.9g	ナデ	やや密	やや黄	に灰褐色	完全形	
120	03-05	a 84a1a壺	土師 筒形6.0			幅2.1 重量11.4g	ナデ	やや密	やや黄	黄灰	完全形	

第8表 A地区出土遺物観察表(3)



第17図 A地区出土遺物実測図(3) (1:4, ただし96は1:2, 98は1:8)

1.0cm、重量2.8gである。

銭貨(76)は江戸時代の寛永通宝で、裏面は波状文である。

SD216出土遺物

土師器甕(77)は、奈良時代のもので、口径23cm程、胴部最大径25cm程と胴部が若干大きくなる長胴甕である。口縁部はヨコナデ、胴部外面は斜めまたは縦方向のハケメである。内面はナデであるが、横方向のハケメが残存する。

SD220出土遺物

土鉢(78)は細長い形で、最大幅1.1cmである。

SD88・89出土遺物

土師器皿(79)は口径が19cm程、器高は2.9cmである。底部から体部下半はミガキで、内面には放射状暗文と螺旋暗文がみられる。

土師器甕(80)は、口縁部はヨコナデ、胴部外面は縦方向のハケメで、下半はケズリである。内面は横方向のハケメで、下半はケズリである。外面には煤が付着する。

SD257出土遺物

山茶碗(81)は底部から体部下半の破片であるが、高台はかなり低くつぶれている。藤澤福年の6型式である。

土鉢(82・83)は細長い形のもので、最大幅は2cm程である。

SD260出土遺物

土師器碗(84)は口径12cm、器高3.5cmで、底部は平底である。口縁部ヨコナデ、体部から底部は外面がオサエ、内面はナデである。

土師器碗(85)は、口径が16cmで、高台がつくものである。

土師器皿(86)は、高台付き皿で、高台径が10cm程である。

土師器皿(87~90)は口径17cm前後、器高2.2~2.5cmのものである。いずれも口縁部はヨコナデであるが、底部は(88)がナデ調整、(89)がヘラケズリ、(90)がヘラケズリ及びオサエである。(90)の内面には暗文がみられる。

SD276出土遺物

土師器碗(91)は口縁部ヨコナデで、体部にはオサエの跡が明瞭に残る。粘土紐つなぎ痕もみられる。

SK230出土遺物

土師器甕(92)は、口径25cm程である。頸部外面に縦方向のハケメがみられる。

土師器甕(93)は口径37cm程で、口縁部は外反し、端部は丸くおわる。胴部は半球状で、頸部の器壁が厚くなる。口縁部はヨコナデであるが、胴部から底部にかけての外面は全面にケズリである。

③平安時代の遺構からの出土遺物

SD229出土遺物

土師器杯(94)は口径13.5cmで、口縁部ヨコナデ、底部はオサエである。

土師器甕(95)は口頸部の破片であるが、長胴甕になるものである。

④近世の遺構からの出土遺物

SZ238出土遺物

陶器甕(98)は、埋め甕として使用されたもので常滑製の陶器甕である。胴部最大径が口径を上回り、口縁は、内端が極端に肥大化した形態である。焼成は軟質で、いわゆる赤物と呼ばれているものである。18世紀のもので、三重県内の類例は津市の六太B遺跡A地区のSZ68出土のもの、伊勢市の古市・中之地蔵町遺跡出土のものがある。

⑤現代の擾乱からの出土遺物

SD237出土遺物

銭貨(96)は江戸時代の寛永通宝で、裏面には「元」の文字がみられる。

石硯(97)は長方型であるが、海部の破片である。

(2) ビット及び遺物包含層等出土の遺物

ビットからは、製塩土器(100)、土師器碗(101・102)・杯(103・104)・壺(99)・甕(105)が出土した。遺物包含層からは、縄文土器(107)、土師器(111)・甕(108~110)・碗(112)・皿(113)、須恵器蓋(114)、山茶碗(115)、土鉢(117~120)が出土した。石器(106)と土鉢(116)は廃土からの採集遺物である。土師器(111)は小片のため断定はできないが、古墳時代の土師器で把手付きの鉢になる可能性が高い。内外面ともにナデで、内面には水銀朱がわずかにみ

られ、また外面には煤が付着する。

土師器碗(112)は、口径11cm、器高4cm程の碗で、口縁部は上方に立ち上がる。口縁部ヨコナデ、内面は体部から底部はナデ、外面底部はオサエがみられる。内面に「井」状のヘラ記号が施される。

(河北)

IV B地区の調査結果

1 概要

B地区は、A地区の西側約30mの所にほぼ平行して位置する細長い調査区で、B-I・II地区に分けて調査を行った。B-I地区は北側の調査区で、南北に細長く、北端から小地区14までである。B-II地区は逆L次状の形をした南側の調査区で、小地区15から南端までである。B地区の総延長は294mで、幅1.5～2.0m、調査面積は470㎡である。

2 土層

B-I地区の土層断面図は、西壁のD～E間とF～G間、南壁のE～F間でそれぞれ作成した。

B-I地区の基本的層序は、第1層が黄灰色砂質土の耕作土(1)、第2層が橙色粘質土の床土(2)、第3層が灰褐色粘質土の遺物包含層(5)、第4層が黒色砂質土の地山(4)である。遺構は第4層上面から切り込んでおり、検出もその面で行った。なお、小地区e9～11のSD305、SK301付近では、下層確認を実施しており、第5層が褐灰色シルト(24)、第6層が褐灰色シルトに砂混じり(25)、第7層が黄灰色シルト質砂礫(26)、第8層が褐灰色砂礫(27)である。

B-II地区の土層断面図は、南北方向の調査区はB～C間の西壁で、南端の東西方向の調査区はA～B間の北壁でそれぞれ作成した。

東西方向調査区の基本的層序は、第1層がオリーブ灰色粘質土の耕作土(1)、第2層が橙色粘質土の床土(2)、第3層が褐灰色シルト(19)、第4層が暗褐色粘質シルトの遺物包含層(126)、第5層が褐色粘質シルト(127)または黄褐色粘質シルト(135)、第6層が地山である。ただし、第2～5層については、場所によっては消滅している所もあり、層序は一定ではない。遺構は第6層上面で検出した。

南北方向調査区の基本的層序は、南端部から小地区42の溝SD332付近までは、第1層がオリーブ灰色粘質土の耕作土(1)、第2層が褐灰色砂質シル

ト(19)、第3層が灰褐色砂質シルト(22)、第4層が褐灰色粘質シルト(97)、第5層が地山である。溝SD332付近から小地区34付近の溝SD329までは第4層が消滅する。小地区34の溝SD329付近から小地区20の溝SD316付近までは、第1層がオリーブ灰色粘質土の耕作土(1)、第2層が褐色粘質土の床土(2)、第3層が褐灰色砂質シルト(19)、第4層が褐色砂質シルト(21)、第5層が灰褐色砂質シルト(22)、第6層が地山である。

SD316付近から北端までは、第1層がオリーブ灰色粘質土の耕作土(1)、第2層が褐色粘質土の床土(2)、第3層が灰褐色シルト(3)、第4層が黒褐色砂質土(4)、第5層が褐灰色砂質シルト(5)、第6層が暗赤褐色砂質土(6)、第7層が黒色土の地山(154)である。

3 遺構

遺構は古いものは古墳時代、新しいものは平安時代末～鎌倉時代である。遺構の時期決定については、A地区同様、出土遺物による時代判断を中心にして、これに他の遺構との切り合い関係を参考にした。しかしながら、出土遺物は細片が多く、また、遺構が重複している箇所では、遺物の混入が考えられるケースもあり、遺構の時期判断はより困難であった。各々の遺構の時期については、一定の幅を持った時期とせざるを得ない遺構が多くなり、次のような区分とした。

- (1) 古墳時代前半
- (2) 古墳時代
- (3) 古墳時代から奈良時代
- (4) 奈良時代以降
- (5) 古墳時代から平安時代
- (6) 奈良時代から平安時代
- (7) 平安時代
- (8) 平安時代末期から鎌倉時代
- (9) 時期不明

(1) 古墳時代前半の遺構

① 溝

SD320 B-II j k 23~26地区で検出した南北方向の大溝で、長さ13m、幅1.0m以上、深さ0.3mである。切り合いにより古墳時代の溝SD319より古い。埋土は黄褐色土で、古墳~平安時代前期の土師器高杯・壺が出土している。出土遺物は、古墳時代前半の物が多く、平安時代の遺物が少量である。当該遺構の周辺には平安時代の遺構があり、調査時に出土遺物が混入したか、あるいは平安時代の遺構の切り込みを見落としていたと考え、当該遺構の時期は古墳時代前半と判断した。

(2) 古墳時代の遺構

① 溝

SD307 B-I e f 11~14地区で検出した南北溝で、長さ15m以上、幅1.0m、深さ0.5mである。切り合いにより平安時代末期~鎌倉時代の溝SD304・315より古い。埋土は第1層が黒褐色砂質土、第2層が褐灰色細砂に黒褐色砂質土混じり、第3層が黒褐色粘質土に礫混じりで、古墳時代の土師器甕(121)等が出土した。

SD319 B-II j k 23~26地区で検出した南北方向の大溝で、長さ13m、幅1.0m以上、深さ0.1m以上である。切り合いにより古墳~平安時代の溝SD318より古く、古墳時代前半の溝SD320より新しい。埋土はにぶい黄褐色粘質土で、古墳時代の土師器甕、須恵器杯(122)が出土した。

SD323 B-II i 19・20地区で検出した南北方向の大溝で、長さ3.3m以上、幅2.0m、深さ0.4mである。切り合いにより古墳~平安時代の溝SD316より古い。埋土は褐灰色砂質土で、古墳時代の土師器甕小片、須恵器杯(125)が出土した。掘り上がりの形状が複雑であることから複数の遺構が重複している可能性がある。

SD329 B-II j k 31~35地区で検出した南北方向の大溝で、長さ15.5m以上、幅1.5m以上、深さ0.3mである。切り合いにより古墳~平安時代の溝SD322より古い。埋土は北側では一層で浅黄色粘質土ににぶい黄褐色砂質土混じりであり、南側では何層にも入り乱れて複雑であるが色調は浅黄色系

や灰褐色系で、土質は粘質土または細砂である。古墳時代の可能性が高い土師器壺・高杯・甕が出土した。

(3) 古墳時代から奈良時代の遺構

① 溝

SD325 B-II j k 29地区で検出した東西溝で、長さ0.5m以上、幅1.0m、深さ0.3mである。古墳~平安時代の溝SD322との切り合いは不明である。埋土は第1層がにぶい黄褐色粘質土、第2層が褐灰色細砂で、古墳~奈良時代におさまる須恵器甕の小片が出土した。

SD326 B-II j k 31地区で検出した南北溝で、長さ2.0m以上、幅0.5m以上、深さ0.3mである。埋土は第1層が灰白色細砂、第2層が灰黄褐色系粘質土に黒褐色土混じりで、古墳~奈良時代と考えられる土師器細片および須恵器細片が出土した。

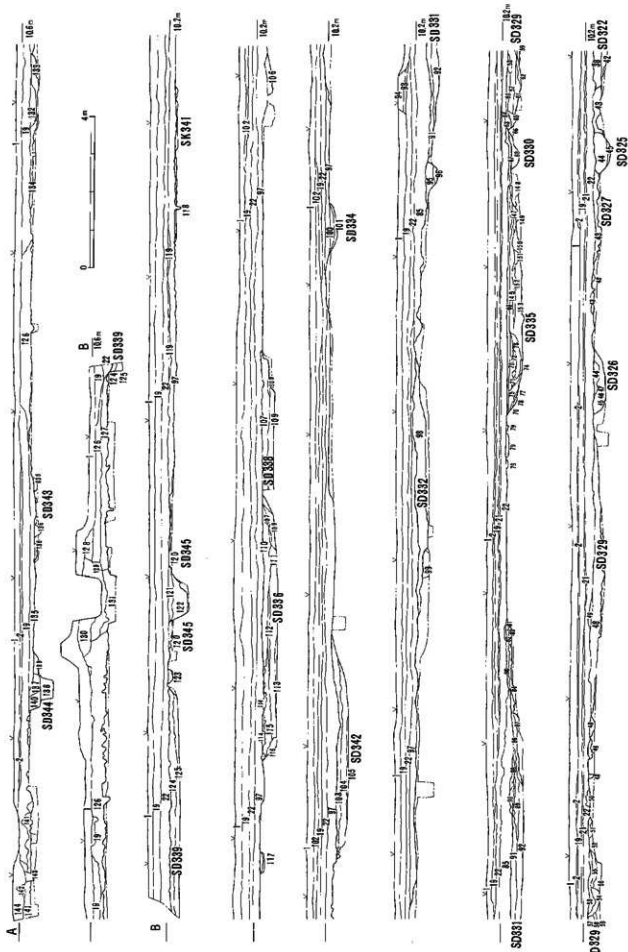
SD330 B-II j k 35地区で検出した南北溝で、長さ2.0m以上、幅0.9m、深さ0.2mである。切り合いにより平安時代末期~鎌倉時代の溝SD335より古い。埋土は暗褐色粘質土で、古墳~奈良時代の土師器、須恵器の細片が出土した。

SD332 B-II j k 42~47地区で検出した南北方向の大溝で、長さ24m以上、幅1.5m以上、深さ0.6mである。切り合いによりSD333より新しい。埋土はにぶい黄褐色砂質土で、古墳~奈良時代と考えられる土師器甕の小片が出土した。

SD333 B-II k 42~44地区で検出した南北方向の大溝で、長さ10m以上、幅0.8m以上、深さ0.3mである。出土遺物がいないため、遺構の明確な存続時期は不明であるが、切り合いによりSD332より古いので一応当該期とした。

SD339 B-II i 162・63地区で検出した南北溝で、長さ7.3m以上、幅0.7m、深さ0.3mである。切り合いによりSD345より新しい。埋土は第1層が褐色粘質土、第2層が明黄褐色粘質土に明褐色細砂混じりで、古墳~奈良時代の土師器の小片が出土した。

SD340 B-II k 160~63地区で検出した南北方向の大溝で、長さ13.5m以上、幅1.5m以上、深さ0.2mである。切り合いによりSD345より新し



第18图 B地区土層圖 (1) (1:100)

い。埋土は褐灰色土で、古墳～奈良時代の土師器小片、須恵器甕小片が出土した。

SD345 B-II k161～63地区で検出した南北溝で、長さ9.3m以上、幅0.4m、深さ0.1mである。埋土にはふい黄褐色粘質土に黒褐色砂質土混じりで、出土遺物は土師器細片であるがその時期は不明である。切り合いにより、古墳～奈良時代の溝であるSD339・340より古いと判断できるが、厳密な時期決定には至らず、一応当該期でとりあつた。

(4) 奈良時代以降の遺構

① 溝

SD313 B-II gh16～18地区で検出した南北溝で、長さ11m以上、幅1.0m、深さ0.2mである。切り合いにより平安時代末期～鎌倉時代の溝SD310より古く、古墳～平安時代の溝SD312より新しい。埋土は第1層が暗褐色砂質土、第2層が暗褐色砂質土に砂利混じりである。奈良時代以降の土師器杯類・甕、須恵器の小片が出土した。

(5) 古墳時代から平安時代の遺構

① 溝

SD316 B-II i19～21地区で検出した南北溝で、長さ4.5m以上、幅0.6m、深さ0.3mである。切り合いにより古墳時代の溝SD323より新しい。埋土は暗褐色粘質土で、古墳～平安時代の土師器杯類・甕の小片が出土した。

SD317 B-II ij21・22地区で検出した南北溝で、長さ2.5m以上、幅7.0m、深さ0.2mである。切り合いにより古墳～平安時代の溝SD318より新しい。埋土は暗褐色土で、古墳～平安時代の土師器杯類・甕小片、須恵器甕の小片が出土した。

SD318 B-II j21～23地区で検出した東西方向の大溝で、長さ1.6m以上、幅7.0m、深さ0.5mである。掘り上がり複雑な形状をしており、また断面でも複数の土層が観察されることから、遺構が重複していた可能性がある。切り合いにより古墳～平安時代の溝SD317より古く、古墳時代の溝SD319より新しい。埋土は複雑であるが、黒褐色・暗褐色・灰褐色・褐色系の粘質土が中心で、古墳～平安時代の土師器杯類・甕(126)、須恵器甕小片が

出土した。

SD321 B-II jk26地区で検出した東西溝で、長さ2.5m以上、幅1.0m、深さ0.1mである。埋土は灰色砂礫で、古墳～平安時代の土師器杯類・甕、須恵器甕が出土した。

SD322 B-II jk26～31地区で検出した南北方向の大溝で、長さ9.0m以上、幅1.3m、深さ0.3mである。切り合いによりSD324・327及び古墳時代の溝SD329より新しいが、古墳～奈良時代の溝SD325との切り合いは不明である。埋土は第1層が灰黄褐色砂質土、第2層がやや濃い灰黄褐色砂質土である。土師器杯類・高杯・甕(123)、須恵器杯(124)・甕が出土したが、その時期は古墳時代前期から平安時代後期まで及んでいるため、遺構の存続時期は特定し難い。

SD324 B-II jk26～29地区で検出した南北溝で、長さ13m以上、幅1.0m、深さ0.1mである。埋土は砂で、土師器が出土したが小片のため詳細な遺物の時期は不明である。切り合いがSD322より古いことから一応、当該期の中におさまると判断した。

SD327 B-II jk30・31地区で検出した南北溝で、長さ4.0m以上、幅不明、深さ0.1mである。埋土にはふい黄褐色粘質土に黒色砂質土混じりで、土師器が出土しているが、小片のため遺物の詳細な時期は不明である。切り合いが、古墳から奈良時代の溝SD325より新しく、古墳～平安時代の溝SD322より古いことから一応、当該期の中におさまると判断した。

SD334 B-II jk47・48地区で検出した南北溝で、長さ7.5m以上、幅0.5m、深さ0.2mである。埋土は第1層がふい褐色粘質土、第2層が褐灰色砂質土で、古墳～平安時代の土師器甕の小片が出土した。

(6) 奈良時代から平安時代の遺構

① 溝

SD308 B-I f12～14地区で検出した南北溝で、長さ8.5m以上、幅1.5m以上、深さ0.1mである。切り合いにより平安時代末期～鎌倉時代の溝SD309より古い。埋土は一層で、上部は黒色砂質

土であるが、下にいくにしたがって漸次、色調が暗赤褐色に変化する。奈良～平安時代の土師器杯の小片が出土した。

SD312 B-II h17・18地区で検出した南北溝で、長さ4.0m以上、幅0.7m、深さ0.1mである。切り合いにより奈良時代以降の溝SD313及び平安時代末期～鎌倉時代の溝SD310より古い。埋土は明黒褐色土に黄砂混じりである。古墳～平安時代の土師器杯類・甕、須恵器杯の小片が出土した。

② 不明遺構

SZ306 B-I f14地区で検出したもので、古墳時代の溝SD307および奈良～平安時代の溝SD308の上面に堆積する黒褐色砂の広がりである。古墳～平安時代の土師器甕、須恵器の小片が出土した。

(7) 平安時代の遺構

① 溝

SD344 B-II d65地区で検出した南北溝で、長さ1.5m以上、幅1.6mで、法面は両側とも段がみられる。深さは中段が0.2m、最深部が0.6mである。埋土は上段がにぶい黄褐色・灰褐色・灰黄褐色の粘質土であり、下段が濃い灰黄褐色粘質土である。上段と下段とに分層できることから、上下2条の溝である可能性もある。平安時代の土師器甕の小片が出土した。

SD531 第4次調査で確認した溝であるが、第3次調査でもB-I地区北端のa2地区およびd5～7地区で検出した。溝の方向はN9°Wの南北溝である。この溝を南に延長したA-IV地区のr47地区付近では該当する溝は検出していない。第4次調査の調査成果も含めると長さ85m以上、幅0.6m、深さ0.6mである。断面の形状は四角形である。埋土はd5～7地区では暗褐色砂質土に黒褐色砂質土混じりであり、a2地区では、第1層が暗褐色粘質土、第2層が黒褐色砂質土に細砂混じり、第3層が黒褐色粘質土に土器片を含む。第4次調査でも埋土は3層に分かれ、色調、土質とも類似している。埋土からは平安時代の土師器杯類・甕(127)、須恵器小片、山茶碗が出土した。第4次調査では出土した長胴甕

の年代から遺構の時期を奈良時代としている。第3次調査では平安時代の土師器甕等が出土したことから、遺構の時期を平安時代とあらためておきたい。なお、出土遺物のうち山茶碗は藤澤福年の7型式であるが、a2地区で当該溝を切る斜め溝からの混入であると推定した。

(8) 平安時代末期から鎌倉時代

① 溝

SD304 B-I f11～13地区で検出した南北溝で、平安時代末期～鎌倉時代の溝であるSD309・315の上面で確認した。須恵器甕の小片及び平安時代末期～鎌倉時代の土師器甕が出土した。

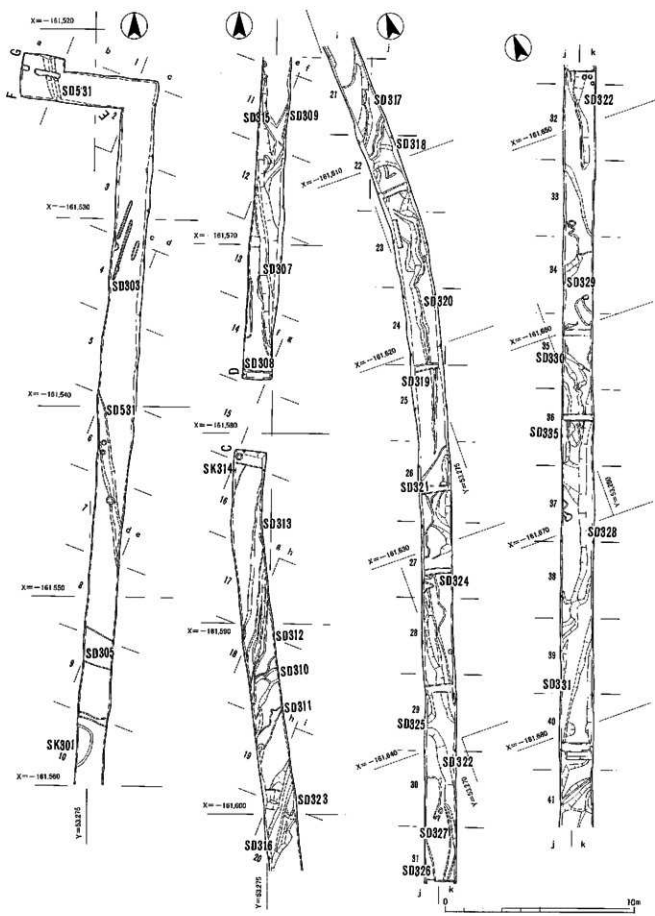
SD305 B-I d9地区で検出した東西溝で、長さ1.5m以上、幅1.7mで、深さは0.05mと極めて浅い。現地調査時の判断を尊重して溝としたが、土坑の可能性もある。埋土は暗褐色土で、須恵器甕の小片及び平安時代末期～鎌倉時代の土師器甕、山茶碗小片が出土した。

SD309 B-I e f11・12地区で検出した南北溝で、長さ4.5m以上、幅0.8m、深さ0.2mである。SD315より新しく、SD304より古い。平安時代末期～鎌倉時代の土師器細片、山茶碗細片が出土した。

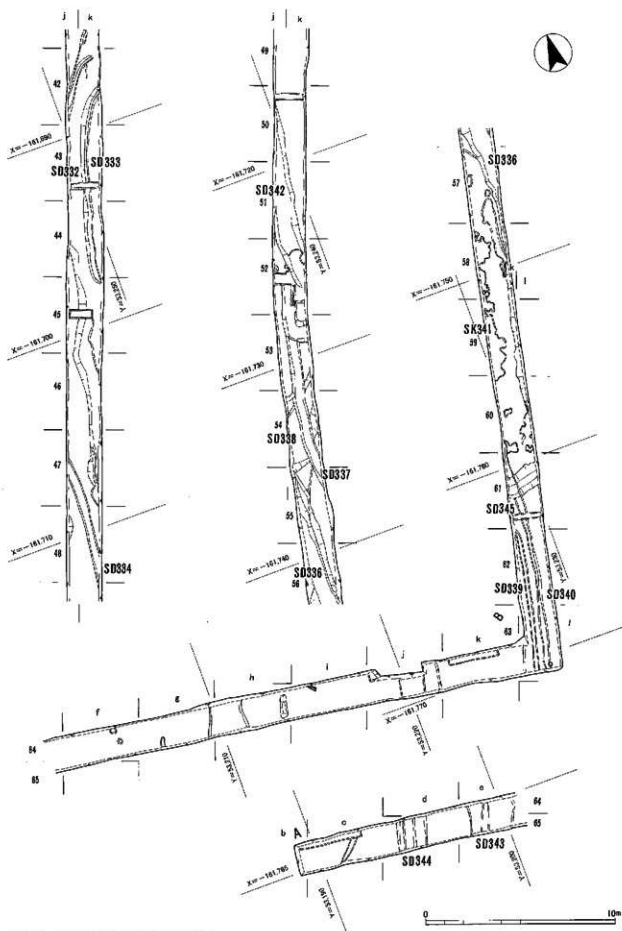
SD310 B-II h18地区で検出した溝で、長さ2.0m以上、幅1.1m、深さ0.2mである。切り合いにより奈良～平安時代の溝SD312及び奈良時代以降の溝SD313より新しい。埋土は黒褐色砂質土に砂利を多量に含む。須恵器甕及び平安時代末期～鎌倉時代の土師器甕、山茶碗の小片が出土した。

SD311 B-II h18・19地区で検出した溝で、長さ2.5m以上、幅0.7mで、深さは0.05mと極めて浅い。埋土は黒褐色粗砂で、須恵器杯及び平安～鎌倉時代の土師器甕、青磁の小片が出土した。

SD315 B-I e f11地区で検出した溝で、長さ4.0m以上、幅0.6m、深さ0.1mである。切り合いにより、古墳時代の溝SD307より新しく、平安時代末期～鎌倉時代の溝SD309より古いものであるが、詳細な時期決定には至らず、一応当該期とした。埋土は黒褐色砂質土で、時期不明の土師器細片が出土した。



第20图 B地区遺構平面図1 (1:200)



第21图 B地区遺構平面図2 (1:200)

SD328 B-II k36~38地区で検出した南北方向の大溝で、長さ11.5m以上、幅1.0m以上、深さ0.4mである。切り合いにより平安時代末期～鎌倉時代の溝SD335より新しい。平安時代後期以降の土師器甕、ロクロ土師器が出土した。

SD331 B-II j k38~40地区で検出した大溝で、長さ8.0m以上、幅1.7m、深さ0.3mである。切り合いにより平安時代末期～鎌倉時代の溝SD328より新しい。埋土は第1層が明褐色粘質土、第2層がにぶい橙色粘質土である。ただし、遺構の北側では流れが複雑になり層序が乱れている。須恵器甕片及び平安時代後末期のロクロ土師器(128~130)、土師器小皿(131)、山茶碗(132~135)、土師器甕、瓦器片が出土した。

SD335 B-II j k36・37地区で検出した溝で、長さ7.4m以上、幅4.0m、深さ0.3mである。切り合いにより平安時代末期～鎌倉時代の溝SD328より古く、古墳～奈良時代の溝SD330より新しい。掘り上がり形状が複雑であり、複数の溝が重複していた可能性がある。遺構埋土の層序は複雑であるが、概ね上から順に褐色粘質土、にぶい黄褐色粘質土、黒色砂質土である。土師器甕片、須恵器片が出土したが、SD336と同時期の山茶碗も出土した。

SD336 B-II k55~58地区で検出した南北方向の大溝で、長さ14m以上、幅1.2m、深さ0.4mである。切り合いにより平安時代末期～鎌倉時代の溝SD338より新しい。埋土は上層がにぶい橙色シルトを中心とした層であり、下層は灰黄褐色粗砂を中心とした層である。須恵器甕及び土師器甕(136)、山茶碗(137~138)、土鍾(140)、この他土師器、ロクロ土師器が出土した。

SD337 B-II j k52~55地区で検出した南北溝で、長さ13m以上、幅0.6m、深さ0.2mである。切り合いにより平安時代末期～鎌倉時代の溝SD338より新しい。埋土は褐色土で、須恵器甕片及びロクロ土師器(141~148)、土師器甕(149・150)、山茶碗(151~154)が出土した。

SD338 B-II k54・55地区で検出した東西方向の大溝で、長さ2.5m以上、幅2.0m、深さ0.4mである。切り合いにより平安時代末期～鎌倉時代の

溝SD336・337より古い。埋土は第1層が暗褐色粘質土、第2層が褐色砂質土である。平安時代後期のロクロ土師器(155~157)、灰釉陶器(163)、山茶碗(159~162)、小碗(164)、山皿(165)、土師器甕小片、須恵器壺(158)、須恵器片、土鍾(166)が出土した。

SD342 B-II j k50~52地区で検出した大溝で、長さ10m以上、幅1.2m、深さ0.4mである。切り合いにより平安時代末期～鎌倉時代の溝SD337より新しい。埋土は第1層が明褐色粘質土、第2層が灰白色砂質土、第3層が黄灰色砂質土である。山茶碗(167・168)、土師器小片が出土した。

(9) 時期不明の遺構

① 溝

SD303 B-I c3・4地区で検出した南北溝で、長さ3.2m、幅0.2m、深さ0.1mである。時期不明の土師器細片が出土している。SD303の両側に0.5m程離れて平行して、同じ形状の溝が検出されており、これらも含めた一連の溝は耕作の可能性が高い。

SD343 B-II e64・65地区で検出した南北溝で、長さ1.5m以上、幅2.4mで、法面は両側とも二段になっており、深さは一段目が0.1m、最深部が0.2mである。土層断面では浅い凹みか何箇所か確認できるため、何条かの溝が重複している可能性もある。埋土はにぶい黄褐色粘質土で、時期不明の土師器小片が出土した。

② 土坑

SK301 B-I e10地区で検出した土坑で、平面形は1.8m×0.9m以上、深さ0.1mである。埋土は黒褐色砂質土で、時期不明の土師器小片が出土した。

SK314 B-II g16地区で検出した土坑で、平面形は1.2m×0.5m、深さ0.1mである。埋土は黒褐色粘質土に砂利を含んでおり、時期不明の土師器細片が出土した。

SK341 B-II k58・59地区で検出した土坑で、平面形は8m×1.0m以上、深さ0.05mである。埋土は褐色土で、時期不明の土師器細片が出土し

調査番号	現地調査時 調査番号	中絶区名	小地区名	高さ(m)	幅(m)	長さ(m)	時代	出土遺物	備考	
S K 301	S K 1	B 1	e 10	1.8m以上	0.9m以上	0.1m	不明	土師器小片		
#302				次						
S D 303	S D 3	B 1	c 3-4	3.2m	0.2m	0.1m	不明	土師器細片		
S D 304	S D 4	B 1	f 11-13	不明	不明	不明	平安末～ 鎌倉	土師器壺、透蓋器小片	S D 309-315より上層	
S D 305	S D 5	B 1	d e 9	1.5m以上	1.7m	0.05m	平安末～ 鎌倉	土師器壺、透蓋器小片、山菜碗小片		
S Z 306	S Z 6	B 1	f 14	不明	不明	不明	奈良～平安	土師器壺等、透蓋器小片	S D 307-308の上層	
S D 307	S D 7	B 1	e f 11-14	15m以上	1.0m	0.5m	古墳	土師器壺 (121) 壺	S D 304-315より上層	
S D 308	S D 8	B 1	f 12-14	8.5m以上	1.5m以上	0.1m	奈良～平安	土師器小片	S D 309より上層	
S D 309	S D 9	B 1	e f 11-12	4.5m以上	0.8m	0.2m	平安末～ 鎌倉	土師器細片、山菜碗細片	S D 315より上層、S D 304より上層	
S D 310	S D 10	B 8	h 18	2.0m以上	1.1m	0.2m	平安末～ 鎌倉	土師器壺、透蓋器壺、山菜碗小片	S D 317-313より上層	
S D 311	S D 11	B 8	h 18-19	2.5m以上	0.7m	0.05m	平安末～ 鎌倉	土師器壺、透蓋器杯、青磁小片		
S D 312	S D 12	B 8	h 17-18	4.0m以上	0.7m	0.1m	奈良～平安	土師器杯盤、透蓋器小片	S D 313-310より上層	
S D 313	S D 13	B 8	g h 16-18	11m以上	1.0m	0.2m	奈良以降	土師器杯盤、透蓋器小片	S D 310より上層、S D 312より上層	
S K 314	S K 14	B 8	g 16	1.2m	0.5m	0.1m	不明	土師器細片		
S D 315	S D 15	B 1	e f 11	4.0m	0.6m	0.1m	平安末～ 鎌倉	土師器細片	S D 309より上層、S D 307より上層	
S D 316	S D 16	B 8	i j 19-21	4.5m以上	0.6m	0.3m	古墳～平安	土師器杯盤、透蓋器小片	S D 323より上層	
S D 317	S D 17	B 8	i j 21-22	2.5m以上	0.7m	0.2m	古墳～平安	土師器杯盤、透蓋器小片	S D 318より上層	
S D 318	S D 18	B 8	j 21-23	1.6m以上	7.0m	0.5m	古墳～平安	土師器杯盤、透蓋器小片、小(126)、透蓋器壺小片	S D 317より上層、S D 318より上層	
S D 319	S D 19	B 8	j k 23-26	13m	1.0m以上	0.1m	古墳	土師器壺、透蓋器杯 (122)	S D 318より上層、S D 309より上層	
S D 320	S D 20	B 8	j k 23-26	13m	1.0m以上	0.2m	古墳前半	土師器高杯-壺	S D 319より上層	
S D 321	S D 21	B 8	j k 26	2.5m以上	1.0m	0.1m	古墳～平安	土師器杯盤、透蓋器壺		
S D 322	S D 22	B 8	j k 26-31	9.0m以上	1.3m	0.3m	古墳～平安	土師器高杯、杯盤 (123)、透蓋器小片 (124) 壺	S D 324-327-329より上層	
S D 323	S D 23	B 8	i 19-20	3.3m以上	2.0m	0.4m	古墳	土師器壺小片、透蓋器杯 (125)	S D 316より上層	
S D 324	S D 24	B 8	j k 26-29	13m以上	1.0m	0.1m	古墳～平安	土師器小片	S D 322より上層	
S D 325	S D 25	B 8	j k 29	0.5m以上	1.0m	0.2m	古墳～奈良	透蓋器壺小片		
S D 326	S D 26	B 8	j k 31	2.0m以上	0.5m	0.3m	古墳～奈良	土師器細片、透蓋器小片		
S D 327	S D 27	B 8	j k 30-31	4.0m以上	不明	0.1m	古墳～平安	土師器小片	S D 327より上層、S D 323より上層	
S D 328	S D 28	B 8	k 36-38	11.5m以上	1.0m	0.4m	平安末～ 鎌倉	土師器壺、ロクロ土師器	S D 335より上層	
S D 329	S D 29	B 8	j k 31-35	15.5m以上	1.5m以上	0.3m	古墳	土師器壺、高杯-壺	S D 322より上層	
S D 330	S D 30	B 8	j k 35	2.0m以上	0.9m	0.2m	古墳～奈良	土師器、透蓋器細片	S D 335より上層	
S D 331	S D 31	B 8	k 38-40	8.0m以上	1.7m	0.3m	平安末～ 鎌倉	ロクロ土師器 (128-130) 土師器小皿 (131) 土師器壺、透蓋器壺片、瓦片、山菜碗 (132-135)	S D 328より上層	
S D 332	S D 32	B 8	j k 42-47	24m以上	1.5m以上	0.6m	古墳～奈良	土師器壺小片	S D 333より上層	
S D 333	S D 33	B 8	k 42-44	16m以上	0.8m以上	0.3m	古墳～奈良	遺物なし	S D 332より上層	
S D 334	S D 34	B 8	j k 47-48	7.5m以上	0.5m	0.2m	古墳～平安	土師器壺小片		
S D 335	S D 35	B 8	j k 36-37	7.4m以上	4.0m	0.3m	平安末～ 鎌倉	土師器壺片、透蓋器片、山菜碗	S D 328より上層、S D 330より上層	
S D 336	S D 36	B 8	k 35-38	14m以上	1.2m	0.4m	平安末～ 鎌倉	土師器壺 (136)、山菜碗 (137-138)、土盤 (140)、ロクロ土師器、透蓋器壺	S D 338より上層	
S D 337	S D 37	B 8	j k 52-55	13m	0.6m	0.2m	平安末～ 鎌倉	ロクロ土師器 (141-143)、土師器壺 (148、150) 山菜碗 (152、154)、透蓋器壺小片	S D 338より上層	
S D 338	S D 38	B 8	k 54-55	2.5m	2.0m	0.4m	平安末～ 鎌倉	ロクロ土師器 (155-157)、古銅鏡 (161)、山菜碗 (162)、土盤 (160)、山菜 (165)、透蓋器 (158)、土盤 (161)、土師器壺小片、透蓋器	S D 336-337より上層	
S D 339	S D 39	B 8	f 62-63	7.3m以上	0.7m	0.3m	古墳～奈良	土師器小片	S D 345より上層	
S D 340	S D 40	B 8	k f 60-63	13.5m以上	1.5m以上	0.2m	古墳～奈良	土師器小片、透蓋器壺片	S D 345より上層	
S K 341	S K 41	B 8	k 58-59	8m以上	1.0m以上	0.05m	不明	土師器細片		
S D 342	S D 42	B 8	k 50-52	16m以上	1.2m	0.4m	平安末～ 鎌倉	土師器小片、山菜碗 (167-168)	S D 337より上層	
S D 343	S D 43	B 8	e 64-65	1.5m以上	2.4m	0.2m	不明	土師器小片		
S D 344	S D 44	B 8	d 65	1.5m以上	1.6m	0.6m	平安	土師器壺小片		
S D 346	S Z 42	B 8	k f 61-63	9.3m以上	0.4m	0.1m	古墳～奈良	土師器細片	S D 339-340より上層	
S D 531	S D 2	B 1	a 2、d 5-7	8m以上	0.6m	0.6m	平安	土師器杯盤-壺 (127)、透蓋器小片、(山菜碗遺入)	第 4 次調査で検出	

第9表 B地区遺構一覧

ている。一応土坑としたが、平面形が不定形であり、浅い凹みの可能性もある。

4 遺物

B地区からの出土遺物の時期は、縄文時代から中世までであるが、このうち図示したのは50点である。量的には、古墳時代の土師器・須恵器と平安時代末～鎌倉時代の土師器・山茶碗がほとんどである。個々の出土遺物の法量や技法の特徴等は遺物観察表に記載したので、参照されたい。以下には、各遺物の特徴的な事項や補足説明等を中心に概説する。

(1) 遺構出土遺物

①古墳時代の遺構からの出土遺物

SD307 出土遺物

土師器甕 (121) は古墳時代のいわゆるS字状口縁甕である。上半部が残存しているが、口径は13cm程で、胴部最大径は22cm程である。口縁部はヨコナデ、胴部外面はハケメ、内面はナデである。

SD319 出土遺物

須恵器杯身 (122) は、口径10cm程で、たちあがりはやや内傾し、口縁端部は内面に面をもつ。受け部は斜め上方にのびる。底部から体部下半のロクロケズリはかなり高い位置までみられる。ロクロ回転は右廻りである。

SD323 出土遺物

須恵器杯身 (125) は、口径14cm程の大きさであるが、器高は3cmと低い、たちあがりは短く、口縁端部は丸くおさまる。受け部はほぼ水平で短く、底部は平坦である。体部下半～底部はロクロケズリである。

②古墳～平安時代の遺構からの出土遺物

SD318 出土遺物

土師器甕 (126) は、口縁部の破片であるが、推定口径は21cmで、器壁は1cmと厚い。口縁部が外反し、端部が水平になる特異な形状である。外面はナデ、内面は横方向のハケメである。口縁が開くタイプの土師器は、三重県内では明和町の寺垣内遺跡⁽³²⁾、北野遺跡⁽³³⁾などで出土例があるが、口縁端部の形態は微妙

に異なるものである。

SD322 出土遺物

土師器甕 (123) は平安時代のもので口頸部の小片である。口縁部はヨコナデで、内面にはヨコハケが残存し、外面はオサエおよびナデである。

須恵器杯身 (124) は口径10cm程で、たちあがりはやや内傾し、口縁端部は内面に面をもつ。受け部は短く、斜め上方にのびる。

③平安時代の遺構からの出土遺物

SD531 出土遺物

土師器甕 (127) は、口径、胴部最大径とも16cm程で、胴部は球状になる。口縁端部は外面に面を持ち、先端を上方につまみ上げる。胴部外面は上半が縦方向の粗いハケメ、下半から底部がケズリである。胴部内面は上半がナデ、下半から底部がケズリである。

④平安時代後末期から鎌倉時代の遺構出土遺物

SD331 出土遺物

ロクロ土師器 (128・129) は高台付きの甕で、高台は径7cm程で、「ハ」の字状に開く。体部が内湾して立ち上がるものである。

ロクロ土師器 (130) は高台がつかないもので、底部は平底で、体部が直線的に斜め上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。底部には糸切り痕がみられ、体部にはロクロ目が明瞭に残る。

土師器小皿 (131) は、口径8cm、器高1.5cmの小皿である。粘土紐つなぎ痕がみられる。

山茶碗 (132～135) はいずれも破片であるが、(132)は口径14cm程であり、(133～135)は高台径7～8cmで高台は「ハ」の字状に低く開く。底部に糸切り痕がみられる。藤澤編年の5型式、すなわち12世紀後葉～13世紀初葉のものである。なお、(135)は一応、山茶碗としたが、焼成が甘く色調はにがい橙色を呈する異質のものである。

SD336 出土遺物

土師器甕 (136) は、口径20cm程で、口縁は「く」の字状を呈し、端部は内側に折り曲げる。口縁部はヨコナデ、胴部外面にはナデ、オサエがみられる。

山茶碗 (137～139) は、SD331出土の(132～135)と同様のものである。

土鍾 (140) は細長い形で長さ3.4cm、最大幅1.1cmで、重さ2.8gである。

SD337 出土遺物

ロクロ土師器 (141~143) は、高台のつくもので、SD331出土の (128・129) と同様のものである。

ロクロ土師器 (144~148) は、口径9~10cm程のもので、器高は (144~146・148) が1.4~1.8cmと低く、(147) が2.5cmである。いずれも体部ロクロナデで、底部には糸切り痕が残る。

土器甕 (149・150) は、SD336出土の土師器甕 (136) と同様のものである。ともに外面に煤が付着する。

山茶碗 (151~154) は、SD331出土の (132~135) 及びSD336出土の (137~139) と同様のものであるが、(154) の口縁部は外反しており、若干古い要素をもつ。

SD338 出土遺物

ロクロ土師器 (155~157) は、口径15cm、高台径7~8cm程で、高台はやや短いが、「ハ」の字状に開く。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部は丸くおわる。体部にロクロ目が残る。

須恵器盥 (158) は、高台径10cm程になる盥の底部であるが、体部外面の下部は、ロクロケズリである。

山茶碗 (159~162) は、SD331出土の (132~135)、SD336出土の (137~139)、SD337出土の (151~154) と同様のものである。(159) は口縁端部が外反する。

灰軸陶器 (163) は高台の断面形は三日月形が退化したもので、O-53窯式である。

山茶碗系小碗 (164) は、高台径4.8cmでロクロ成形である。高台端部には初段痕が残る。底部外面に糸切り痕が残る。

山皿 (165) は口径約9cm、器高は1.1cmと低いものである。ロクロ成形で底部外面に糸切り痕がみられる。焼成は甘く、色調はにぶい黄橙色である。

土鍾 (166) は、円柱形を呈するもので、長さ4.4cm、幅3.3cm、重量39.3gである。

SD342 出土遺物

山茶碗 (167・168) は、ともに底部から体部下半部にかけて残存するものである。SD331出土の (132~135) と同様のものである。

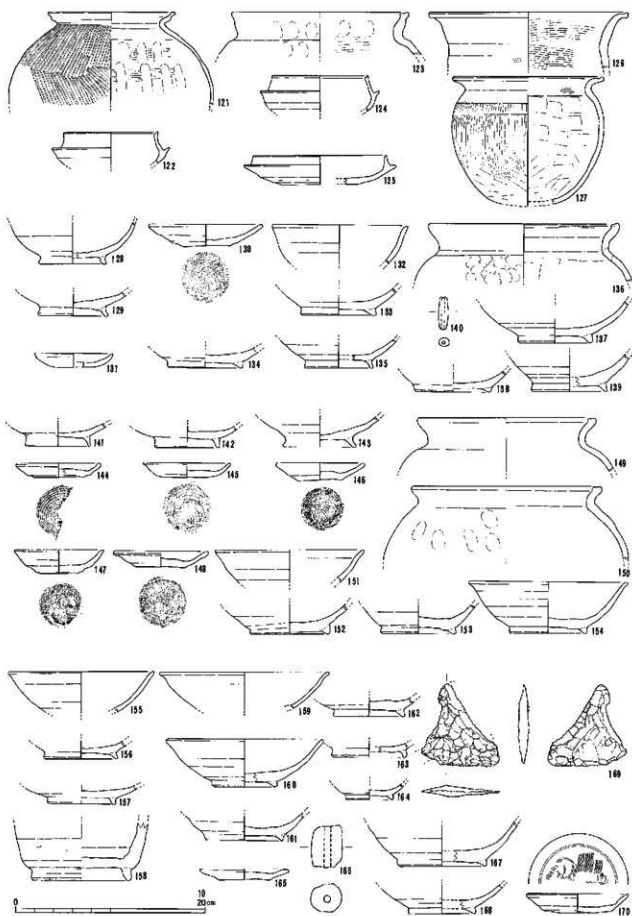
(2) その他の遺物

その他の遺構や遺物包含層からも遺物は出土しているが、その量はあまり多くない。

石匙 (169)、青磁皿 (170) の2点のみ図示した。
(河北)

遺物番号	発掘調査番号	出土遺物出土位置	種類	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	注記の付く	胎土	構成	色調	残存数	備 考
121	030-02	S D307	土師器	13.0			ハケム、ヨコナデ	やや粗、砂粒含	やや黄	灰	上半1/3	
122	030-04	S D319	須恵器	9.8			ロウロナデ、ロウロナズリ	やや粗、砂粒含	黄	灰	上半1/4	
123	031-01	S D322	土師器	18.3			ヨコナデ、ナデ、オサエ、ハケム	やや粗、砂粒含	やや黄	に沁漬	口縁部1/8	採付層
124	032-02	S D322	須恵器	10.0			ロウロナデ、ロウロナズリ	密	黄	灰白	上半1/4	
125	030-05	S D323	須恵器	13.9		3.0	ロウロナデ、ロウロナズリ	密	黄	灰白	1/7	
126	030-03	S D318	土師器	20.8			ヨコナデ、ハケム	やや粗、砂粒含	やや黄	に沁漬	口縁1/7	
127	030-01	S D331	土師器	15.8		13.6	ヨコナデ、ハケム、ナズリ	やや粗	やや黄	浅黄橙	2/3	
128	031-04	S D331	ロウロ土師器			6.8	ロウロナデ、高切り溝	密	やや黄	灰	下半1/2	
129	032-01	S D331	ロウロ土師器			7.0	ロウロナデ、高切り溝	やや粗	やや黄	に沁漬	底縁宛	
130	031-06	S D331	ロウロ土師器	11.6	2.4	5.1	ロウロナデ、高切り溝	密、砂粒含み	黄	浅黄橙	1/2	
131	031-03	S D331	土師器	8.0	1.5		ヨコナデ、ナデ	密	黄	浅黄橙	1/8	
132	032-03	S D331	山形瓶	14.2			ロウロナデ	密	黄	灰白	上半1/8	
133	032-04	S D331	山形瓶			7.8	ロウロナデ、高切り溝	密	黄	灰白	底縁1/4	
134	032-05	S D331	山形瓶			7.4	ロウロナデ、高切り溝	密	黄	灰白	底縁1/2	
135	031-02	S D331	陶器(?)			6.8	ロウロナデ、高切り溝	密	黄	に沁漬	下半1/3	
136	029-03	S D336	土師器	19.8			ヨコナデ、オサエ、ナデ	やや粗、砂粒含み	黄	に沁漬	口縁部1/6	
137	029-02	S D336	山形瓶			7.5	ロウロナデ、高切り溝	やや粗、砂粒含み	黄	灰白	底縁宛、採付小片	
138	029-06	S D336	山形瓶			7.7	ロウロナデ、高切り溝	やや粗、砂粒含み	黄	灰白	下半1/2	
139	028-07	S D336	山形瓶			7.7	ロウロナデ、高切り溝	やや粗、砂粒含み	黄	灰白	下半1/3	
140	029-05	S D336	土師	高さ3.4	幅3.1	高さ2.8	ナデ	土師黄密	黄	橙	宛形	
141	026-05	S D337	ロウロ土師器			6.6	ロウロナデ、高切り溝	やや粗、砂粒含	不黄	浅黄橙	底縁宛	
142	026-04	S D337	ロウロ土師器			6.6	ロウロナデ、高切り溝	やや粗、砂粒含	不黄	浅黄橙	底縁宛	
143	026-03	S D337	ロウロ土師器			7.6	ロウロナデ、高切り溝	やや粗、砂粒含	不黄	浅黄橙	底縁宛	
144	027-07	S D337	ロウロ土師器	8.8	1.4	5.3	ロウロナデ、高切り溝	密、砂粒含	黄	に沁漬	1/2	
145	025-05	S D337	ロウロ土師器	9.1	1.5	5.0	ロウロナデ、高切り溝	やや粗、砂粒含	黄	浅黄橙	2/3	
146	025-06	S D337	ロウロ土師器	9.1	1.8	4.4	ロウロナデ、高切り溝	やや粗、砂粒含	黄	灰白	ほぼ宛形	
147	025-06	S D337	ロウロ土師器	8.4	2.5	4.0	ロウロナデ、高切り溝	やや粗、砂粒含み	黄	灰白	底縁宛、採付小片	
148	025-04	S D337	ロウロ土師器	9.7	1.7	5.3	ロウロナデ、高切り溝	やや粗、砂粒含	黄	浅黄橙	宛形	
149	025-02	S D337	土師器	18.6			ヨコナデ、ナデ	やや粗、砂粒含み	黄	に沁漬	口縁部1/6	採付層
150	031-01	S D337	土師器	20.0			ヨコナデ、ナデ、オサエ	やや粗、砂粒含み	黄	に沁漬	口縁部1/6	採付層
151	026-07	S D337	山形瓶	15.8			ロウロナデ	密、砂粒含み	黄	灰白	上半1/6	
152	026-01	S D337	山形瓶			8.2	ロウロナデ、高切り溝	やや粗、砂粒含み	黄	灰白	底縁宛	
153	025-02	S D337	山形瓶			7.4	ロウロナデ、高切り溝	密、砂粒含み	黄	灰白	底縁1/2	
154	025-03	S D337	山形瓶	16.8	5.4	8.0	ロウロナデ、高切り溝	やや粗、砂粒含み	黄	灰白	1/3	
155	029-01	S D338	ロウロ土師器	15.1			ロウロナデ	密、砂粒含み	黄	浅黄橙	上半1/4	
156	028-03	S D338	ロウロ土師器			7.7	ロウロナデ、高切り溝	やや粗、砂粒含み	黄	浅黄橙	底縁宛	
157	027-07	S D338	ロウロ土師器			6.5-7.0	ロウロナデ、高切り溝	やや粗、砂粒含み	黄	浅黄	底縁宛	
158	027-01	S D338	須恵器			10.0	ロウロナデ、ロウロナズリ	やや粗、砂粒含み	黄	灰白	下半	ロウロ土師器と混
159	029-04	S D338	山形瓶	17.8			ロウロナデ	やや粗、砂粒含み	黄	灰白	上半1/10	
160	027-04	S D338	山形瓶	16.2	5.6	6.5	ロウロナデ、高切り溝	やや粗、砂粒含み	黄	灰白	1/2	
161	027-03	S D338	山形瓶			8.0	ロウロナデ、高切り溝	密、砂粒含み	黄	灰白	下半1/2	
162	027-05	S D338	山形瓶			7.3	ロウロナデ、高切り溝	密、砂粒含み	黄	灰白	底縁1/2	
163	027-02	S D338	灰釉陶器			7.4	ロウロナデ、高切り溝	密、砂粒含み	黄	底縁1/5		
164	027-06	S D338	小瓶			4.8	ロウロナデ、高切り溝	やや粗、砂粒含み	黄	灰白	底縁宛	
165	029-01	S D338	山形	9.3	1.1	5.2	ロウロナデ、高切り溝	やや粗、砂粒含み	やや粗	に沁漬	底縁宛、採付小片	
166	029-04	S D338	土師	高さ4.4	幅3.3	高さ3.6	ナデ	土師黄や中密	黄	橙	ほぼ宛形	
167	028-05	S D342	山形瓶			9.9	ロウロナデ、高切り溝	やや粗、砂粒含み	黄	灰白	下半1/3	
168	029-02	S D347	山形瓶			7.0	ロウロナデ	密、砂粒含み	黄	灰白	下半1/3	
169	041-01	20号倉庫	石製	高さ4.3	幅4.1	厚0.6	打製	ウツカイト				幅0.3cm
170	032-06	44号倉庫	青磁	高さ10.6	直径7.0	高さ7.6	ロウロナデ	黄	黄	灰白	1/2	緑やブルー灰色の陶器

第10表 B地区出土遺物観察表



第22図 B地区出土遺物実測図 (1:4, ただし169は1:2)

V C・E地区の調査結果

1 概要

C・E地区は、A地区及びB地区の南端から約250m南方に位置する調査区である。

C地区は、2箇所の正方形の調査区からなり、C-I地区は6m×6m程、C-II地区は9m×9m程である。調査面積は併せて120㎡である。

E地区はC-I地区から延びる細長い調査区で、総延長79m、幅1.5～2.0mの細長い調査区で、調査面積は130㎡である。I～III地区に分けて調査をおこなった。E-I地区は、C-I地区から延びる南北方向の長さ6mである。E-II地区は、I地区北端から西方向に延びる地区で長さ25mである。E-III地区は、II地区西端から北方向に延びる地区で長さ48mである。

2 土層

C-I・II地区及びE-I・II地区は、第1層が耕作土または表土(1)、第2層がオリーブ褐色または暗オリーブ褐色土の床土(2)、第3層が暗褐色やや粘質土の地山(3)、第4層が暗褐色やや粘質土に石混じり(4)、第5層が黄褐色砂質土に粗砂・石混じり(5)である。遺構検出は第3層上面で行った。本来は第2層と第3層の間に遺物包含層が存在したものであろうが、削平されたと推測される。

E-III地区では、第2層の床土がなくなり、その替わりに第1層と第3層の間に何層かの土が複雑に見られるが、これらは現代の水田及び農道整備などの新しい時代のものである。

3 遺構および遺物

遺構は、井戸、溝、土坑、ピットを検出した。各遺構からの出土遺物はほとんどないため、多くは時期不明である。主な遺構を以下に記述する。なお、遺物は、遺構、包含層とも室町時代の遺物が少量出土したが、小片のため図示し得なかった。

(1) 井戸

SE401 C-I地区中央部で検出した井戸で、平面形は径0.9m程のほぼ円形であるが、東端部や南端部はやや角張る。深さは1.6mで、第1層が黄褐色シルト、第2層が黄褐色粘質土に礫混じり、第3層が黄褐色粘土に礫混じり、第4層が青灰色粘土に礫混じりである。第2～4層の各埋土に混じる礫は、径1～10cm程で地山に含まれている礫である。一応、埋土の分層を行ったが、各層の埋土にはそれ程の大きな差異はなく、一度に埋没した可能性が高い。また、底からは曲物等は出土しなかったことや井戸の径が0.9mと小さいことから、素掘りの井戸の可能性が高い。埋土からは室町時代の土師器鍋・皿、陶器甕の小片が出土した。

(2) 土坑

SK402 E-III h 6・7地区で検出した土坑で、平面形は1.1m以上×0.9mで、深さは0.2mである。室町時代の土師器鍋・皿の小片が出土した。

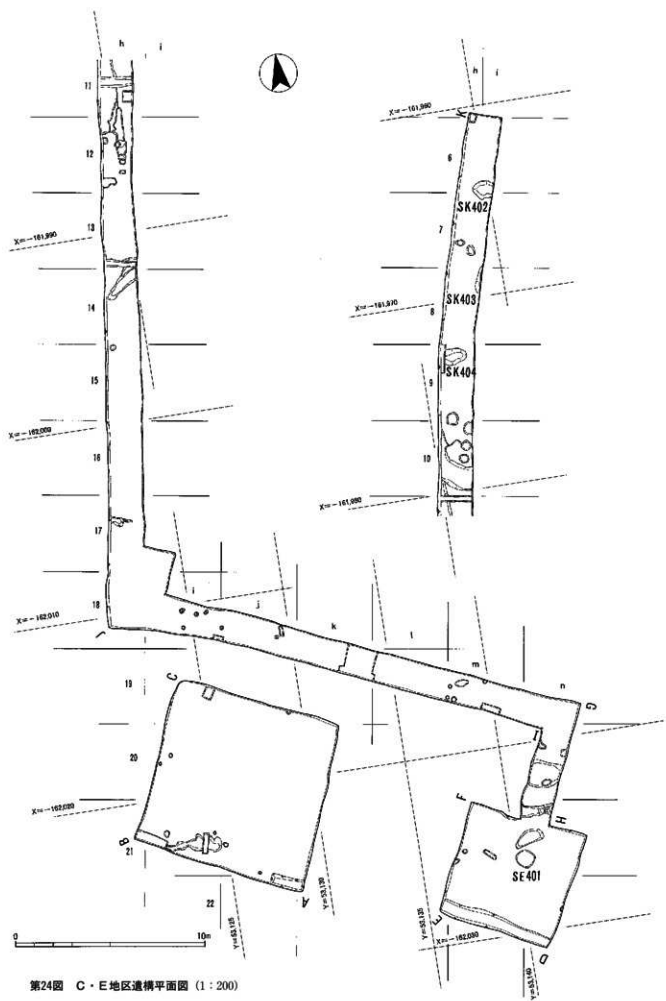
SK403 E-III h 8地区で検出した土坑であるが、調査区の東端壁際に位置しており調査区外に延びるため、全体は不明であるが、南北長1.5m以上、

遺構番号	発見調査時 遺構番号	中地区名	小地区名	長さ	幅	深さ	時代	出土遺物	備考
SE401	SK1	C-I	m n 21	径0.9m	—	1.6m	室町	土師器鍋・皿、陶器甕	
SK402	SK2	E-III	h 1 6-7	1.1m以上	0.9m	0.2m	室町	土師器鍋・皿	
SK403	SK3	E-III	h 8	1.5m以上	—	0.2m	室町	土師器鍋	
SK404	SK4	E-III	h 9	1.4m以上	0.7m	0.3m	室町	灰のみ土器なし	

第11表 C・E地区遺構一覧



第23図 C・E地区土層図 (1:100)

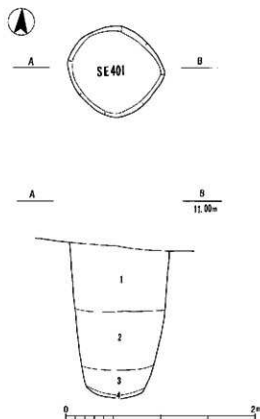


第24图 C·E地区遺構平面図 (1:200)

深さは0.2m程である。室町時代の土師器鍋の小片が出土した。

SK404 E-Ⅲh9地区で検出した土坑で、平面形は1.4m以上×0.7mで、深さは0.3mである。遺構埋土は黄灰色シルトで、炭化物が少量出土した。土器は出土しなかったが、他の遺構と同様に室町時代の土坑であろう。

(河北)



第25図 SE401実測図 (1:40)

VI D地区の調査結果

1 概要

D地区はA地区の南端からさらに100m程南に位置し、県道に沿った南北に細長い調査区で、長さ72m、幅1.5～2.0m、調査面積は120㎡である。

2 土層

D地区の層序は、第1層が耕作土(1)で、その直下がSD411・413などの遺構埋土である。遺構埋土の下は、黒色シルト(8)、褐色砂礫(9)、明黄褐色砂礫(10)などの地山である。耕作土と遺構埋土との間には、本来遺物包含層が存在したものであろうが、削平されたものと推測される。

3 遺構および遺物

遺構は、古墳～奈良時代の溝1条、平安時代の溝2条を検出した。遺物は、遺構、包含層とも少量出土したが、小片のため図示し得なかった。

(1) 溝

SD411 調査区の北半で検出された大溝で、長さ36m以上、幅4m以上、深さは部分的な確認ではあるが0.7～1.0m程である。埋土は第1層が灰白色シルト(2)、第2層が灰黄色シルトまたは黄灰色シルト(3)、第3層がにぶい黄橙色シルトまたは浅黄色シルト(4)である。平面及び断面観察の結果、切り合いによりSD412より古く、SD413より新しい。溝の時期は出土遺物から平安時代と考えられる。埋土からは、土師器杯類・甕、須恵器の小片が出土した。

SD412 調査区中央西側で検出した大溝で、長さ15m以上、幅1m以上、深さ1.0mである。切り合いによりSD411より新しい。溝の時期は出土遺物から平安時代と考えられる。埋土からは土師器杯類・甕、青磁碗の小片が出土した。

SD413 調査区南側で検出した大溝で、長さ29m以上、幅2m以上、深さは部分的なトレンチによる確認ではあるが0.9m程である。埋土は第1層が灰黄色シルト(6)、第2層がにぶい黄橙色シルト(7)である。断面観察の結果、切り合いによりSD411より古い。溝の時期は出土遺物から古墳～奈良時代と考えられる。埋土からは土師器杯類・壺底部・甕、須恵器の小片が出土した。

(河北)

遺構番号	現地調査時 遺構番号	中地区名	小地区名	長さ	幅	深さ	時代	出土遺物	備考
SD411	SD1	D-1	a b 1～10	36m以上	4 m以上	1.0m	平安	土師器杯類・甕、須恵器小片	SD413より新、SD412より古
SD412	SD2	D-1	a b 7～10	15m以上	1 m以上	1.0m	平安	土師器杯類・甕、青磁碗小片	SD411より新
SD413	SD3	D-II	a b 11～18	29m以上	2 m以上	0.9m	古墳から奈良	土師器杯類・甕・壺、須恵器小片	SD411より古

第12表 D地区遺構一覧表

VII F地区の調査

1 概要

F地区は、C・E地区から約150m南西方向で、山下町の集落のすぐ東側である。調査区は長さ52m、幅1.5～2.0mの東西方向に細長い形をしており、発掘調査面積は80㎡である。

2 土層

基本的層序は、第1層が耕作土(1)、第2層が末土(2)、第3層が灰オリーブ色シルト(3)、第4層が灰オリーブ色シルト(4)、第5層が黒色粘質土(6)で、遺構は第4層上面又は第5層上面で検出した。なお、西半部では第3層と第4層は削平により消滅している。また、第5層以下は、部分的に2箇所を下層確認を行ったが、第6層が灰褐色粘質土(7)、第7層が黄色粘土(11)、第8層が灰色砂礫混土(12)である。

3 遺構

遺構は、室町時代の井戸、溝、ピットを検出した。

(1) 井戸

SE421 調査区中央で検出した井戸で、平面は径約1mの円形で、深さは1.4mまで確認した。埋土は第1層がにぶい黄色シルト、第2層が黄褐色砂質土、第3層が黄褐色粘質土、第4層がオリーブ褐色粘質土に明黄褐色粘質土混じり、第5層が明黄褐色粘質土に黒色粘質土混じりである。第5層まで掘削したが、それより下はピンボムで確認した結果、1.8mで堅い層に変化するようである。深さ0.8mから下の埋土、すなわち第4・5層には0.1～0.3m程の大きさの石が多数含まれていることから、石組み井戸が崩落した可能性がある。

(2) 溝

SD422 調査区の東端の第4層上面で確認した溝で、長さ4.5m以上、幅0.7～1.5m、深さ0.1m

遺構番号	現地調査時 遺構番号	中地区名	小地区名	長さ	幅	深さ	時代	出土遺物	備考
SE421	SK1	F	i2-2	経5m	——	1.4m以上	室町	土師器鉢(171)、陶器燈鉢(172-173)	
SD422	SK2	F	o2-2	4.5m以上	0.7-1.5m	0.1m	室町	土師器鉢(174-176)・羽釜(177)、陶器燈鉢、青磁碗(178)	

第13表 F地区遺構一覧表

遺物 番号	発 見 期 号	出土遺構 出土位置	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底 径 測台径	技法の特徴	胎土	肌色	色調	残存度	備 考
171	024-03	SE421	土師器鉢				ヨコナデ、ハケメ	やや密	黒	灰白	口縁部小片	探付層
172	023-02	SE421	陶器燈鉢				オサエ、ナデ	やや粗、砂粒含み	黒	灰白	口縁部小片	探付層
173	023-01	SE421	陶器燈鉢			13	オサエ	やや粗、砂粒含み	黒	灰白・赤黒	底辺部欠、下 半1/2	探付層
174	024-04	SD422	土師器鉢	23			ヨコナデ、ハケメ	やや密	黒	黄褐色	口縁部小片	探付層
175	025-02	SD422	土師器鉢	30			ヨコナデ、ハケメ、ケズリ	やや密	黒	灰白・黄緑	口縁・体部1/4	探付層
176	025-01	SD422	土師器鉢	33			ヨコナデ、ハケメ	やや密	黒	灰白・黄緑	口縁部1/4	探付層
177	025-03	SD422	土師器明差				ヨコナデ	やや粗	黒	灰白	口縁部小片	探付層
178	024-02	SD422	青磁碗				ロクロナデ	密	黒	灰白	口縁部小片	オリーブ灰色の釉
179	024-01	d2 P1	土師器皿	11	2.2		ヨコナデ、オサエ、ナデ	やや密	黒	黄褐色	ほぼ完形	

第14表 F地区出土遺物観察表

である。埋土は灰黄褐色粘質土で、炭化物が混入する。

(3) ビット群

調査区西半部でビットを相当数検出した。径0.2～0.3m前後のものが多く、掘立柱建物の柱穴の可能性もあるが、調査区が狭いこともあって、掘立柱建物や櫓などの柱穴として把握することはできなかった。

4 遺物

SE421 出土遺物

土師器鍋 (171) は口縁部の小片である。口縁端部を内側に折り曲げる。

陶器程鉢 (172・173) は、ともに破片である。(172) は口縁部の小片であるが、口縁端部外側に面をもつ。

(173) は体部下半から底部の破片で、底部は平底で、体部下半にはユビオサエの痕が顕著にみられた、内面は使用痕がみられる。(172) は灰白色、(173) はにぶい赤褐色をしており、あきらかに別個体である。

SD422 出土遺物

土師器鍋 (174～176) は、口縁端部を内側に折り曲げ、断面が三角形になるものである。口縁部はヨコナデである。体部外面は上面がハケメ、下半がケズリで、体部内面はナデである。

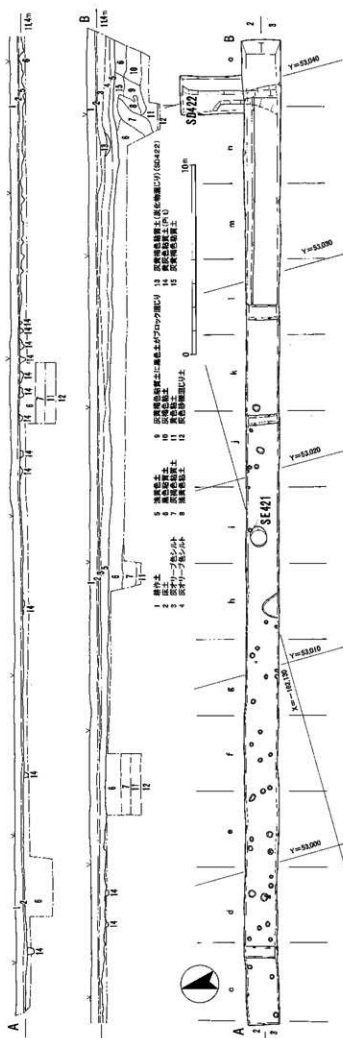
羽釜 (177) は、口縁部から鏝部にかけての小片である。口縁端部は上方に面をもち、鏝部は斜め上方を向く。外面に煤が付着する。

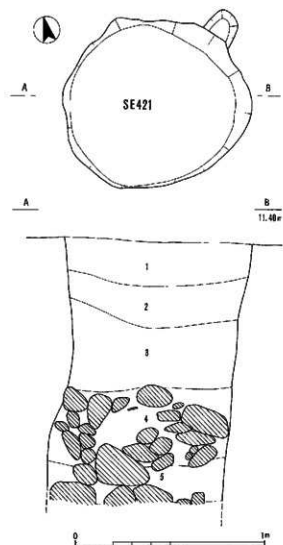
青磁碗 (178) は、口縁部の小片である。口縁部は外反し、端部は丸い。内外面ともオリブ灰色の施軸がみられる。

ビット出土遺物

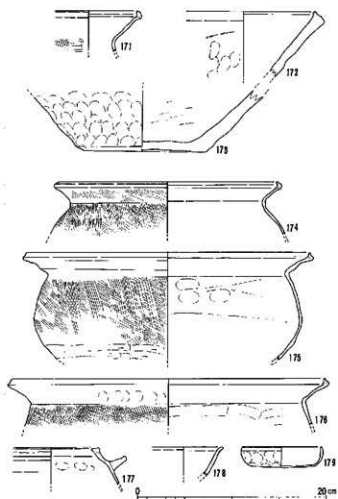
土師器皿 (179) は、口径11cm、器高2.2cmである。口縁端部はヨコナデで、体部から底部は、外面がオサエとナデ、内面がナデである。

(河北)





第28图 SE421实测图 (1:20)



第29图 F地区出土器物实测图 (1:4)

Ⅷ 科学分析

琵琶垣内遺跡および山添遺跡における放射性炭素年代測定

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回分析調査を実施する琵琶垣内遺跡および山添遺跡は郷田川左岸の氾濫原に立地する。両遺跡では、ともに奈良時代の遺物包含層より下位層準において、腐植質堆積物（黒ボク土）の堆積が確認されている。今回の分析調査では、この腐植質堆積物の形成年代に関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定（AMS法）を実施する。

1. 試料

(1) 琵琶垣内遺跡（第3次）

測定試料は、琵琶垣内遺跡第3次調査A-II地区土層断面において、奈良時代の遺物を包含するオリーブ黒色シルトの下位に認められた黒色シルト（黒ボク土）より採取された土壌試料1点（14C-2）である。試料は、黒色を呈する腐植質に富む土壌いわゆる黒ボク土の様態を呈する。

(2) 山添遺跡（第4次）

測定試料は、山添遺跡第4次調査C4地区土層断面で認められた黒色土層より採取された土壌試料1点である（14C-1）。試料は、ともに黒色を呈する腐植質土壌いわゆる黒ボク土の様態を呈する。

2. 分析方法

測定は株式会社加速器研究所の協力を得て、AMS法により行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and P.J. Reimer) を用いた。

3. 結果

(1) 琵琶垣内遺跡（第3次）

測定結果を第15表に示す。また暦年較正年代値を第16表に示す。

試料の測定年代（同位体補正年代）は14C-2が約7500年前の値を示した。この年代値は、既往の放射性炭素年代測定例によると、縄文時代早期に相当する年代である（谷口,2001）。今回の測定試料が土壌であることから、土壌化作用が行われた時期と、堆積年代が必ずしも一致するものではなく、また、土壌中には様々な由来を持った炭素分が取り込まれていることが推測される。これらのことから、今回の測定を行った黒色シルトの形成年代については、7500年前以降と幅をもって考えておく必要がある。今後、調査地点の地層累重状況や古地理に関する情報をもって、今回の結果を再評価する必要がある。

(2) 山添遺跡（第4次）

測定結果を第17表に示す。また暦年較正結果を第18表に示す。

試料の測定年代（同位体補正年代）は約5400年前を示した。今回の測定を行った土壌の成因については、調査地点の地層累重状況や堆積構造などから総合的に評価する必要があるが、土壌中には様々な由来を持った炭素分が取り込まれている可能性が考えられる。このことから、本地点の黒ボク土の形成年代については、今回の測定結果である5400年前以降と幅をもって考えるのが妥当であろう。今後、上記した古地理変遷に関する情報の他に、土壌層の上部と下部層準の年代測定の実施により、より詳細な土壌の形成年代に関する情報が得られるものと期待される。

引用文献

谷口康浩（2001）縄文時代遺跡の年代、季刊考古学第77号、p.17-21.

遺跡名	地点名	試料名	試料の質	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code.No.
琵琶垣内遺跡（第3次）	A-II地区	14C-2	黒ボク土	7490±40	-22.83±0.75	7460±40	IAAA-31152

第15表 放射性炭素年代測定結果（1）

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

試料	補正年代 (BP)	較正年代 (cal)		相対比	Code No.
14C-2	7493±42	cal BC 6412- BC 6369	cal BP 8362- 8319	0.403	IAAA-31152
		cal BC 6363- BC 6342	cal BP 8313- 8292	0.173	
		cal BC 6312- BC 6296	cal BP 8262- 8246	0.136	
		cal BC 6293- BC 6260	cal BP 8243- 8210	0.289	

第16表 暦年較正結果（1）

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and P.J. Reimer) を使用
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

遺跡名	地点名	試料名	試料の質	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code.No.
山添遺跡（第4次）	C4地区	14C-1	黒ボク土	5390±40	-23.26±0.86	5370±40	IAAA-31151

第17表 放射性炭素年代測定結果（2）

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

試料	補正年代 (BP)	較正年代 (cal)		相対比	Code No.
14C-1	5394±44	cal BC 4329- BC 4270	cal BP 6279- 6220	0.513	IAAA-31151
		cal BC 4262- BC 4222	cal BP 6212- 6172	0.343	
		cal BC 4185- BC 4165	cal BP 6135- 6115	0.144	

第18表 暦年較正結果（2）

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and P.J. Reimer) を使用
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

IX 結 語

近年の県営ほ場整備事業は、農林部局の埋蔵文化財に対する適切な保護対策がとられ、ほとんどが盛土対応により地下遺構が保護されている。このため、発掘調査は大面積を調査することが少なくなり、盛土が困難な水路部分だけを調査することが多くなっている。

今回の琵琶垣内遺跡の第3次調査も水路部分等の調査がほとんどであり、各調査区のひとつが細長い調査区となった。その結果、遺跡範囲内に縦横にトレンチを入れたような調査となっている。

琵琶垣内遺跡の第1・4次調査の報告書では、調査のまとめと検討として、今回の第3次調査の結果も含めて十分な検討がなされているので、遺跡全体の評価としてはそれを参考としていただきたい。

ここでは、第3次調査の結果判明したことを中心として、時代順に記述していきたい。

1 縄文時代の琵琶垣内遺跡

第1・4次調査では縄文時代の遺構は確認されおらず、遺物は第1次調査で24点が図示されている。今回の第3次調査でも縄文時代の遺構は確認されず、遺物はA地区の古墳時代の溝埋土や遺物包含層、あるいはB地区の遺物包含層から少量出土した。過去の調査とほぼ同様の傾向である。

A-II地区の黒色シルト(46)の放射性炭素年代測定の結果は7,500年前以降、すなわち縄文時代早期以降と考えられる値が出ている。したがって、この層、およびその上下の層が縄文時代の層と考えられるが、これらの層からは遺物は確認していない。一方、南に隣接した山添遺跡での黒色土層でも放射性炭素年代測定を実施しており、その結果は5,400年前以降と考えられている。今後はこうした結果も含めて、周辺の旧地形の復元や出土土器の年代検討を行うことが必要である。

2 古墳時代前期の大溝

古墳時代前期の遺構は、第1次調査ではSD28～30・96・97の大溝等が確認されており、第4次調査でも溝が何条か確認されている。今回の第3次調査でも、第1次調査で検出したSD30・97の続きをA地区で検出し、さらにSD206・208・222の南北方向に走る大溝を検出した。これらの溝は第1次調査の結果、灌溉用専水路と考えられた大溝であるが、その評価については、第1・4次調査の報告書に詳細に記述されているので、参照されたい。

3 古墳時代後半

古墳時代後半の遺構は、第1次調査で竪穴住居SH69・70の2棟や溝、土坑が確認されている。第3次調査では、A地区では若干数の溝を、またB地区では溝SD319・322・323などを確認した。しかしながら、その数はあまり多くなく、これは第1次調査と同様の傾向である。

4 奈良時代の竪穴住居と掘立柱建物

奈良時代の遺構は、第1次調査では竪穴住居SH71～74・76・77・79・106・116の9棟、さらに複数の掘立柱建物、井戸SE118、溝、土坑が確認されている。第4次調査では、掘立柱建物SB594と溝12条、土坑1基が確認されている。

今回の第3次調査では、A地区で竪穴住居はSH204・212・214の3棟、掘立柱建物はSB277～283の7棟を検出し、また溝や土坑も多数検出した。なお、遺構の項で奈良～平安時代とした遺構の多くは、出土遺物が小片であるため時期幅を持って判断したものである。したがって、これらの遺構の中には奈良時代に含まれる遺構が相当数あると考えられる。

第3次調査で検出した竪穴住居はA-II地区に集中しているが、その南側には第1次調査で検出した竪穴住居群が展開しており、あわせて建物群としてとらえることができる。3棟の竪穴住居は、いずれも平面形は、一辺3m前後の隅丸方形で、奈良時代に普遍的にみられるものである。竈の位置は、北辺にみられるものと東辺にみられるものがあり、SH212が北辺、SH214が東辺である。第1次調査で検出した竪穴住居は、北辺にみられるものがSH116、東辺にみられるものがSH72・73・76・106である。

第3次調査で掘立柱建物と判断した遺構は、SB277～283の7棟である。検出したのは柱列であるが、いずれも柱掘形の規模や間数から掘立柱建物と判断したものである。狭い調査区のために全容は確認できなかったが、これらの建物の東側に隣接する第1次調査区では対応する柱穴が検出されていないことから、建物は西側の調査区外に延びるものと考えられる。

7棟のうちSB277・278・279・281・282の5棟は方向がN8～11°Eと一定の規格性がみられる。このうちB278・279・281・282の4棟は、平面上近接または重複しているが、すぐ東側の第1次調査区で検出したSB145は棟方向がN12°Eであり、これも含めて一群としてとらえることができる。

また、SB283については、棟方向がN16°Eであるが、8m程東側には第1次調査で確認され奈良時代と判断されているSB146が位置しており、その棟方向はN14°Eである。2棟の梁行のラインは北側、南側ともに揃っており、同時期に存続していたと考えてよいであろう。

第3次調査で検出した当該期の溝は、南北またはそれに直交する東西方向のものと、斜め方向のものがあることから、二時期に分かれると考えられる。

奈良時代の琵琶壇内遺跡は、本格的な集落が形成された時代であるが、古代伊勢道、飯野郡条里、神宮、斎宮などとの関係や御厨の問題については、第1・4次調査の報告書に詳細に記述されているので、参照されたい。

5 平安時代から鎌倉時代

当該期の遺構は、第1次調査では掘立柱建物SB131や溝、土坑などを検出している。第4次調査では、井戸SE502と溝4条が確認されている。

今回の第3次調査では、A地区でSD202・229・247・248・265などの溝を確認し、山茶碗やロクロ土師器などが出土した。SD229は第1次調査で検出した掘立柱建物SB131の西側約8mの所に位置するものであり、区画溝の可能性はある。B地区では、溝SD331・336・337・338があり、土師器や山茶碗などが出土している。B地区の出土遺物は、遺物包含層も含めてほとんどがこの時期である。当該期の集落は、第1次調査のSB131とその周辺、第4次調査の井戸SE502周辺、さらに今回の調査のB地区周辺の3箇所に分かれていたと推定される。

6 室町時代

琵琶壇内遺跡範囲の南半部であるC・E地区およびF地区では室町時代の井戸や溝を検出し、当該期の土師器鍋・皿、陶器が出土している。一方、遺跡内の北に位置するA・B・D地区では中世の遺物はほとんど出土していない。琵琶壇内遺跡の中世の遺構、遺物については南に隣接する山添遺跡の中世遺構が、琵琶壇内遺跡の南半部にまで及んでいると考えられるべきである。琵琶壇内遺跡と山添遺跡の間には、現在の安楽町の集落があり、琵琶壇内遺跡F地区の西には現在の山下町の集落が隣接している。中世の集落は、一般に現集落と平面上重複していることが多いとも言われているが、こうした両集落の地下にも中世遺跡が埋蔵されていると考えるべきである。

(河北)

【註】

- (1) 『松阪市(旧松阪市内)遺跡分布地図』松阪市教育委員会 2005
- (2) 「国の機関等の開発計画の事前協議」『三重県埋蔵文化財年報』16 昭和60年度 三重県教育委員会 1986
- (3) a. 『松阪市豊原町 関浄寺遺跡』三重県教育委員会 1987(現地説明会資料)
b. 「関浄寺遺跡」『三重県埋蔵文化財年報』18 昭和62年度 三重県教育委員会 1988
c. 伊藤裕偉・新名強・奥義次『琵琶垣内遺跡(第1・4次)発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2006
- (4) 『平成8年度 三重県埋蔵文化財年報』8 三重県埋蔵文化財センター 1997
- (5) 奥野実『琵琶垣内遺跡(第2次)発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1999
- (6) 「発掘調査の概要」『平成12年度 埋蔵文化財年報』三重県埋蔵文化財センター 2001
- (7) 註(3) cに同じ
- (8) 註(3) cに同じ
- (9) 註(5)に同じ
- (10) 新田洋『山添遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1979
- (11) 坂倉一光『山添遺跡(第2次)』『山添遺跡(第2次)・里中遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター 1997
- (12) 浅生草司・中川明『天王山遺跡・天王山古墳群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2006
- (13) a. 松阪市史編さん委員会『松阪市史』第二巻 資料篇 考古 松阪市 1978
b. 下村登良男『南伊勢の前期古墳』『三重 — その歴史と交流』雄山閣 1989
c. 『三重県史』資料編 考古1 三重県 2005
- (14) 註(12)に同じ
- (15) 福田哲也『山添2号墳』松阪市教育委員会 1998
- (16) 柴山圭子・小濱学ほか『山添遺跡(第3次)発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2003
- (17) 奥野実・田上穂・坂倉一光『古柳通りB遺跡・古柳通り古墳群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2000
- (18) 下村登良男『神前山1号墳発掘調査報告書』明和町教育委員会 1973
- (19) 註(13) b. (13) cに同じ
- (20) a. 古木康夫『河田古墳群発掘調査報告』I 多気町教育委員会 1974
b. 川村輝夫ほか『河田古墳群発掘調査報告』IV 多気町教育委員会 1983
c. 下村登良男ほか『河田古墳群発掘調査報告』III 多気町教育委員会 1986
- (21) 審宮跡に関する文献は多数あるが、総合的に記述された文献のうち近年刊行された下記の3点のみをあげておく
a. 『審宮跡発掘調査報告』I 審宮歴史博物館 2001
b. 明和町史編さん委員会『明和町史』審宮編 明和町 2005
c. 泉雄二『伊勢審宮跡』(株)同成社 2006
- (22) a. 杉谷政樹『古代官道と審宮跡について』『研究紀要』第6号 三重県埋蔵文化財センター 1997
b. 伊藤裕偉『審宮寮・伊勢道・条里』『審宮歴史博物館 研究紀要』13 審宮歴史博物館 2004
- (23) 註(13) aに同じ
- (24) 註(13) aに同じ
- (25) 註(16)に同じ
- (26) 森川常厚・川崎志乃『丸野・中谷遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2003
- (27) 註(26)に同じ
- (28) 註(12)に同じ
- (29) 小濱学・森川常厚『細町遺跡』三重県埋蔵文化財センター 2000
- (30) 柴山圭子『大川上遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1999
- (31) 註(29)に同じ
- (32) 灰輪陶器の編年については、主として下記の文献を参考にした
a. 橋崎彰一ほか『愛知県豊田山西南麓古窯跡群分布調査報告』(1) 愛知県教育委員会 1980
b. 藤澤良祐『瀬戸古窯址群I』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』I 瀬戸市歴史民俗資料館 1982

- c. 斎藤孝正「猿投窯における灰釉陶の展開」『月刊 考古学ジャーナル』No211 ニュー・サイエンス社 1982
- d. 橋崎彰一ほか【愛知県古窯跡群分布調査報告】(Ⅲ)愛知県教育委員会 1983
- e. 前川要「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の様相」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅲ 瀬戸市歴史民俗資料館 1984
- (33) 山茶碗の編年については、主として下記の文献を参考にした
- a. 註(32) bに同じ
- b. 藤澤良祐「穴田南窯址群発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅱ 瀬戸市歴史民俗資料館 1983
- c. 藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター 1994
- (34) 中野晴久「近世常滑焼における甕の編年の研究ノート」『常滑市民俗資料館研究紀要』Ⅱ 常滑市教育委員会 1986
- (35) 本堂弘之「一般国道23号中勢道路(9工区)建設事業に伴う 六六B遺跡(A地区)発掘調査報告」三重県埋蔵文化財センター 1999
- (36) 角谷泰弘・新田洋・前川嘉宏・河北秀実「古市・中之地蔵町遺跡」『近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅶ 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1992
- (37) 泉雄二「寺垣内遺跡」『織永遺跡』三重県埋蔵文化財センター 2006
- (38) a. 田村陽一「北野遺跡」『平成2年度農業基盤整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告 一第2分冊一』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1991
- b. 竹田憲治・筒井正明・上村安生「北野遺跡(第2・3・4次)発掘調査報告」三重県埋蔵文化財センター 1995
- c. 竹田憲治ほか「北野遺跡(第5次)発掘調査概報」三重県埋蔵文化財センター 1996
- (39) 註(3) cに同じ

圖 版





A地区調査前風景（南から）



A地区調査後風景（南から）



A-1地区（西から）



A-1地区（西から）

PL 2



A-I地区(東から)



A-I地区東部(西から)



A-II地区北部(S D 220より北)(北から)



A-II地区中央部(S D 203より南)(北から)



A-II地区南部（SD219より北）（南から）



A-II地区南部（SD267より北）（南から）



A-III地区全景（北から）



A-IV地区北部（南から）



A-IV地区南部（SD225より南）（北から）



A-IV地区南部下層（北から）



A-V地区南北トレンチ（北から）



A-V地区東西トレンチ（西から）



SD208 (北から)



SD30 (南から)



SD30 (南から)



SH212 (南から)

PL 6



SH214 (北から)



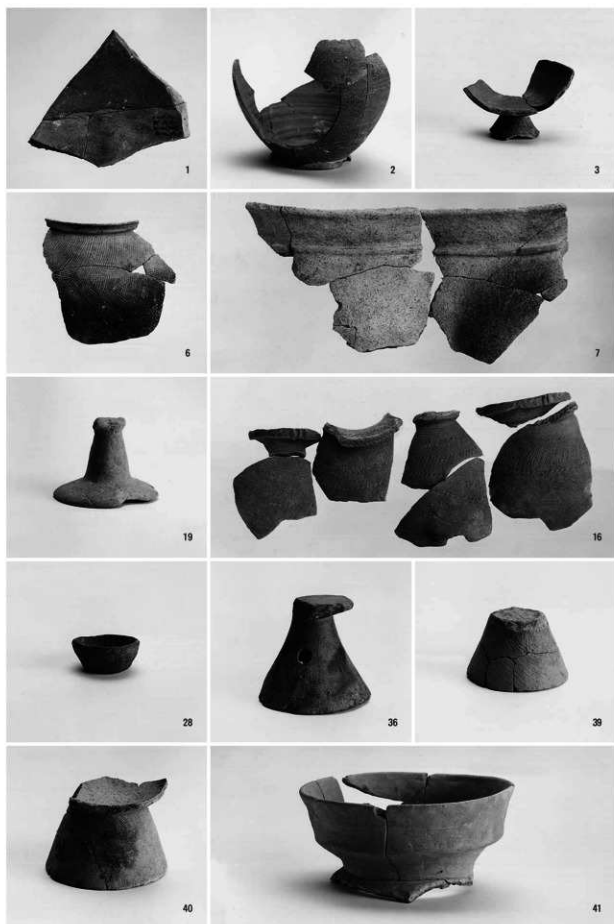
SB277 (北から)



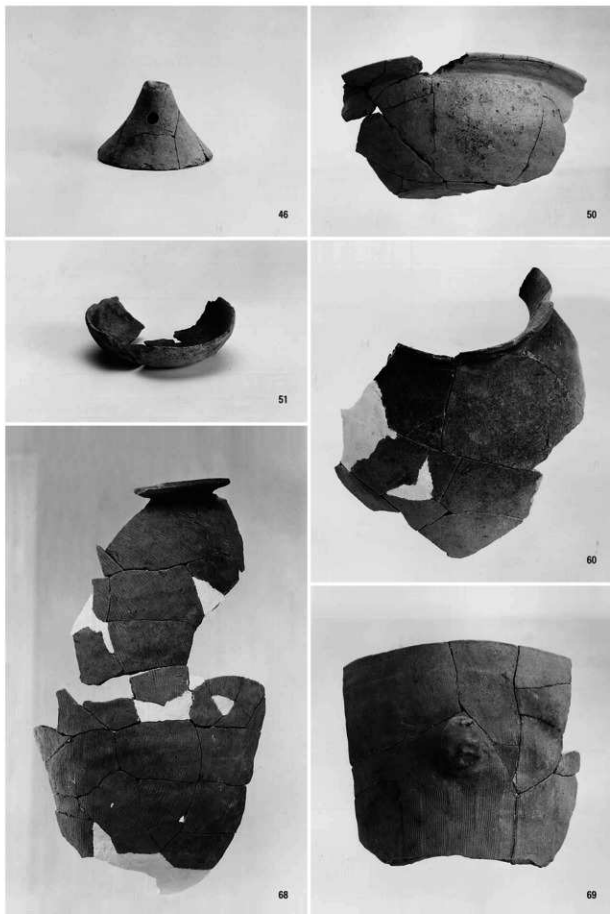
SB278 (北から)



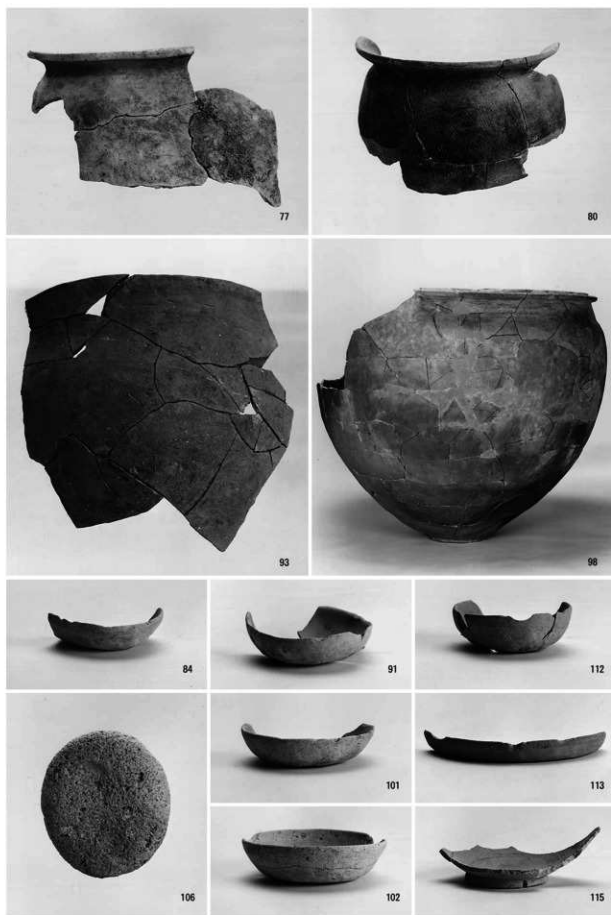
SB279 (北から)



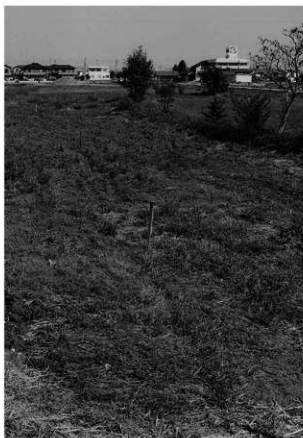
A地区出土遺物



A地区出土遺物



A地区出土遺物



B地区調査前風景（南から）



B地区調査後風景（南から）



B-1地区北端（東から）



B-1地区（南から）



B-II地区北部（北から）



B-II地区中央部（S D 322より南）（北から）



B-II地区中央部（S D 328より南）（北から）



B-II地区中央部（S D 334より南）（南から）



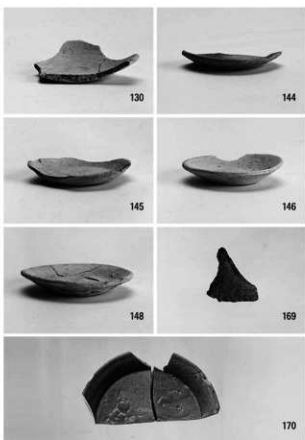
B-II地区南部（SD345より北）（南から）



B-II地区南部（SD342より南）（北から）



B-II地区南端東西トレンチ（東から）



B地区出土遺物



C地区調査後風景（西から）



E地区調査後風景（北から）



C地区調査前風景（西から）



E地区調査前風景（北から）



C-1地区全景(南から)



E-1-1地区およびC-1地区(北から)



C地区全景(西から)



C-1地区全景(西から)



E-II地区 (西から)



E-III地区 (南から)



E-I地区およびC-I地区 (北から)



E-III地区 (北から)



D地区調査前風景（北から）



D地区調査後風景（北から）



D-1地区（北から）



D-1地区（南から）



D-Ⅲ地区（南から）



D地区作業風景



F地区調査前風景（西から）



F地区調査後風景（西から）



F地区（西から）



F地区（東から）



F地区出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	びわがいとせき(だいさんじ) はっくつちようさほうこく							
書名	琵琶垣内遺跡(第3次)発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	286							
編著者名	河北秀実・小濱学・川合圭子・宮田勝功							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 Ⅲ 0596-52-1732							
発行年月日	西暦 2007年 3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ 市町村	一 遺跡番号	下 北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
琵琶垣内遺跡	三重県松阪市 豊原町・山下 町・安楽町	204	13A-26	34度 42分 47秒	136度 34分 43秒	20011015 ～ 20020227	1,570	県営ほ場整備事業(柳田上地区)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
琵琶垣内遺跡	集落跡	縄文時代 古墳時代 奈良時代 平安～鎌倉時代 中世	溝 竪穴住居・掘立柱 建物・溝・土坑 溝 井戸	縄文土器 土師器・須恵器 土師器・須恵器 土師器・山茶碗 土師器・陶器				
要 約	<p>古墳時代前半の大溝を数条検出したが、このような大溝は第1次調査でも確認されているものであり、その広がりを確認することができた。</p> <p>奈良時代の竪穴住居3棟、掘立柱建物7棟を検出したが、規模や棟方向に一定の規格性がみられ、第1次調査で確認している竪穴住居や掘立柱建物を含めて、建物群として把握することができた。</p> <p>平安時代末から鎌倉時代の溝を多数検出、当該期の住居エリアを推定し得る資料となった。</p> <p>室町時代の井戸等を検出したが、中世集落は南に隣接する山添遺跡でも確認されており、集落の広がりを推定することができた。</p>							

三重県埋蔵文化財調査報告286

琵琶垣内遺跡（第3次）発掘調査報告

2007. 3

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 光出版印刷株式会社
